黒衣の少年

カイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒衣の少年

【Ｎコード】
Ｎ９２４０Ｋ

【作者名】
カイザー

【あらすじ】
カイザー・アルベルト。彼は幼くしてミッドでは天才と言われている人物だった。そんな彼が休暇で第９７管理外世界・地球の海鳴市でパートナーのセレナード、使い魔のヴォルフと来ていた。そんな彼がそこでさまざまな事件に関わっていく物語である。

主人公紹介

名前：カイザー・アルベルト

性別：男

年齢：９歳

身長：１４０ｃｍ

髪：銀色

眼：ファイアレッド

容姿：とてもかっこいい（１０人中１０人が振り返るほど、自分ではそこまでかっこいいとは思ってない

魔力光：銀

魔力量：ＳＳＳオーバー

総合ランク：ＳＳＳ

レアスキル：絶対防御

デバイス：ブラックフォース

１ｓｔフォルム：ロッド型

２ｎｄフォルム：剣型
３ｒｄフォルム：銃型

ユニゾンデバイス：セレナード

身長：３０ｃｍ（アウトフレームすると１５０くらいになる）

容姿：かわいい（１０人１０人振り返る）

魔力量：ＳＳ

総合ランク：Ｓ＋

セレナードはカイザーのことが大好きで最高のパートナーと思っている

使い魔：ヴォルフ（狼）

総合ランク：Ｓ

カイザーに瀕死状態のときに発見され使い魔になった。カイザーのことは主と呼んでいる

カイザーは幼いころから鍛錬しており、体術・剣術・暗殺術などができ自分で魔法を作ることもできる

主人公の魔法&剣技（無印）

魔法

シルバーレイン：：ランクＡ

砲撃を真上に撃ち、雨のように降らせる

ロックシューター：：ランクＡＡ

相手をロックオンし、当たるまで追いかける。

ジェネティックバスター：：ランクＡＡＡ

砲撃魔法、

ジャスティスブレイカー：：ランクＳＳ

収束魔法、ロッドの先に魔力を集め撃ち放つ。

アースブレイカー：：ランクＳＳＳ

最強の魔法、その威力は次元震を引き起こすほど。

リフレクト：：レアスキルの応用技、相手の魔法を弾き返す。

ナイトメア：相手が一番見たくない悪夢を見せる

ブレイクバスター：ランクS
相手のシールドを破って貫通する砲撃

剣技

瞬撃：一瞬で懐に入り込み切りかかる

幻撃剣：幻術魔法を合わせた技

第一話

海鳴市の森林に一人の少年と妖精のような３０ｃｍくらいの少女、大きな狼がいた。
彼はカイザー・アルベルト、その肩に乗っているのはユニゾンデバイスのセレナード、そして使い魔であるヴォルフだ。彼らはログハウスの中で休暇を楽しんでいた。

「ねえ、カイなにかしましょうよ～」

セレナードはやることがなくて暇なのか肩の上でが騒いでいた

『ん～そうですね』

「こら、主にあまりわがままを言うな」

ヴォルフがわがままを言うセレナードに注意を促している。
ヴォルフはもう少しやわらかくなったほうがいいですかね？まぁ、セレナードは少し甘えすぎですね。今度なおしましょう

『まぁまぁ、ヴォルフも今はゆっくりしましょう。せっかくゆっくりできるのですから』

「主がそういうなら」

ヴォルフは不満そうだが納得した。納得できないのもわかりますがセレナードのわがままも今に始まったことじゃないですからね。

『・・・・ん?、セレナード、ヴォルフ、この世界には魔法文化はありませんでしたよね』

「そうだけど、どうかしたの?」

「どうかしましたか?主」

二人とも不思議そうに聞いてきた。二人とも気づいてないんでしょうか?

『今少し魔力反応があったんですよ。セレナード少し調べてみてくれませんか』

「わかった」

そういって探知魔法を使って調べ始める

「んーとね、ここから少し遠いけど魔導師がふたりいるみたい。両方ともＡＡＡランクくらいかな？」

『ありがとうございます、セレナード』

礼を述べて頭をなでてあげた。

「・・・んぅ」

気持ちよさそうに目を細めていた。セレナードはこうされるのが好きですね、していて飽きませんよ

「どうしますか主」

騒ぎになったら面倒ですし、いきましょうか

『じゃあ、行きましょうか。ブラックフォース起きてください』

「・・・・・ＯＫ」

カイザーのデバイスであるブラックフォースが点滅し小さく電子音が響いた

『ブラックフォース、セットアップ！』

「・・・Ｓｅｔ　ｕｐ」

カイザーは光に包まれ、黒い黒衣を羽織って死神のような衣装になった。そして足下に魔法陣を展開する

『・・・転移』

三人は転移しっていった

第二話

なのは視点

すずかちゃんの猫がジュエルシードにより巨大化していました

「うわぁ～大きいね～どうしてこうなったのかな？」

「たぶん、猫が大きくなりたいって願ったんだと思うよ」

それにしても大きいな思っていると金色の魔力弾が猫に向かって飛んでいきました。魔力弾の飛んで来た方を見てみると電柱に金髪の少女が立っていた

「レイジングハート！」

「ＯＫ、・・Ｓｅｔ　ｕｐ」

バリアジャケットを纏って猫のほうに飛んでいくと今度は多くの金色の魔力弾が飛んできました

「レイジングハート」

「Ｗｉｄｅ　Ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

なんとか防いだけど猫の足にひとつ当たって猫の上にいた私は少しよろけてしまいました

「（もう驚かなくなってきたな）」

ユーノはなのはの実力を見てももう驚かなくなっていた

「・・・魔導師」

金髪をした少女が木の上に下りてきました

「同系の魔導師、ロストロギアの探索者か」

金髪の女の子がしゃべっていると銀色の魔法陣が展開され誰かが現れました

『よっと到着しましたね』

カイザー視点

『よっと到着しましたね』

「はい、無事についたようです～」

「そのようですね、主反応のあった魔導師はあのふたりのようです」

カイザー・セレナード・ヴォルフが無事に転移し終わり、まわりを見渡すとふたりの少女がこちらを見ていました

「・・・何者ですか。じゃまをするなら容赦しません」

そう言って黒いマントを身につけている金髪の少女がこちらに自身のデバイスをこちらに向けていた。

「あなたはだれなの？」

いきなり現れた人物になのははは警戒をあまりせずにまず、名前を教えてもらおうと聞いてきた。カイザーも聞かれたのに答えないのは失礼と思って質問に答えた

『僕はこの世界で休暇を楽しんでいた魔導師です。魔力反応があったので来てみたのですが来て正解のようですね。なかなか面白そうな代物が見れそうです。』

「カイ～あそこにいる猫から強い魔力反応があるよ」

周りを見ていたセレナードが巨大な魔力を感じて向こうにいる大きな猫のほうを指さした。

『そうですか、ではそちらに向かいましょう』

フェイト「させない！」

猫の方に歩いて行こうとするが金髪の少女(フェイト)がデバイスを鎌の状態にして自分の目的の物を奪わせまいとデバイスであるバルディッシュを振りおろす。

ガシッ！

「くっ！」

しかし、振り下ろしたバルディッシュはカイザーの前に出たヴォルフが主を守るべく、それを素手で止め、カイザーを守る

「主ここはお任せを・・・はあぁぁぁ！！！」

そしてフェイトをバルディッシュごと引き寄せ、ヴォルフはフェイトの腹に蹴りを食らわせて吹き飛ばし足止めしていた。カイザーはヴォルフの実力なら負けることはないと判断をして巨大な魔力を持つ猫の元へ歩いて行った。その後ろではフェイトとヴォルフがスフィアを生成して打ち合っていた。

『これですか、とりあえず封印処理をしておきましょう』

青い宝石の封印処理を終えてこれで暴走することはないと思っているところに後ろから先ほどカイザーに名前を尋ねてきた少女(なのは)がフェレットを方に乗せてこちらに近づいて来た。

「あの～それは危険なものなので渡してくれませんか？」

『どうしてですか？』

なのはの問いに対してカイザーがなぜだと言うと肩に乗っているフェレットがカイザーの持っている青い宝石の事を説明し始めた。

「それはロストロギア・ジュエルシードといってとても危険なものなんです。お願いします、だからジュエルシードを僕達に渡してください！」

フェレット（ユーノ）はそういって頭を下げてきた

「カイ、どうする？」

『ロストロギアですか。やはりなかなか面白い代物でしたね、残念ですがこのジュエルシードに少し興味が湧きましたのでこれはいただいていきます』

「そんな！どうして！それはもともとユーノ君のなのに」

カイザーはなのはの言うことを無視してセレナードと共にヴォルフがフェイトと戦闘していた場所に所に向かって歩いて行く。

『勝負は余裕のようでした。ヴォルフ、行きますよ』

先ほど戦闘をしていたヴォルフとフェイトのほうに目をやると格好は対照的だった。ヴォルフは服に少し泥がついている程度だったがフェイトはそれとは真逆の服装がボロボロで息を切らしてバルディッシュを支えにして何とか立っている状態だった。

やはり、そうなりましたか。まあ、ヴォルフはランク的に言えばSランクありますからね。

「了解しました」

ヴォルフはフェイトとの戦闘は少し手ごたえがあったのか、どこか返事してきた声が満足げのように聞こえた。

「今度は負けません」

フェイトも戦闘で負けたことが悔しいのか、ヴォルフを見ながらそう宣言してこの場を去って行った。

『それでは二人ともジュエルシードを集めているなら僕達とまた会うことがあるでしょう。また会いましょう・・・転移』

三人の足下に銀色の魔法陣が展開されてジュエルシードを持って転移していった

「彼らはいったい何者なんだ。さっきの彼女もかなりの実力者のようだったけどまるで歯が立たないなんて」

カイザー達が転移するのをなにもできずにただそれを見てユーノが一人そう呟いていた

第二話（後書き）

戦闘シーンがうまくかけません。アドバイスがあったらください

第三話

ログハウス

『到着です。早速ですがこのジュエルシードを解析します。セレナード手伝ってください、ヴォルフは戦闘で疲れたでしょう。ですので休んでいてください』

「ではお言葉に甘えて休ませていただきます。」

ヴォルフはそう言うとソファーで横になって眠り始めた

「・・・・ＺＺＺ」

『疲れていたんですね。では研究室にいきましょう』

「はーい」

セレナードはカイザーの肩に乗って元気に返事をした

研究室

ピ・ピピ・ピッピ・ピピピ

『どうです、ブラックフォース、セレナード大体こんなものですか』

「・・Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」

「ＯＫですね」

ブラックフォースとセレナードに手伝ってもらい、ジュエルシードの詳細解析が終了した。

『願いをかなえる石、しかも一つで次元震が発生するエネルギーを持っているんですか、確かに危険なものですね。保管しておきますね』

そしてブラックフォースの中に保管し、厳重に封印を重ねた。それから広域の精密な探知魔法を使用してジュエルシードが全部で２１個存在することが判明したのである。

『さて、解析も終わりましたし僕たちも寝ましょうか』

「あたしも一緒に寝る～」

セレナードがそう言って甘えるように言ってくる。今日は結構手伝ってもらいましたし、たまにはいいですね

『わかりました、じゃあいきましょう』

そして二人は一緒にベッドに入り、数分後には寝息を立てて眠っていた。

三日後

『今日はみんなで温泉に行きましょう』

「本当！やったー、温泉行きたかったんだ。」

「ヴォルフ、人型になってください。温泉に一緒に入りましょう」

「わかりました」

さすがに狼の状態で温泉に連れて行くわけにも行かないのでヴォルフに変身してもらうことになった。すると光に包まれて、それが収まったら紫の髪の１９０くらいの青年になった

温泉

『さあ、温泉に着きました。中に入りましょう』

「は～い」

セレナードは今アウトフレームしていて身長１５０ｃｍくらいになっている。そして温泉は混浴ではないと言ったらものすごく断念がっていた

「いきましょう主」

僕とヴォルフは男湯へ、セレナードは女湯へ入っていった

男湯

『ヴォルフ、いいお湯ですね』

「そうですね主」

ヴォルフといろいろ話してお風呂をあがった。そして夜になり強い魔力を感じ取り何かと思ったら、ジュエルシードが発動した魔力反応だった。

「カイ～どうする？」

『今回は見に行くだけにしましょう』

「わかりました」

二人に今回は何もなければ手を出さないと言った後、魔力反応のあるところの中心地に浴衣姿で向かって行く。そして現場に着くと二人の魔導師、なのはとフェイトが空戦を繰り広げていた。

「っ・・！」

なのははフェイトから繰り出される鎌の攻撃を必死になりながらかわしていく。そして反撃をするが当たらず、簡単に避けられてしまう。

「賭けて互いのジュエルシードを一つずつ」

フェイトがジュエルシードを互いに掛けて勝負だと言うがなのはは何も言わずに戦っている。そしてユーノとアルフのところにカイザー達が歩いて行くとユーノがこちらに気づいたようだ。

「あなたは！」

「あんたたちかい？フェイトのいってたのは、ジュエルシードをいただくよ」

そしてアルフもこちらに気がついてカイザーの持っているジュエルシードを奪おうとしていた。

『今回は何もしないつもりだったんだけどな』

カイザーはそう言いつつバリアジャケットを展開し、黒衣の衣装に身を包みいつでも迎撃出来る体勢になった。

「ごちゃごちゃうるさいよ」

カイザーの言うことをどうでもいいと足蹴りにして勢いをつけて右拳を振りかぶってこちらにアルフが飛び掛ってきた。

『ブラックフォース、防御です。』

「ＯＫ・・・Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

ガキン

「な！っ」

しかし、カイザーのプロテクションはびくともしない。アルフはカイザーのプロテクションの強度に驚いて、いったん距離を取って後退する。

「なんていう硬さだ、まるでびくともしない」

ユーノも同様にプロテクションの強度の高さに驚いていた

「カイ～あっちは決着ついたみたいだよ」

そう言われてセレナードが指さしているほう見るとフェイトがなのはにバルディッシュを突きつけているところだった。

「Ｐｕｌｌ　ｏｕｔ」

レイジングハートがジュエルシードをフェイトに渡していた

「レイジングハートなにを・・・」

「きっと主人思いのいいデバイスなんだと思う」

それを見たカイザー達はなのは達のもとに歩いて行く。カイザー達をを見たフェイトはバルディッシュを構え警戒をし始める。

『そう警戒しないでください、今回はここにきたのは偶然なんですから』

「そうだよ～」

「・・・・・」

カイザーがそう言って、後ろにいるセレナードとヴォルフもなにもしないと手を動かしてジェスチャーした

「フェイト、あいつらやばいよ。あれは強さの格が違うよ」

すると先ほどまでカイザーと戦っていたアルフがフェイトの横にやってきて先ほどの戦闘のことを伝えるとフェイトはその言葉を聞いて頷き、なのはに向かって言い放つ。

「もう私たちの前に現れないで、今度はとめられないかも知れない」

そう言いフェイトとアルフががその場を去ろうとしたときになのはが大きな声で話しかけた。

「名前、あなたの名前を教えて」

「フェイト、フェイト・テスタロッサ」

フェイトが自分の名前を言うとカイザーもフェイトに向かって自分の名前を教えた。

『僕の名前はカイザー・アルベルトです、覚えておいてください』

「・・・カイザー」

そう名前を呟いて二人はその場を去って行った。

『そういえば、君の名前は？』

そう言えば自分たちは目の前にいる少女の名前を知らなかった事に気がついて名前を尋ねた。

「私は高町なのはです。」

「僕はユーノ・スクライヤです」

『そうか、まさかとは思ったけどスクライヤの一族だったのか。一応二人も紹介してください』

「私はセレナードだよ、カイザーのパートナーです。」

「主の使い魔のヴォルフだ」

そして取り合えず全員の自己紹介を終えるとなのはが自分の思っていることを尋ねてきた。

「どうしてカイザーさんはジュエルシードを集めているんですか」

その問いに対してカイザーは素っ気無く答える

『前にも言ったように興味があったからです』

その答えを聞いてやはり、納得がいかないと言うような表情をしている。そしてなのはは前と同じようなことを言ってきた

「だから私たちに渡してください、それは危険なものなんです」

カイザーは内心いい加減しつこいですねと思いながら次の言葉を述べる。

「もし、渡さなかったら?」

そう言った時、なのはがレイジングハートをこちらに向けるがそれを見ていたユーノがなのはの行動を止める。

「やめなよ、なのは」

『用がないならもう行きますね』

カイザーのあとに続いてセレナードとヴォルフもついて行き、この場を後に自分たちの泊まっている部屋に戻って行った。

「ユーノ君、どうして止めたの。取り返せたかもしれないのに」

ユーノは顔を俯かしてなのはに事実を述べる。

「今のなのはじゃ絶対に勝てないからだよ」

「そんなのやってみなく「無理だよ！」ちゃ」

ユーノははなのはの言葉を遮ってさらに先ほどの続きを説明にしていく。

「フェイトって子ですら使い魔にまったく歯が立たなかったんだよ、実際に見てみたけどレベルが違いすぎる」

「・・・・」

その説明を受けて事実そうなのだから、言い返すことが出来ず、なのはは黙って俯いてしまった。

「とにかく早く戻ろう。結界を張らなかったせいで宿に電気がつき始めてる」

「そうだね。」

そして二人も周りに気づかれて騒ぎにならないうちに部屋に戻って行く。その途中、なのはは何かを考えながら戻っていった

第三話（後書き）

やっぱり難しいです、へんなところがあれば行ってください

第四話

僕は今、二人の魔導師フェイトとなのはの戦闘が始まろうとしているのを少し離れたところから見ています。ジュエルシードが若干魔力に反応していますが気づいてないみたいです。

「前は自己紹介できなかったけど、私なのは、高町なのは」

フェイトはバルディッシュを鎌状態にし、なのはの言葉を無視して斬りかかった

「Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ」

なのはは空中に避けてフェイトの攻撃を回避して、戦闘を開始した。

フェイトはなのはの後ろに回り込んで斬りかかろうとしたがＦｌａｓｈ　Ｍｏｖｅで回避され、なのははフェイトの後ろに回り込む

「ディバインシューター」

ディバインシューターを放つがシールドで防がれてしまった。そしてなのはは再びフェイトに話しかける。

「フェイトちゃん！話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらない事もきっとあるよ！ぶつかり合ったり、競い合う事になるのは、それも仕方ないのかもしれないけど、だけど、何もわからないままぶつかり合うのは、私、嫌だ！」

フェイトはなのはが話している間なにもせずに言うことを黙って聞いていた

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから、ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君はそれを元通りに集め直さないといけないから。私はそのお手伝いで、だけど！
お手伝いをするようになったのは偶然だったけど…、今は自分の意思で、ジュエルシードを集めてる！
自分の暮らしている町や、自分の周りの人たちに危険が降りかかったら嫌だから！
これが…、私の理由！」

フェイトに自分の理由を叫んだ、カイザーは自己満足なんでしょうかねと思いながら聞いていた

「私は・・・「フェイト！答えなくていい」！」

フェイトがなのはに自分がジュエルシードを集めている理由を言おうとした瞬間、下にいたアルフが叫びフェイトの言葉を遮った。

「優しくしてくれる人たちのとこで、ぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンチョになんかに、何も教えなくていい。私たちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

それを聞いたフェイトはすぐに表情を戻し戦闘態勢に入った。しかし、なのははそれを聞いて驚き、しばし固まっていた。

「・・・」

「なのは！」

ユーノの声でハッとなり、ユーノに自分は大丈夫だと言って答えたがかなり複雑そうな表情をしている。

「大丈夫」

そしてフェイトがその隙を突いてジュエルシードのほうへ突っ込んで行く。なのはもそれを追いかけるようにあとを追い、同時にジュエルシードを封印しようとしてデバイスどうしがぶつかり、それを機にしてジュエルシードが暴走し、両方のデバイスに罅がはいって吹き飛ばされる。フェイトが体制を立て直しジュエルシードを素手で封印しようとしていた。

『素手で封印しようなんて無茶を、仕方ありませんね』

カイザーは無謀なことをするといってフェイトの方に歩いていった。

「・・・あなたは」

そしてカイザーが自分のもとに歩いてきているのに気づいてフェイトはジュエルシードを掴み強引に封印しながらカイザーを見て警戒を露わにする。

『フェイト、ジュエルシードは僕が封印してあげますよ。大丈夫です奪ったりしましませんから』

カイザーはまあ、今封印しておかないと後々面倒ですしね、と思いながらブラックフォースを起動させて封印の術式を展開し、封印準備に入る。

『ブラックフォース、頼みます』

「・・・ＯＫ」

そして封印術式が発動し、ジュエルシードの膨大な魔力を押さえ込みいとも簡単に封印処理を施した。
それを見ていた、四人、なのは・フェイト・ユーノ・アルフはあまりのことにびっくりしてポカーンとしていた。

『はい、フェイトどうぞ』

「・・・ありがとう」

そしてフェイトはカイザーに礼を述べてジュエルシードを受け取る。
カイザーはその手を見てケガをしていることに気づいた。

『フェイト、手をケガしてるようですね。ついでですから治してあげましょう。』

そう言ってフェイトとバルディッシュに回復魔法をかけていた、まあ素手で封印しようと頑張ったサービスですと思っていた。

「・・・すごい」

その回復魔法を見て、そう呟きながら回復魔法をかけてもらった自分の手とバルディッシュを見ていた

「バルディッシュ、大丈夫」

「・・・Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ」

「カイザー、どうして渡したんだ！」

ジュエルシードをフェイトに渡したことに対してユーノが怒鳴り込んできた。おそらく、敵であるはずのフェイトになぜジュエルシードを渡したのだと言う理由だろう。

『ジュエルシードをボロボロになりつつも素手で封印しようとしていたのに、僕が取ったら申し訳ないだでしょう?』

それを聞いてユーノは何も言うことが出来ず、黙って俯いてしまった。

「・・・どうして、カイザーは私を助けてくれたの?」

フェイトも敵であるはずの自分をどうして助けてくれるのかがわからずに疑問になっていたようだ。

『ただの気まぐれですよ』

「・・・／／／／」

その理由を微笑みながら答えてあげるとカイザーの笑みを見たフェイトは顔が真っ赤になってしまった。そしてアルフが近づいて来た。

「大丈夫だったかいフェイト。体に異常ないかい」

「大丈夫、カイザーが治してくれたから、帰ろうアルフ」

「カイザーだったね。フェイトの怪我治してくれてありがとね」

『気にしないでください』

そしてフェイト達はこの場を去って行った。

『なのは、ついでに貴方のデバイスも直してあげましょう』

なのはに近づいて行き、レイジングハートにも回復魔法をかけている間にユーノが問いかけてきた。

「貴方は味方なんですか，それとも敵なんですか」

『どちらでもありません、なのはデバイス直りましたよ』

ユーノの問いかけに答えている間にレイジングハートがもとの状態に戻ったのでなのはに手渡した。

「ありがとう、レイジングハート調子はどう？」

「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ」

『じゃあ、僕はいきます』

そう言ってカイザーは暗闇に入って行き、姿を消していた。なのははアルフがフェイトにいったことを考えながら帰って行った。

ログハウス

『今、戻りましたよ二人とも。』

「おかえり～」

「おかえりなさい主」

帰って来たところセレナードとヴォルフの二人が出迎えてくれた。

「今日は何してたの～？」

『今日はなのはとフェイトの二人の戦いを見てきましたよ』

「いきたかったな～」

それを聞いてセレナードは顔を膨らまして羨ましがったいた。そして今度一緒に行きましょうと言って頭を撫でてあげるととても気持ちよさそうにしてウトウトとし始めた。

「んぅ～～～～～ＺＺＺ」

そして幸せそうな表情をして眠ってしまった

『ヴォルフ、おそらく時空管理局が出てくる可能性があります、警戒しといてください』

「了解しました。」

今回のジュエルシードの暴走した魔力で時空管理局が気づいたと判断してヴォルフに警戒を促した。

『今日は疲れたからもう寝ますね。さて時空管理局、次元世界を管理しようとする組織。それに自分たちが罪を犯しても自分たちで罪を裁くことが出来るから無罪にもすることが出来る。そんな組織が次元を管理しようとは愚かですね。誰がこちらに来るのやら』

そしてベットに入り眠りについた。

第五話

僕・セレナード・ヴォルフは新しい術式を考えといると、ジュエルシードが発動するのを確認した。

『ジュエルシードが発動したようですね、今日は三人でいきますよ』

「了解～」

セレナードはカイザーの肩に乗り元気よく言った

「わかりました」

ヴォルフは人型になり、カイザーの横に並んだ

『ブラックフォース、セットアップ』

光に包まれ黒衣の死神のような格好になったカイザーを中心に銀色

の魔方陣が現れ、海鳴臨海公園に転移していった

海鳴臨海公園

なのはとフェイトが木の化け物と戦っていた

「今回のやつはいっちょまえにバリアを張るのかい」

フェイトは自分に迫り来る木の根をバルディッシュの鎌の部分を飛ばして切り裂いていた所に銀色の魔方陣が現れ、そこからカイザー・セレナード・ヴォルフの三人が出てきた。

『なのは、フェイト。こいつは僕たちが相手をしてあげます。だから見ていてください。ジュエルシードは好きにして結構です』

カイザーにそう言われたなのはとフェイトはその場から下がりカイザー達の戦闘を見ていた。

『ヴォルフは木の根を防いでください、セレナードはあれの動きを

止めてください』

ヴォルフとセレナードは頷き、ヴォルフは自分の回りにスフィアを展開し迫ってくる木の根をすべて迎撃する。セレナードは木の化け物の真上に行き、真下に魔法を放った。

「ブリザード」

そしてその魔法によって木の化け物を氷漬けにされ、完全に身動きがとれなくなった。カイザーはその間に砲撃魔法の準備に入り、チャージが完了した。

『ジェネティックバスター』

そして砲撃が発射され、木の化け物はオオオォと叫んで砲撃が直撃して消滅し、その場にはジュエルシードだけが残った

「あいかわらず、すごいねぇ」

「・・・うん」

「ほぇぇ～ほんとにすごいね、ユーノ君」

「ほかの二人も相当だね」

フェイトとアルフ、なのはとユーノは三人の連携プレイやカイザー本人の強さを見て、相変わらずものすごい実力者だと再認識した。

『とりあえず、封印処理をします。ブラックフォース』

「ＯＫ」

そしてジュエルシードの封印処理が終了して約束通り、自分はそれを捕らずそのままの状態で空中に置いておく。

『約束通りジュエルシードはお渡しします。二人で後は好きにしてくれて結構ですよ。』

そう言ってセレナードを肩に乗せ、ヴォルフと一緒に少し離れた。

そしてカイザーはある一点を見つめており、その場所には隠蔽され

て隠されているサーチャーがあったがカイザーは違和感を感じ取ってそこにあることに気づいた。

「・・・ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。夕べみたいな事になったら、私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だもんね」

「・・だけど、譲れないから」

「Ｄｅｖｉｃｅ　ｆｏｒｍ」

フェイトはバルディッシュを構えた

「私は・・、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど」

「Ｄｅｖｉｃｅ　ｍｏｄｅ」

なのはもレイジングハートを構える。

「私が勝ったら・・・ただの甘ったれた子じゃないとわかってもらえたら、おはなし・・聞いてくれる？」

そしてお互いに突っ込んでデバイスを振り抜いたがそこに乱入者が現れた。

「ストップだ！」

そこにはいきなり黒い格好をした男の子が現れ、バルディッシュを杖で、レイジングハートを素手で受け止めて二人の攻撃を止めていた。

「ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「時空管理局・・・」

やっぱり十中八九出てきましたか。やはり先ほどのサーチャーは管理局のもの、このままフェイト達が捕まるのは何か嫌ですね。しば

らく様子を見ることにしますか。

「まずは、二人とも武器を引くんだ」

そう言ってクロノの言葉に従って二人は地面に降りてきた。

「このまま、戦闘行為を続けるなら・・・」

注意を述べている途中に突如オレンジ色の魔力弾がクロノを襲った。しかし、クロノはそれを冷静に手を向け魔方陣を発動させはじき飛ばした。

「フェイト、撤退するよ」

アルフは魔力弾を生成し、クロノに放っていく。その隙にフェイトはジュエルシードを確保しようとジュエルシードに向うが手を伸ばしてもう少しのところで青色の魔力弾が当たる直前カイザーが現れた

『・・・ブラックフォース』

小さく誰にも聞こえないように呟く。

「・・・Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

そして発生したプロテクションによってクロノの魔力弾はいとも簡単に防がれる。そしてカイザーはジュエルシードを手で掴みフェイトに投げ渡した

『ここは防いであげますから、行ってください』

フェイトはなぜ自分にジュエルシードを渡してくれるのかがわからずに混乱していた。敵であるはずの自分をなぜ庇うのかもわからずに。

「でも・・・」

もうまどろっこしい、仕方ないですね。と思いながらフェイトの頭を撫でてあげた。

『フェイト、僕があんなやつに捕まると思いますか？』

その問いにフェイトは首を横に振る。先ほどの攻撃を見ても実力的にカイザーには叶わないと思ったからだ。

『でしょう、だから行ってください。ヴォルフ、フェイト達が安全なところまで護衛していってください』

「では、行きましょう」

ヴォルフはフェイトに近づきアルフのところに連れて行き、一緒にこの場を離れていった

「貴様、これは公務執行妨害だぞ！」

自分の攻撃を防がれて容疑者を逃がされたクロノは怒鳴りこんできた。

『ここは管理外世界です。公務執行妨害もなにもありません』

するとクロノがスティンガーで攻撃してきた。仕事熱心なのか、バ

カなのか、話しも聞かずにカイザーに攻撃を仕掛けてきたのだ。

「貴様とは、話あうだけ無駄だ貴様を逮捕する」

カイザーはその台詞と前の攻撃を見て少し笑ってセレナードに念話をした。

『（セレナード、今のシーンを押さえましたか？』

「（もちろん、ばっちり押さえたよ～）」

『（わかりました）これで僕は貴方に攻撃しても正当防衛が成立します。デュアルバインド』

デュアルバインド、僕のオリジナルのバインドです。このバインドは僕と同じかそれ以上の魔力を込めないと破壊することは出来ませんよ。

「なんだこれは、こんな物すぐ・・・なにっ！抜け出せない」

クロノはバインドブレイクで抜けだそうしているがびくともしない。何度も試みるがまるで効果なかった。

『それは通常のバインドに比べて数段上の強度を誇っていますからね』

「な！そんな物、聞いたことないぞ！」

『あたり前です。そのバインドは僕のオリジナルのバインドです。もう時間ですね。このまま、消し飛びなさい。ジャスティブレイカーチャージ開始』

「・・・Ｊｕｓｔｉｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ　ｃｈａｒｇｅ　ｓｔａｒｔ」

カイザーはジャスティブレイカーをチャージし始めた。それから順調にチャージが続いて今はチャージ６０％まで来ていた。

「なのは！今までとは比べものにならない魔力が集まってる、このままだと周囲いったいが吹き飛ぶよ」

ユーノがカイザーの砲撃の被害予想をさけびながらなのはに伝えた

「え！じゃあ、あのクロノ君はどうなるの？」

「間違いなく、ただじゃすまないよ」

なのははそんなことは行けないと全力でカイザーに向かって飛んで行き、砲撃を今すぐにでも止めようとしていた。

「・・・Ｊｕｓｔｉｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ　ｃｈａｒｇｅ　１００％」

『じゃあ時間です。恨むのなら自分の行動を恨んでくださいね。話を聞こうともせず、攻撃を仕掛けた貴方が悪いんですから、さよなら』

「くっ・・・」

クロノは自分の行動を悔やみ、自分ではどうにも出来ないこの状況に唇を噛んだ。

『ジャスティスブレ「待って」』

砲撃を今にも発射しようとした直前なのはがカイザーの前に飛び出してきた。カイザーは発射する直前で何とか砲撃を中止していつでも発射できる状態で待機させた。

『なのは、危ないですよ。そこをどいてください』

「カイザー君、ダメだよ。」

なのははカイザーの前に両手を広げて立ちふさがった

『どうしても、そこをどかないつもりですか?』

カイザーは自分からなのはに向かって威圧感を出しながら威厳のある声で尋ねる。

「・・・うん」

その返事に確かな決意を感じ砲撃を中止することを決めてデバイスを下げた。

『そうですか。今回はなのはに免じていいですよ』

カイザーは手をなのはのほうに伸ばし、なのは目を瞑った。カイザーはなのはの頭に手を置いて

『じゃあね、なのは（セレナード、心配なので隠蔽魔法で見つからないようについて行ってください、見つかったら連絡をください。すぐに転移していきます）』

「（わかったよ～）」

カイザーなのはに笑みを向け去り際に指を弾くような音が聞こえクロノにかかっていたバインドが解除された。

「・・・／／／」

カイザーの笑みを見たなのははは自分の顔が赤くなっていくのを感じて去って行くカイザーの背中を見ていた。クロノが立って埃をはらっていると目の前に緑色の魔法陣が展開されてリンディの顔が映った

「すみません、二組を逃がしてしまいました」

クロノは悔しそうに拳を握りしめていた

「クロノ、ご苦労様。でね?ちょっとお話を聞きたいから、そっちの子達をアースラに案内してあげてくれるかしら」

「了解しました。君たちもかまわないか?」

「はい、大丈夫です」

「・・・／／／」

なのははカイザーの笑みを見たときの事が頭から離れず、クロノの声に反応することなくまだぼーっとしている。

「なのは？」

「はっ！だ、大丈夫です」

ユーノに声を掛けられてやっと反応したなのはは大丈夫だと返事をしてとアースラへ事情聴取に転送された

第六話

アースラ

セレナード視点

セレナードはなのはの達の後ろに隠蔽魔法を使って隠れながら、ここが時空管理局の時空艦の中ねぇ～と思もいながら後をついて行っているうちに艦長室に着いた

「初めまして、時空管理局所属艦『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

「ユーノ・スクライヤです」

「高町なのはです」

三人は自己紹介を終えて今後のことを話し、ユーノは自分がこの世界にきた経緯を話していた

「そう、立派だわ」

「でも、無謀でもある」

クロノにユーノのしていた行動はあまりにも無謀な行動をしていると言われてユーノはがっくりとうな垂れているようにセレナードには見えていた。

「これよりロストロギア『ジュエルシード』の回収には、時空管理局が全権を持ちます」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも！・・・・」

なのははやっと自分の力で手伝えると思った矢先、魔法のことを忘れて元の生活に戻れと言われて抵抗していた。

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

「まぁ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、二人で話し合って、それから改めて話をしましょう」

「〜クロノが言ってることとリンディの言ってることが矛盾してるわよね。念のためにカイにも教えよう〜」

セレナードがクロノとリンディの言っていることの矛盾に気づき、カイザーにその会話を送ってからリンディの言葉の思惑について考えていると近くにある植木鉢に体が当たって倒して音を立ててしまった。

「{しまった！}」

「ん・・・おかしいわね、なんで何もないのに植木鉢が倒れるのかしら」

リンディはこちらを見つめながらどうして植木鉢が倒れたのかを考えている。

「くしゅん！」

倒れた植木鉢によって巻き上がった埃を吸ってくしゃみをしてしまった。これでリンディはこの部屋に何かいることが確信に変わった。

「エイミィ、いますぐこの部屋を調べて！」

ブリッジに連絡をいれ、エイミィにすぐにこの部屋を調べてもらった。そしてすぐにエイミィから連絡が来た

「艦長、その部屋にクロノ君達を除いてもう一つ反応があります！」

「（カイ、来て！もう見つかっちゃう！）」

『（わかった、もう少しでそちらへ向かえます）』

見つかったことでカイザーに連絡を入れ終わった瞬間にこの部屋に結界が張り巡らされてセレナードが逃げることが難しくなって表情を険しくした。

「さあ、出てきなさい。居るのはわかっています」

リンディがそういうとセレナードが隠蔽魔法を解いて少しでも時間を稼ごうと考えた。それを見たクロノ達は現れた人物に見覚えがあった。

「おまえは確かあの男と一緒にいた！」

「・・・セレナードさん？」

「何でここにいるんですか？」

セレナードを見た三人の反応はそれぞれ違っていた。

「カイがなのはが心配だから見てこいっていわれたから」

「ふぇ、カイザー君がなのはのことを」

なのははカイザーが自分の事を心配してくれていると聞くと手を顔に当てて、顔が赤くなり恥ずかしがっていた。

「どうするんですか？もう逃げられませんよ、それともこの場にいる全員を相手にしますか？」

リンディから言われたことを考えていた。確かにセレナード一人でこの場にいる全員を相手にするのは難しいかも知れないが倒せないこともない。しかし、それにはこの場所は狭すぎたのだ。そう考えているうちにクロノに後ろからバインドをかけられた。

「くっ・・・卑怯な」

「セレナードさん・・」

なのはも自分を心配してきてくれたのにこんな事はしたくないと悲しげな表情でセレナードを見ていた

ビー・ビー・ビー

すると突然アラートが鳴り響いた。

「なにが起こったんだ！」

「クロノ落ち着きなさい。エイミィ、何が起こったの？」

クロノが大きな声で叫び、少し混乱しているのをリンディが制して冷静に何が起こっているのかをエイミィに報告させた。

「艦長、大変です！何者かがこのアースラに転移してきました！」

「何ですって！侵入者は今どこにいるの？」

リンディも焦りながら聞いた。まさかアースラに転移してくる者などいるはずもないと思っていたからだ。

「今、防護壁を作動させていますがまったく止まりません。次々と破壊されてまっすぐ艦長達がいる部屋に向かっています。このペースなら一分後接触します！」

エイミィの一言で艦長室にいる全員に緊張が走るがセレナードは誰

が来ているのかがわかっているのか安心していた。

「皆さん、気をつけてください。もうすぐ来ます！」

全員がデバイスを起動させ、いつでも戦闘が出来る状態に待機させてすぐに部屋に張られている結界が破壊されてドアが勢いよく吹き飛んだ。そこから姿を現したのは二人組の男、カイザーとヴォルフがこちらに入って来た。

「カイ～！ヴォルフ、来てくれたんだね」

その姿を確認したセレナードは嬉しそうに声をあげた。カイザーもセレナードを確認するとにっこりと笑っていた。

『はい、ちゃんと迎えに来ましたよ』

そしてカイザーは一瞬でセレナードの元へ行きバインドを解除した。その一瞬の出来事に誰も反応することが出来ず全員が驚いた。

『皆さん、そう警戒しないでください。別に争いに来た訳ではない

のですから』

そう言うがリンディ達は戦闘態勢を解く様子は全く無い

「あんなことをしておいておまえの言うことを信じろというのか！」

『あれは、話を取り合わずに攻撃してきたから正当防衛ですよ。ちゃんと証拠の映像も撮ってありますよ』

「なに！」

カイザーにそう言われてクロノは飛びかかりそうになる。カイザー的には向かって来てもらえば正当防衛という名目で攻撃できるのでしてきても構わないようだった。

「クロノ黙りなさい、じゃあ何しに来たのかしら？」

『だからさっき言ったじゃないですか、セレナードを迎えに来たと』

リンディの問いに対して自分の目的を簡単に明かしてリンディ達はそれが本当なのかと若干疑いの目を向けていたがカイザーはまった

く気にしていない。

「カイザー君」

なのははカイザーにレイジングハートを向けつつ名前を呼んだ

『なのは、大丈夫だった?』

「うん、なにもなかったよ。ただ、今回の事件のことを聞かれてただけだから」

『そうですか。あぁちょうどいいですから今後のことについて少し話しましょうか。セレナード、ヴォルフお願いします』

セレナードとヴォルフは頷き、二人で艦長室を多重な結界を発動させて，外部に情報が漏れないようにした。

「・・・すごい」

その結界を見てユーノが驚きの声をあげた。自分の者よりも数段上の結界だからだ。

『話はセレナードを通して聞いていましたから、ジュエルシードは管理局が全権を持つこれでいいんですね』

「ええ、そうよ」

『しかし、管理局が全権を持ってジュエルシードを確保するのならどうしてなのは達に一日話し会う必要があるんですか？』

「それは・・・」

カイザーの問いかけにリンディは答えることが出来ずに言い淀んで俯いて黙ってしまった。カイザーはこの反応で確信した。リンディはなのはの魔力ランクがかなり高いので意図的に自分たちから協力させて主導権を握ろうとしていたと。

『やはり、なのは達をうまく言いくるめていたんですね』

「どういう事だ！！」

カイザーの物言いにクロノが見逃せないと食いついてきた。

『クロノでしたよね、少し落ち着いてください。今から説明しますから』

そしてカイザーはリンディの言動に着いてクロノ達に説明し始める。
それを聞いたクロノは顔色がドンドン変わっていく。

「艦長、どういうことですか！」

「・・・・・」

クロノが尋ねるがリンディは黙ったまま何も答えない、いや答えられない。

『沈黙は肯定と取ります。なのは、それでも協力しますか？』

「私はフェイトちゃんを助けてあげたいし、この町を守りたい。だから協力します」

なのはは決意を込めて言い放った。僕はそれを聞いてお人好しだな～と思ってたりする。

「騙したことを謝ります。それと協力感謝します」

リンディは自分のした行為への謝罪と協力を申し出てくれたことの感謝を込めてなのはに頭を下げた。

『それでは、僕の用件は済んだのでこれで失礼させていただきます。』

「ちょっと待ってくれないかしら。」

二人にこの部屋の結界を解除してもらった後、セレナードを肩に乗せ、ヴォルフと自分の足下に銀色の魔法陣を展開して帰ろうとした

ときリンディに呼び止められた。

『何ですか？僕はこれでも暇ではないんですが』

「貴方は協力してくれないのかしら？出来れば協力して欲しいのだけど」

『僕がどうして管理局に協力などしなければならないんですか？そもそも相手を騙そうとした組織に協力などするわけがないでしょ。気が向いたら手伝うかも知れませんね、さよなら』

そして足下の魔法陣が発動して一瞬眩しく光り、リンディ達が目を瞑ってあけるとその場にはカイザー達は既に転移していなくなっていた。

カイザー達がアースラを去った後

「結局、あの子には協力を得ることは出来なかったわね。随分と頭が回る子供だったけど、どこかで見たことがあるような・・・。まあいいは、クロノ彼女達を送ってあげて」

「わかりました。同じ場所でかまわないだろ」

クロノはなのは達つれて転送装置に入り、元の公園に転移して行った。そして数分ほどでクロノが帰ってきてブリッジでなのは達の映像を見ているエイミィの所にやってきた。

「すごいや～どっちもＡＡＡクラスの魔導師だよ！」

「ああ」

「こっちの白い服の子はクロノ君の好みっぽいかわいい子だし」

「エイミィ、そんなことはどうでもいいんだよぉ」

「魔力の平均値で見ても白い子で１２７万、黒い女の子で１４３万、最大発揮時はさらにその三倍以上
、クロノ君より魔力だけなら上回っちゃってるね」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない、応用力と的確に使用できる判断力だろ」

「はいはい、信用してるって。何たってアースラの切り札だからね。」

二人で戦闘データを見ているところにちょうどリンディが入ってきた。

「あの子達のデータ見てたの？」

「はい、それで今からあの男のデータを見ようとしてました。エイミィ、データを出してくれ」

クロノに言われてエイミィはカイザー達のデータをモニターに表示して報告していく。

「まず黒い服の少年だけど、ＳＳＳクラスの魔導師だよ。」

「ＳＳＳクラスの魔導師だって、管理局には一握りしか居ないじゃないか！」

「そんなにまだ、あの子達と年も変わらないのに」

その報告を聞いたクロノがあり得ないというような表情をしてエイミィからの報告を聞いて、あまりにもの実力に驚いている。リンディもクロノと同様のようだ。

「このクロノ君がバインドで捕まえてた小さな子だけど、Ｓ＋クラス、この紫の髪の人でＳクラスあるよ」

「どうしてこんな子達がここにいるか、わからないわね。あとなのはさん達の理由はわかったけど、もう一人の女の子の方がわからないわ。」

「とても必死のように見えましたが」

「まだ、母親に甘えている年頃でしょうに」

アースラのブリッジではそのような会話がされていた。

第七話

僕は今海の上にいます。魔力反応がしたから飛んで来たんですよ。
おっと、フェイトが大型魔法を放つようですね、どう考えても自分の魔力の許容量を超えてるように感じますが

「アルカス・クルタス・エイギアス・・・煌めきたる天神よ今導きのもと降りきたれ・・・　バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・・撃つは雷　響くは轟雷　アルカス・クルタス・エイギアス！」

「｛たしかに作戦事態は間違ってないよ、でもそんなことしたらフェイトの魔力は・・・｝」

フェイトの下の金色の大型魔法陣からジュエルシードのある海に向かって魔法が放たれた。それに反応して海から六本の柱が出てきて、海水を吸って強力な竜巻となって海が荒れ始めた。

「アルフ、空間結界とサポートをお願い！」

「ああ、任せといて」

『手伝ってくれと一言いってくれれば、手伝ってあげましたのに二人とも』

アルフとフェイトの前にカイザーが現れたことに若干の警戒をしている。今はそんなことをしている余裕はあまりないような状況に陥っているようだが。

「あんた、どうしてここに居るんだい？」

『ああ、大きな魔力の反応があったので様子を見に来たら、アルフとフェイトが居たんですよ。手伝いましょうか』

「うん・・・お願い」

『わかりました。（ヴォルフ、来てください）』

カイザーはヴォルフに念話を飛ばし、それから数秒後に目の前に魔法陣が現れそこからヴォルフが姿を現した。

『ヴォルフ、今から行うことは少し時間がかかります。その間僕をあの竜巻から守り抜いて時間を稼いでください。』

「心得ました。」

そしてヴォルフはカイザーの前に移動して四方を囲むように魔法陣を配置してカイザーだけを結界で包み込んだ。

『ブラックフォース、アースブレイカーです』

「ＯＫ．・・・Ｅａｒｔｈ　Ｂｒｅａｋｅｒ　ｃｈａｒｇｅ」

そしてカイザーは自分を中心に魔力が集まり始める。そのとき、そこになのはが現れ、少し遅れてユーノも現れた。

「フェイトの邪魔をするなー」

アルフはなのは達が自分達の邪魔をしに来たと思い込んでなのは達に突っ込んで行くが、ユーノに防御され止められてしまう。

「僕達は争いに来たんじゃない！」

「ユーノ君！」

アルフとなのは達がそんなやり取りをしている間にチャージ９０％まで完了し、もうすぐで攻撃が出来る状態にまで来ていた。

「フェイトちゃん！カイザー君！」

「・・・Ｅａｒｔｈ　Ｂｒｅａｋｅｒ　Ｃｈａｒｇｅ　１００％」

なのはがこちらに呼びかけてきたと同時にブラックフォースがチャージ完了をコールしてくれた。

『フェイト・なのは・アルフ・ユーノ、この空域からできるだけ遠くに離脱してください』

なのは達に被害が及ばないように出来るだけ離れるように注意を述べる。

「どうしてなの？」

頭をかしげながら聞いてきた。僕は少しかわいいですね～と思いながら説明した

『離れないとこの攻撃の余波で吹き飛ばされますよ！』

それを聞いたなのはたちは急いで空域を離れていった

『アースブレイカー！！！』

そして自分に集まった魔力を右手の上に集めてそれをジュエルシー

ドに向かって打ち込んだ。

アースラｓｉｄｅ

クロノ達はその光景をブリッジのモニターから見ていた

「なんて魔力だ！」

「なんて子なの！」

「艦長、ジュエルシードすべての停止を確認しました。それと先ほどの魔法で中規模次元震が発生しましたが収まりました。」

「中、中規模次元震ですって！あんな子供が一人で起こすなんて」

視点戻って

解き放たれたアースブレイカーはジュエルシードに直撃するとその衝撃で海が荒れ狂って海面の海水が吹き飛んでその余波に離れていたなのは達も吹き飛ばされていた。

『これで、ＯＫですね』

カイザーが封印処理を終えてジュエルシードをなのはとフェイトに３個ずつ渡そうとしたとき、上から紫色の雷が降ってきた。

「か、母さん！」

カイザーはフェイトの近くに行き、抱き寄せ自分のレアスキルを発動させる

『Ａｅｇｉｓ』

紫の雷はＡｅｇｉｓにより完璧に防がれた。抱き寄せられたフェイ

トはというと顔が真っ赤になってゆ茹で蛸のようになっていた。

「／／／」

なのはもヴォルフのシールドで雷から守られていた。

「ありがとう、ヴォルフさん」

「気にするな」

『なのは、フェイト。ジュエルシード3個ずつです。問題はありませんね』

なのはとフェイトに3個ずつ渡した

「うん」

「／／／」

まだ抱き寄せられた事で頭がいっぱいなのかフェイトは顔がまだ赤かった。

『フェイト、行ってください。でないとまたあの執務官が来ますよ』

「アルフ、帰ろう」

フェイトとアルフは去って行ったあとに、執務官がやってきた

『じゃあ、またね。なのは』

「カイザーくん！っ」

「ま、待て貴様！」

クロノの言葉を無視してヴォルフとともに転移していった

第八話

僕達がジュエルシードを封印していた間にセレナードにフェイト達がどこに転移しているのかを調べてもらいました。８７６Ｃ　４４　１９　３３１２　Ｄ６９９　３５８３　Ａ１４６０　７７９　Ｆ３　１２５ですか、行けばわかりますね。

『セレナード・ヴォルフ、この座標に転移します。準備はいいですか？」』

「ＯＫだよ～」

「問題ありません」

カイザー達の足下に転移魔法陣が現れ指定した座標の元に転移した。

時の庭園

まわりに次元空間のある場所に来ましたね。まあ、中に入りましょうか。進んで行くと大きな扉が前に現れた。

『何があるかわかりませんので、バリアジャケットを着ておきますか。ブラックフォース・セットアップ』

「・・・・Ｓｅｔ　Ｕｐ」

カイザーは光に包まれ、黒衣の死神のような姿になった。

『二人とも行きますよ』

二人はカイザーの言葉に頷いて後をついて行く。ドアを開けるとそこには一人の女性が椅子に腰掛けていた。
おそらく、容姿から察するにあれがフェイトの母親と言うところでしょうか。明らかに警戒しているようですね。

「・・・何者」

そう言って椅子から立ち上がりこちらに杖を向けた。

『これは失礼。僕はカイザー・アルベルトといいます、そして肩にいるのがセレナード、隣に居るのが使い魔のヴォルフです』

その名前を聞いてプレシアは少し考えるように顎に手を当てて何かを思い出そうとしているように見える。そして何か思い出したのか、ハッと言う表情をしてこちらを見た。

「思い出したわ！カイザー・アルベルト、ミッドの方で天才と言われている子だったわね。で、そんな子がここに何のようかしら？」

『フェイト達がどこかに転移しているようだったので調べたんですよ。そして座標がわかったので転移したらここに着いたという訳です。フェイトにテスタロッサの性が入っていたのでまさかとは思いましたが、大魔導師のプレシア・テスタロッサの娘だったとはね』

「さすが博識ね、よくわかったわね。」

『でも、おかしいですね。あなたには娘は一人で、しかも事故で数

十年前に亡くしているはず確か名前はアリシア、フェイトなんて子はいなかった』

プレシアはアリシアという名前に過敏に反応して表情が変わったように見えた。
そう言うことですか。つまり、フェイトはアリシアの・・・・・。

「そんなことまで知っているのね。そうよアリシアはあのとき死んだわ、でもあきらめきれなかった。だから甦らそうとしてできたのがフェイトよ。アリシアの記憶をあげたのにダメだった。」

プレシアはアリシアによっぽど未練があるのでしょうね、ここまでするのですから。

『それで手を出したのがジュエルシードですか?醜いですね。』

「黙りなさい!あなたになにがわかるというの!」

怒鳴った次の瞬間こちらに魔法を放ってきた。僕が防ぐまでもありませんが少し頭を冷やさせて上げましょうか。自分の魔法を食らうといいですよ。

『・・・リフレクト』

「ＯＫ・・・Ｒｅｆｌｅｃｔｉｏｎ」

プレシアの魔法をそのままの威力で弾き返した。それを見てたプレシアは驚き、防御が間に合わずに自分の魔法が直撃し壁にたたきつけられた。

「グフゥ・・・」

『どんな形であっても貴方はフェイトの生みの親ではないのですか？』

プレシアははっと気づいたように顔を上げた。どうやらアリシアを蘇生させることで頭がいっぱいでこんな簡単なことも気づかないくらい追い詰められていたみたいだ。

『貴方はもう寿命が長くはないんでしょう。全盛期の時のものならもっと先ほどの魔法に威力があったはずですからね』

「あなたにはそんなことまでわかってしまうのね。そうね、私の寿命はあと数週間程度しかないわ」

こんなになるまで・・・。よほどアリシアのことが大事なんですね。ホントは死んだ者を甦らせることは死者を冒涜することに当たるのですが仕方ありませんね。

『アリシアを甦らしたいですか?』

「・・・・え?」

『だから、アリシアを甦らしたいですかと聞いているんです。』

「そんなことが可能なの!私がどれだけ探しても見つからなかったのに」

プレシアはまるで信じられないと言うような物言いになり、僕の肩

を掴んでブンブンと揺さぶってきた。うぅ～気持ち悪いです。い、意識が飛んでしまいます～。

「カ、カイ～大丈夫！」

「主、お気を確かに！」

セレナードとヴォルフの二人がその様子を見てプレシアを止めて、倒れそうになるカイザーを受け止めた。

「ごめんなさい。少し取り乱してしまったわ、でも本当にできるの？」

『ええ、僕が自分で魔法を作れることはご存じですよね。魔力が膨大にいるのが難点なんですけど』

カイザーが自分の魔法についてこと細かに説明し、それを聞いたプレシアは感心していた。やはり天才と言われているだけのことはあると思っていた。こんなにも小さい子供なのにと。

「じゃあ、今すぐアリシアを「ただし、条件があります」」

『その条件はアリシアの蘇生に成功した場合、僕の助手として働いてもらいます。これがアリシアを蘇生させることについての最低限の条件です。』

それを聞いたプレシアはそんなことでいいのかというような顔してキョトンとしているようだった。たったそれだけの事でいいならと快く了承してくれた。

『まず、貴方の病気を治療します。すこし横になってください』

プレシアを横に寝かせ、手を右胸あたりにかざして銀色の魔法陣を複数展開させブツブツと唱え始め、最後にキュアオールといって治療を終えた

『どうですか、体の方は？」』

「信じられないわ。体が嘘みたいに軽い」

『僕は疲れたので、少し眠ります。あと次元跳躍魔法を使いましたよね、おそらく、もう一回使ったらこの場所がばれますよ』

そしてあぁ～疲れたと言いながら狼状態になったヴォルフの背に乗りながら奥に消えていった。

「ほんとにすごい子ね。」

プレシアはフェイトと同じ年齢には思えないと思いながらヴォルフに連れられていくカイザーの姿を見つめていた。この後フェイトがなのはとジュエルシードすべてかけて決闘をすることを聞いた

第九話

今、海鳴臨界公園でなのはとフェイトが決闘をすると聞いたので見届けに来ました。なのはの成長が少し楽しみでもあります。なのはとユーノ、アルフがやってきましたね。

「ここなら、いいね。出てきてフェイトちゃん！」

するとフェイトは電灯の上にバルディッシュを鎌状態にして立ってなのはを見下ろしていた。

「フェイト…、もうやめよう。あんな女の言う事、もう聞いちゃダメだよ…フェイト…、このまんまじゃ不幸になるばっかりじゃないか…！だからフェイト！」

アルフにそう言われてフェイトは少し悲しそうな顔をするが首を横に振り、やめようとはしなかった。

「だけど、それでも私は、あの人の娘だから」

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね。逃げればいいってわけじゃもっとない。きっかけは、きっとジュエルシード。だから賭けよう、お互いが持ってる、全部のジュエルシードを！」

「Ｐｕｔ　ｏｕｔ」

「Ｐｕｔ　ｏｕｔ」

レイジングハートとバルディッシュからジュエルシードが排出された

「それからだよ、全部それから！私達の全てはまだ始まってもいない。だから、本当の自分を始めるために、始めよう…、最初で最後の本気の勝負！」

なのはとフェイトの決闘が始まり、どんどん攻防が激しくなっていく。ほんとに九歳なんでしょうかね～。そういえば、僕も九歳でした。

「フォトンランサー、ファイア」

「ディバインシューター、シュート」

なのははすべてよけて、フェイトは防御する。お互いに一歩も引かず、このまま勝負は均衡を保つのかと思っていた所、勝負が動いた。

「Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ」

「ライトニングバインド」

フェイトの周りに電気を帯びた魔力弾が集まり、なのはが電撃属性のバインドに捕まり身動きができないようになった。

「マズイ、フェイトは本気だ！」

「なのは！今サポートに！」

ふん、邪魔はさせません。僕はユーノの前に転移し、ユーノをバインドで身動きをとれなくしました。

「なっ！」

『決闘の邪魔はさせませんよ』

そんなやりとりをしている間にフェイトが勝負を決めにかかるべく、自分の出来る最強の攻撃をしようと呪文を紡ぎ始めた。

「アルカス・クルタス・エイギアス・・・疾風なりし天上、今導きのもと撃ちかかれ・・・バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・」

そして徐々に魔力弾が増えて、呪文を唱えるにつれてドンドン魔力弾が輝きを増していき、威力も上がっていく。

「フォトンランサー、ファランクスシフト。撃ち砕け…、ファイア！」

呪文を唱え終わり、一斉になのはの方に魔力弾が飛んでいく。当たる瞬間にレイジングハートが点滅しているのが見えた。煙が晴れる

とそこには無傷のなのはがいた。それを見たフェイトも少しびっくりしていた。今のを防いだのですか、なかなかですね。

「撃ち終わると、バインド、ってのも解けちゃうんだね。今度はこっちの…」

「Ｄｉｖｉｎｅ・・・」

「番だよ」

「Ｂｕｓｔｅｒ」

なのははディバインバスターをフェイトに放った。フェイトも一発の魔力弾を放つがディバインバスターに飲み込まれてしまう。フェイトは防御するが、もう限界なのか徐々に押され、満身創痍の状態になった。

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！」

「Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ」

なのはの前に膨大な魔力が集まっていく。フェイトは避けようとするがバインドに捕まり身動きがとれなくなっていた。あんなの今のフェイトがくらって大丈夫なんでしょうか？大丈夫じゃないですよね。

「これが私の全力全開！・・・スターライトブレイカー」

スターライトブレイカーがフェイトに直撃し、海に落ちていく。さて、助けに行きますかね。カイザーはフェイトの元に飛んでいった。

『フェイト、大丈夫ですか？」』

落ちてくるフェイトをカイザーがお姫様抱っこしていたせいか、フェイトの顔は赤かった。

「カ、カイザー／／／」

「ごめんね、大丈夫？」

「うん」

「私の・・勝ちだよね」

「そう・・みたいだね」

「Ｐｕｔ　ｏｕｔ」

バルディッシュはジュエルシードを排出して、周りに九つジュエルシードが浮かんだ。すぐにプレシアの次元跳躍魔法の雷が降り注いぎフェイトを襲いかかった。

『・・・Ａｅｇｉｓ』

プレシアの雷を完全に防いだ。プレシアさん、フェイトに問われないように自分が悪役を演じるつもりですか。これで完全に場所が判

明してしまいましたね。死ぬことは許しませんよ。

アースラ

カイザーはあの後、なのはのうしろにサーチャーを飛ばして後をつけさしていた。ブリッジのモニターにはフェイトに瓜二つの少女アリシアがポットに入っているのを見ていた。

「私のアリシアに近寄らないで！」

「撃て－！」

そんな攻撃が通るはずもなく防がれ、反撃を受け武装局員は全員倒された。

「フェイト、聞こえているんでしょ」

アースラにいるフェイトにしゃべり始めた

「この子を亡くしてからの暗鬱な時間も、この子の身代わりの人形を、娘扱いするのも、もう終わり。」

「やめて、やめてよ！」

「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だからアナタはもうイラナイわ…、どこへなりと…、消えなさい！」

「お願い！もうやめて！！」

「ハハハハハハ！ハハ、ハハハハハハ！フフフ！イイ事を教えてあげるわぁ、フェイトォ…アナタを造りだしてからずっとね…、私はアナタが…だぁい嫌いだったのよ！」

それを聞いたフェイトは目が生気をなくし、その場に崩れ落ちた。
いくら自分に罪を被せるためとはいえ、言われた方は相当精神的にくるでしょうね。

「た、大変大変！ちょっと見てください！屋敷内に魔力反応…多数！」

「何が起こってる！」

「プレシア・テスタロッサ。何をするつもりですか？」

「私達の旅を…邪魔されたくないのよ…私達は旅立つの…！忘れられた都…アルハザードへ」

「まさか！！」

プレシアは九つのジュエルシードを発動させた。すると揺れがアースラを襲う。

「次元震！、中規模以上です」

「振動防御！『ディストーションシールド』を！」

「ジュエルシード、９個発動！次元震、更に強くなります！」

「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を！」

「りょ、了解です！」

プレシアさん、完全に僕との約束忘れてませんかね？今から時の庭園に向かいます。サーチャーを消して時の庭園に向かいました

時の庭園

カイザーがプレシアの所につくとクロノが現れた所でした。見つかると面倒なので隠れて居ましょう。

「世界はいつだってこんな筈じゃないこと、ばっかりだよ！ずっと昔から何時だって誰だって、そうなんだ！」

クロノがそう話していると上からフェイトとアルフが降りてきた

「こんな筈じゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ！だけど自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んでいい権利はどこの誰にもありはしない！」

「母さん・・・」

フェイトがプレシアに近寄って行く。

「何しにきたの」

しかし、プレシアから帰って来たのは拒絶の反応だった。やはり演技とはいえ、自分の娘だと思っているので辛いものがあるようだ。

「消えなさい、もう貴方に用はないわ」

「貴方に言いたいことがあってきました」

プレシアは黙ってフェイトの言葉を聞いている

「私は…私は…、“アリシア・テスタロッサ”じゃありません。アナタが造った、ただの人形なのかもしれません。だけど、私は、“フェイト・テスタロッサ”は…、アナタに生み出してもらって、育ててもらった…、アナタの娘です！」

「ハハハハ、アハハハハハハハハ…！だから何？今更アナタを娘と思えというの？」

「アナタが、…ソレを望むなら。私は世界中の誰からも、どんな出来事からも…、アナタを守る」

プレシアは沈黙し、床を杖でたたきジュエルシードを暴走させた。
床が崩れてプレシアとアリシアのポッドは虚数空間に向かっていく。

「母さん！！！」

フェイトはプレシアに叫んだ。そのときフェイトにプレシアから念話が届いた

「（フェイト、よく聞いて、貴方は私といると犯罪者になってしまう。だからこうするしかなかったの。フェイトにあんなことをさせたことは悪いと思ったわ。でも仕方なかったの、幸せになりなさいフェイト。愛しているわ）」

フェイトはそれを聞いて涙を流し、もう一度叫んだ。

「私も母さんのこと大好きだよ！！」

フェイトは落ちていくプレシアとアリシアが見えなくなる前に銀色の魔法陣を見た気がした

『プレシアさん、全く無茶をしてくれますね。間に合わなかったらどうするつもりですか！！』

「ごめんなさい、でもフェイトに罪を残したくなかったの。」

申し訳なさそうにするプレシアをみて、ため息を吐いて仕方ないなとジェスチャーして言葉を紡いだ。

『今回だけですからね！じゃあ僕のログハウスの方に転移しますから』

そういってアリシアとプレシアを自分の近くに移動させ、中央に銀色の魔法陣を展開して転移していった

第九話（後書き）

やっぱり難しいです。この後の展開どうしよう

第十話（前書き）

めちゃめちゃ，短いです

第十話

海鳴市ログハウス

ログハウスに転移してきたカイザー達はプレシアとポットに入っているアリシアを連れて地下実験場にやってきた

『それでは、今よりアリシアの蘇生を行います。プレシアさん、ジュエルシードを一つ貸してください。』

プレシアはジュエルシードを渡しその場を少し離れた。カイザー・セレナード・ヴォルフは中央のアリシアを中心に三方向に立ち儀式を開始した。そしてそこに巨大な魔法陣が現れ、カイザーは呪文を唱え始めた

『我、冥府の門を開きし者なり・・・死者の国にありし魂よ・・・今ここに帰還せん・・・その名は・・・アリシア・テスタロッサ・・・』

呪文を唱え終わった瞬間、アリシアの体が輝き光に包まれ、それから数分間その状態が続き光が収まりった。するとアリシアの指がピクッと動いた。

『成功したようですね。プレシアさん、もうすぐアリシアは目を覚ますと思いますよ』

それから数分後

「うぅーん、あれ？」

「アリシア！！」

プレシアがアリシアに抱きつき涙を流していた。ここは親子だけにしてあげましょう。ヴォルフとセレナードにアイコンタクトし、二人も頷き、部屋を出て行った。

「どうしたの？お母さん」

「なんでもないのよ、何でも」

「変なお母さん」

数時間後

『アリシアとの再会はどうでしたか』

「ほんとに感謝してるわ。この恩は絶対に忘れない。これから私は貴方の助手として働けばいいのね」

『ええ、これからよろしくお願いします』

「こちらこそ、よろしく頼むわ。」

そう言って二人は握手をした。

「よろしくね～」

「よろしく頼む」

アリシアがプレシアの後ろから出てきてセレナードを見て喜んでいた。

「わぁ～妖精さんだぁ～」

「私は妖精ではなく、ユニゾンデバイスですよ～」

二人のやりとりが続いている間に、カイザーとプレシアが二人で話を進めていた。

『まず、新しい魔法の術式を作るのを手伝ってください』

「私で大丈夫なの？」

『大丈夫です。プレシアさんほどの技術力があれば、問題ないです。
では、始めましょうか』

そして二人は研究室に入っていき新術式の研究を開始し始めた。

一方その頃はやて家

「封印を解除します」

いきなりのことにはやてが後ろに後ずさる

「・・・起動」

はやてのリンカーコアが反応し、魔法陣が出てきて一瞬光った

「闇の書の起動確認しました」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

「夜天の主に集いし・・・」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

時間がたっても返事がないのでヴィータが立ち上がり様子を見に行く

「（ねえ、ちょっと、ちょっと）」

「（ヴィータちゃんしー）」

「（でもさー）」

「（黙っていろ、主のまえで無礼は許されん）」

「（無礼っていうかさ、こいつ気絶してるようにみえんだけどさ）」

はやては驚いて気絶していたんのだ。

主人公の魔法&剣技（A＇s）

魔法

シルバーレイン：：ランクA
　砲撃を真上に撃ち、雨のように降らせる

ロックシューター：：ランクAA
　相手をロックオンし、当たるまで追いかける。

ミラージュシューター：：ランクAA
　魔力弾に隠蔽魔法をかけ見えなくして放つ

ジェネティックバスター：：ランクAAA
　砲撃魔法、

ブレイクバスター：：ランクS
　相手のシールドを破って貫通する砲撃

ジャスティスブレイカー：：ランクSS

収束魔法、ロッドの先に魔力を集め撃ち放つ。

インフィニティーノヴァ：ランクＳＳ＋
無限の砲撃を放つ

アースブレイカー：ランクＳＳＳ
最強の魔法、その威力は次元震を引き起こすほど。

リフレクト：レアスキルの応用技、相手の攻撃を弾き返す。

ナイトメア：相手が一番見たくない悪夢を見せる

バリアブレイク：左手に力を込めシールドを破壊する

剣技

瞬撃：一瞬で懐に入り込み切りかかる

幻撃剣：幻術魔法を合わせた技

覇龍一閃：自分の覇気を纏わせて放つ重い一撃

覇龍咆吼撃：覇気を纏わせた衝撃波を放つ

九瞬撃：九つの斬撃を同時に放つ

第十一話

今はプレシアさんと研究室で術式の開発がいったん終了し、一息入れています。

『プレシアさん、なかなか順調に進んでますね』

「そうね。この調子でいけば、もうすぐ完成しそうね。」

『ん・・・プレシアさん、外に何か結界が張られたようですね』

「そのようね。しかもこの結界、ミッド式ではないわね。」

『ちょっと待ってください。・・・・・これはどうやらベルカ式の結界のようですね。何か面倒になりそうなのでセレナードとヴォルフを連れて見てきますね』

カイザーはセレナードとヴォルフを念話で呼んだ。お昼寝中だったのか眠そうなセレナードを狼状態のヴォルフが連れてきた。

「カイ～眠いよ～」

あくびをしながらカイザーの肩で呟いていた。ヴォルフはいつも通りである。

「じゃあ、気をつけてね」

『じゃあ、行ってきます』

プレシアがカイザー達を見送り、自分の寝室に戻って行った。実はプレシアもカイザーと術式を考えていてかなり疲れていたのである。

結界内

そこには赤いゴスロリ衣装の少女となのはが戦っていた。

「カイ、この結界どうする？」

『中に結界を維持している者が居るはずです。そいつをヴォルフと一緒に捕縛してください』

「わかりました、セレナード行くぞ！」

ヴォルフがセレナードを背に乗せ、結界を維持しているものを探すために結界の外を周りに行った。

『なのはの方が押されていますね。面倒ですが、助けましょうかね。ブラックフォース・セットアップ』

「・・・Ｓｅｔ　Ｕｐ」

カイザーは光に包まれ、黒衣の死神のような衣装になった。１ｓｔフォルムでゴスロリの衣装を着た少女に狙いを定めて攻撃態勢に入る。

『少し遠いですが、いけますねブラックフォース』

「・・・Ｏｆ　Ｃｏｕｒｓｅ」

『じゃあ、いきます。ミラージュシューター！！』

「・・・Ｍｉｒａｇｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ」

隠蔽魔法で隠された魔力弾１０発がゴスロリの少女に向かって発射

された

なのはとヴィータｓｉｄｅ

「グラーフアイゼン！カートリッジ・ロード！」

「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．・・・Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ．」

アイゼンから弾薬のからが排出されヴィータのハンマーが変形し、大きくなった

「ふぇぇぇ！！！」

「ラケーテン……！！なに、後ろから！！うわぁぁぁぁ」

そしてアイゼンをなのはに振り下ろそうとした瞬間に後ろから複数の見えない攻撃がヴィータを襲い、吹き飛ばされた。

「ふぇぇ！！どうなってるの？？」

なのはは何が起きたかわからず不思議そうに首をかしげていた。そのとき後ろから声を掛けられた。

『久しぶりですね、なのは』

「か、カイザー君！じゃあ、今のは」

『はい、僕ですよ』

二人が会話していると吹き飛ばされたヴィータがビルの方から頭を抑えて戻ってきた。

「っいてて、誰だテメェーは！」

『誰でもいいじゃないですか。それより貴方ですか、この結界張ったのは！迷惑なんですよ』

「ごちゃごちゃうるせぇぇー」

ヴィータは何も考えずにハンマーを構えて特攻の如く正面から突っ込んでくるが、カイザーはため息を吐いて戦闘の構えを取った。

『身の程を教えてあげましょう。プロテクション』

「・・・Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

ガキン

「なっ！なんつう硬さだ」

ヴィータはシールドの強度に驚き、一瞬隙を作ってしまった。カイザーがその隙を見逃すはずがなかった。

『その隙が命取りです。ブレイクバスター！』

その隙を突き、カイザーは一気に距離を縮め零距離から砲撃を撃ち放った。

「なに！！」

ヴィータはシールドを張るが放たれた砲撃にはバリアブレイクと似たような効果を持っていたのでシールドが破壊され、零距離での砲撃に直撃した。そしてちょうどそこにユーノ、フェイト、アルフがやってきた。

「大丈夫、なのは」

「カイザー君が助けてくれたから」

フェイトとアルフはなのはの方をみた後、ヴィータの方に向かって行った。アルフがボロボロのヴィータにバインドをかけて拘束した

「終わりだね、名前と出身世界・目的を教えてもらうよ」

「くうううううー」

「っ！なんかやばいよ、フェイト」

アルフがそう言った瞬間、フェイトの前にピンクの髪をした剣士が現れ、剣撃いよってフェイトをはじき飛ばした。

「シグナム！」

「ぐおぉぉぉぉ！！」

「くっ！！」

アルフは声に気づき咄嗟にガードを固めたが男に蹴り飛ばされ、後退させられてしまう。

「レヴァンティン……カートリッジ・ロード」

「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．」

「紫電一閃！はあぁぁぁ！」

シグナムの剣が炎を纏いフェイトに襲いかかる。フェイトはバルディッシュで受け止めようとするが柄が真っ二つに切られ、シグナムのもう一度の攻撃で吹き飛ばされ、ビルに衝突する。

「フェイト！！！」

アルフもフェイトの元に向かおうとするがザフィーラに邪魔され行くことができない。

「どうしたヴィータ油断でもしたか」

「そうじゃねえよ。あたしがやられたのはシグナムが吹っ飛ばした

やつじゃねぇ。あの黒いやつだ！！」

『僕のこと、呼びましたか』

二人は気配もなく自分たちのもとにいきなりカイザーが現れたことに驚いていた

「シグナム、こいつだ！！あたしがやられたのは！！！」

「そうか、こいつできるな」

『剣士ですか、じゃあ久しぶりにぼくも剣で相手しましょう。ブラックフォース、２ｎｄフォルム』

「・・・２ｎｄｆｏｒｍ」

ブラックフォースを２ｎｄフォルムの剣状態に変化させ、シグナムに向き合った。

「私に剣で挑むか、いいだろう相手をしてやる」

『油断しない方がいいですよ。さもないと一瞬で終わりますよ』

シグナムとカイザーは互いに剣を構え、一歩も動かない。そしてカイザーが先に動いた。

『・・瞬撃』

「なにっ！消えただと」

視界からいきなり消えたことで驚くがすぐに冷静さを取り戻してシグナムは周りを見る。しかし、カイザーの姿はどこにも見あたらない。そのときすでにカイザーは懐に入り込み剣を振りかかっていた。

「なっ！」

それに気づいたシグナムはとっさに剣を縦にし、攻撃をなんとか防いだ。

『今のを防ぎますか。少しはできるようですね』

「見えなかった、あと少し反応が遅れていたらやられていた」

シグナムは落ち着いているように見えるが内心かなり焦っていた。１ＶＳ１ならば勝てる自信があった。しかし、目の前のカイザーの攻撃に反応して防ぐことが精一杯だった。

「もう、時間がない決めさせてもらう。レヴァンティン……カートリッジ・ロード」

「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．」

「紫電一閃！」

『ならこちらも決めさせてもらいます、覇龍一閃！！」』

「はぁぁぁぁぁ！！！」

シグナムとカイザーの剣がぶつかり、シグナムの剣がパキキィィンと音をたてて砕け散った。そして隙だらけの今、攻撃を仕掛けようとしたがセレナードから連絡が来た。

「なにっ！バカな！！」

『この勝負、僕の勝ちです。「（カイ～結界を維持してるやつ見つけたよ）」どうやら四人目も見つかったようですから、もういきます』

攻撃を中断し、カイザーはセレナードから連絡の来た場所に向かう。シグナムは少しの間何も出来なかったが先ほどの会話を思いだして焦りだした。

「四人目だと。まさか！！ヴィータ、まずい、おそらくさっきのやつの仲間にシャマルが見つかった」

「なんだと！！すぐに助けに行かないとまずいぞ！」

シグナムとヴィータは急いでシャマルの元にむかった。

数分前

セレナードとヴォルフは結界を維持しているものを探していた。

「ヴォルフ～どこに居ると思う？」

「おそらく、そう遠くないはずだ。ん・・・あれではないか？」

ヴォルフはビルの上に人影を見つけセレナードに教えた

「よ～し、ヴォルフ、突撃～！」

ヴォルフはそのまま人影に突っ込んで行った。その人影は何かをしているようでヴォルフ達にまったく気づかない。

「しまった、外しちゃった」

そう言って鏡のようなものに腕を突っ込みなおした

「リンカーコア捕獲、蒐集開始」

本のページが徐々に増えている途中にヴォルフに乗ったセレナードが後ろからバインドを仕掛ける。

「・・・グラビティバインド」

「えっ！バインド。体が重い・・・どうなってるの！」

本のページの蒐集が途中で中断され、シャマルはバインドによって

急激に体が重くなり床に片膝を着いた。

「よ～し！ターゲット捕獲完了。ヴォルフ、あの結界を発動させて」

「了解した。六晶結界！これで念話も魔法も使えまい」

そう言うとシャマルを水晶が完全に囲んで出られなくする。抵抗を試みてみるが体が水晶によって固定されているのか動くに動けなかった。

「そんなことは・・・え！ほんとに使えない・・」

シャマルはこの状況に絶望の表情をし、ちょうどそこにカイザーがやってきた。

『二人ともありがとう。うまくいったようですね、貴方には着いてきてもらいます』

そしてシャマルの足下に銀色の魔法陣が現れる。その瞬間、そこにシグナムとヴィータがやってきた。

「テメェー、シャマルをどうする気だ!!」

『さあ、どうでしょうね?時間です。では』

シャマルの足下の魔法陣が輝きを増し、その場からシャマルは居なくなった。続いてカイザー達も転移して行く。そしてすぐになのはのスターライトブレイカーで結界が破壊された。

「しまった!クソッ、とりあえずここは撤退だ」

「シャマル、必ず助けに行くからな!!」

二人はザフィーラと合流し、撤退していった。この戦闘の結果、なのははリンカーコアを少し損傷しただけで済んだ。

第十二話

ログハウス地下実験場

シャマルを転移させ、カイザー達も地下実験場に着いた。するとプレシアが魔力反応を感じてやってきた。

「あら、お帰りなさい。その女性はどうしたの？」

『ただいま、おもしろいことをしていたので連れてきたんですよ』

カイザーはおもしろいおもちゃを見つけたように笑っており、シャマルはその笑いを見て恐怖した。自分は一体どうなってしまうのだろうという不安が襲いかかる。

「そうそう、なんかね～相手のリンカーコアを蒐集してたんだよ～」

「リンカーコアを蒐集・・・どこかで聞いたことあるんだけど、ど

こだったかしら？」

プレシアはどこかで聞いたことがあるようだが思い出そうにも思い出せないようだ。カイザー自身もリンカーコアを蒐集するものについて何か知っているようだがまだ思い出せないでいた。わからないのならば本人に聞くことにしたのだ。

『先ほどあなたは何をしていたんですか？』

「・・・・・・」

『だんまりですか。もう一度聞きます、何をしていたんですか？』

先ほどとは違い声を低くして少し威圧感をましてシャマルに向かって話すがまだ沈黙をなんとか保っていた。シャマルは黙っているだけで冷や汗を背中に掻いている。

「・・・・・・」

『わかりました。ならこちらにも考えがあります。この手は使いたくありませんでしたが、仕方ありません。プレシアさん、少しうるさくなりますので注意してください』

そういってカイザーはシャマルの頭に手を伸ばしていく、シャマルも逃げようとするがグラビティバインドのせいで体が動かない。そして頭に手を当てた。

『・・・ナイトメア』

そう呟いた瞬間

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

シャマルが叫びだした

「やめて！やめて！壊さないで！私の思い出を壊さないでぇぇぇぇ！！！」

『では質問に答えてくれますか？』

「答えます！答えますから！もうやめてぇぇぇ！！」

それを聞いた瞬間にカイザーはシャマルから手を離し、ナイトメアをやめた。すぐに答えてくれたなら彼女はこんな目に遭わなかっただろうに。

『まず、貴方は何者かを教えてください』

「闇の書の守護騎士・シャマルです」

『じゃあ、何をしていたんですか？』

「リンカーコアを蒐集して魔力を集めていました」

『何のために』

「この闇の書を完成させるのに６６６ページ分の魔力を集めるためです」

すべての質問に素直に答えてくれた。プレシアとカイザーは闇の書という単語がシャマルの口から聞いた瞬間に今回の事がどういう事か思い出した。

『それでは、その闇の書を少し貸してください』

「え！それは・・・わかりました」

貸してくれと言ったときは戸惑ったがナイトメアを思い出したのか、少し考えた後に貸してくれた。
その場にヴォルフを残し、プレシア・セレナードを連れて研究室に入って行った。

その場に残ったヴォルフにシャマルは話しかけていた。

「ヴォルフさん?でしたよね。どうしてあなたは彼と一緒に居るんですか?」

「それは瀕死状態だった我を助けてもらい使い魔にしてもらったからだ」

「彼は、何でこんなことをするんですか?」

「主はロストロギアなど興味がある物には調べてみたいという衝動があるのだろう。それに主が質問をしていたとき、すぐに答えてい

ればナイトメアを使わなかっただろうな」

それを言ってヴォルフは黙ってしまった。それから少ししてカイザー達が闇の書を手に持って戻ってきた。

『ありがとうございました。解析が終わりましたのでお返しします』

「か、解析!!そんな私たちでもできないのに!」

自分たちにできないことをいとも簡単にやってしまったカイザー達を驚いているようだ。カイザーの頭脳とプレシアの頭脳が合わされば、難しいことではないだろう。

『プレシアさんとセレナードと一緒に解析した結果ですが、もしあなたたちが闇の書を完成させた場合、暴走して主は死にますよ。信じる信じないはあなた次第ですがね』

「あなたたち、多分だけど完成した後の記憶がないんじゃないの?前の事件のこと覚えてる?」

プレシアにそういわれたシャマルは思い出そうとしているが思い出せないように見えた。そしてカイザーは指をパチンと弾き、六晶結界とグラビティバインドを解除した。シャマルはなぜ解除されたのかわからない様子だった。

『じゃあ、貴方を主の元へ転移させます。ピンク色の剣士とゴスロリ衣装の子の魔力反応があるので、そこで間違いないでしょうがね』

カイザーはシャマルの足下に銀色の転移魔法陣を展開し、主がいるところに座標をあわせて主の元へ転移させた。

一方八神家

家の中は深刻そうな空気が漂っていた

「いったいどうするんだよ!!シャマルもあいつに闇の書ごと連れ

て行かれちまったし」

「落ち着けヴィータ、主が起きてしまう。しかしどうしたものか、連れ戻そうにも場所もわからない」

シグナムはそう言うがあの時カイザーに手も足も出ず、何も出来ずにシャマルを連れて行かれた事を思い出したのか自分の拳を力いっぱい握りしめていた。

「落ち着け二人とも焦ってもどうにもならん」

三人がそう考え込んでいると目の前に銀色の魔法陣が展開される。

「この色の魔法陣はあいつだ！！」

ヴィータが魔法陣の魔力光を見て間違いなくカイザーのものだと判断して三人とも戦闘態勢に入ったがそこからシャマルが闇の書を持って出てきた

「「「シャマル！」」」

「えっと、ただいま？」

「なにか、されなかったのか！」

シグナムは連れ去られてカイザーに危害を加えられるようなことはなかったのかと心配している。

「彼の言う質問に答えさせられたわ」

「まさか！すべて素直に答えたのか！」

シャマルの口から出た言葉が信じられなかった。

「最初は黙って頑張ったけど、彼にある魔法を使われてから全部答えたわ」

「どんな魔法を使われたんだ？」

「あんな魔法は見たことなかったわ。おそらく、彼のオリジナル魔法・ナイトメア。相手が一番見たくない悪夢を見せる魔法よ」

「それで何を見たのだ」

シャマルはまた思い出したのか、自分の体を抱きしめ涙を流し始めた。よっぽど自分が見たくないものだったのだろうとその場にいる全員が思った。

「私のはやてちゃんとの思い出がどんどん壊されていくものだったわ・・・・・」

それを聞いてシグナムたちは黙ってしまった。

「・・・彼が言っていたわ。闇の書の解析が完了したって、それで闇の書を完成させれば、主は死んでしまうと」

「嘘だ！そんなの嘘に決まってる！！」

「それともう一つ言っていたわ。おまえ達は闇の書を完成させたあとの記憶があるのかって。」

三人はシャマルと同様に以前のことを思い出そうとしているもののやはり思い出すことはなかった。このとき、カイザーからの忠告を聞いていればあのような事は起こらなかっただろう。

「とにかく私たちのやることは変わらない。おそらく、やつはまた私たちの前に現れるだろう。しかし、ベルカの騎士である私たちは一対一では負けられん」

そう決意し、夜が更けていくのだった

第十三話

なのは達がデバイスを破壊されてから数日、市街地上空に守護騎士たちとデバイスを強化したなのは，フェイト、クロノ達がいた。僕は上空にいますよ。今回は見るだけで、襲ってきたらセレナードとヴォルフに対応してもらいます。

なのはとヴィータ、シグナムとフェイト、アルフとザフィーラに別れ、クロノとユーノは闇の書の所持者を捜し始めた

なのはとヴィータ

「私が勝ったら話を聞かしてもらうよ、いいね！」

「やれるんならやってみろよ」

そしてヴィータは手から四つのビー玉サイズの鉄球を取り出して自分の目の前に浮かせる。それをアイゼンで振りかぶり、なのはに向かって打ち出した。しかし、なのははそれをＡｘｅｌ　Ｆｉｎで上空に回避するが、なのはに向かってヴィータが突っ込んできた

「アイゼン！」

「Ｅｘｐｌｏｓｉｏ・・Ｍｉｓｓｉｌｅ　Ｆｏｒｍ」

カードリッジをロードしてアイゼンを体全体を使って回転させ、遠心力をつけてなのはに襲いかかる。

「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｄ」

「硬てぇ」

「Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ」

しかし、強化されたレイジングハートのプロテクションは以前とは比べものにならないほど硬くアイゼンで壊すことが出来ず、逆に反撃を受けて吹き飛ばされた。カイザーもその光景をビルの屋上に腰掛けて見ていた。

カートリッジをつけるだけでそんなに変わるものなんですか。僕もブラックフォースにカートリッジをつけて見ましょうかねぇ。今度はなのはが攻撃するみたいですね。

「アクセルシューター」

なのはから放たれた攻撃は途中から魔力弾が分裂し、１２発のシューターに別れてヴィータに襲いかかる。

「Ｃｏｎｔｒｏｌ　Ｐｌｅａｓｅ」

なのはは魔力弾をすべてコントロールしようとして目をつぶり集中力を研ぎ澄ませる。

「アホか、こんな大量の玉、制御できるはずがねぇ！」

１２発すべてコントロールすることなど絶対に無理だと思って鉄球４個をなのはに向かって撃ち出すが近くに行った瞬間に魔力弾によって放った鉄球すべて破壊されてしまう。

「約束だよ、私たちが勝ったら、お話聞かせてもらうから・・・ア

クセルシュート！」

そしてかけ声と共にすべての魔力弾が一斉にヴィータに向かって襲いかかる。ヴィータも防御しているが、その防御も徐々に罅が入り、壊れかけていて防戦一方である。

変わって、シグナムとフェイト

こちらは激しい近接戦闘が続いていた。

「はぁぁぁぁ！」

「はぁぁぁぁ！」

ガキンッ！

武器と武器がぶつかり、火花を散らす。そして両者は互いに距離を取り離れた。

「Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ」

フェイトの前に八つの魔力弾が形成される。

「プラズマランサーファイア！！」

そしてシグナムに向かって発射され、シグナムは剣に炎を纏わせはじき飛ばす。しかし、弾かれた魔力弾は一定の距離で止まった。

「ターン」

フェイトのかけ声で向きを変えシグナムに向かっていく。シグナムは上空に避けるがまた襲いかかってくる。シグナムはカートリッジをロードし、炎でかき消す。その隙にフェイトが近づき攻撃を仕掛ける。

「Ｂｕｒｎｉｎｇ　Ｆｏｒｍ」

「Ｓｎａｋｅ　Ｆｏｒｍ」

互いの攻撃で煙が立ち再び距離を置く。白熱してますねぇ。互いに互角と言ったところでしょうか、頑張ってくださいね。

「強いな、テスタロッサ、それにバルディシュも」

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

「あなたとレヴァンティンも・・・シグナム」

「Ｄａｎｋｅ」

「この身になさねばならぬことがなければ、心躍る戦いではあったはずだが、仲間と主のため今はそうも言ってられん、殺さずに済ます自信がない、この身の未熟を許してくれるか」

シグナムはそう言ってレヴァンティンを鞘に納めて居合いのような構えを取る。

「かまいません、勝つのは私ですから」

互いに次で決めるつもりですかね、ああ、シャマルがあんな所に居ますね。クロノも近くに居るようですが、もう一人隠れて居るみたいですが誰でしょう?まぁ、いいです。行きますか

『セレナード、ヴォルフ、シャマルを見つけました。近くに誰か隠れて居るようですが、あなたたちなら問題ないですよね』

「もちろんだよ」

「問題ありません」

三人ともシャマルのもとへ向かった、その頃シャマルはザフィーラと念話をしていた

「・・・（あれを使うしか）」

「（わかってるけどでも・・・）」

シャマルは念話して後ろから来る気配に気づかずクロノに後ろから杖を突きつけられた。

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します。

抵抗しなければ貴方には弁護の機会がある、同意するなら武装の解除を」

武装解除を求めていると横から仮面をつけた男が現れ、クロノを蹴り飛ばした。その蹴りによってビルにぶつかったクロノは少し気を失っているようだ。

『ヴォルフ、行ってください。あの仮面の男を倒してもかまいません。私はシャマルに話がありますから』

「使え、闇の書の力を使って「うおぉぉぉぉ」なにっ！」

仮面の男にヴォルフが襲いかかり、吹き飛ばした。それでヴォルフは追いかけて追い打ちおかけようとする。

「どうなってるの？」

シャマルは首をかしげて不思議そうにするが、目の前に現れた人物。カイザーを見た瞬間、体が硬直する。

『やぁ、こんばんわ、シャマルさん』

「あ、あなたは・・・どうしてここに」

シャマルの声が震えているのがわかる。よほどあのときのことが効いたのだろうか。

『おかしなことを聞きますね。まぁいいです。今回は手を出しません、見ているだけですから気にしないでいいですよ』

そういい、何もしないとジェスチャーをしてみせる。それを見たシャマルは少しは安堵する。

「わ、わかりました。信じていいんですね。」

『ええ、誓ってもいいですよ。早くしないとまずいんじゃないんですか』

結界の方に指を指すカイザー、それを見て慌てて闇の書を開いた。

「闇の書よ・・守護者シャマルが命じます・・・敵を打ち砕く力を
今ここに」

シャマルの詠唱が終わり結界の上空に魔力が集まり始める

「打って破壊の雷！」

結界の向かって雷が落ち、結界に罅が入っていく。なかなかの威力
ですが僕の方が上のようですね。

シグナムとフェイト

「すまん、テスタロッサ。この勝負預ける」

「シグナム！！」

なのはとヴィータ

「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士・ヴィータ。あんたの名は」

「なのは、高町なのは」

「高町なぬ・・・なにょ、ええい呼びにくい！」

「ええ、逆ギレ！！」

「ともあれ勝負は預けた。次は殺すかんな」

そういい飛び去って言った、そして結界が破られ雷が落ちた。そこにアルフが間に合いフェイトとなのはをシールドで守っていた。

少し前、結界の外

「誰だ、おまえは。なぜ邪魔をする」

「我はヴォルフ、主の使い魔だ」

「主は誰だ？」

「教えると思うか」

「そうか、なら力ずくで聞き出してやる」

そういって鋭い蹴りをヴォルフに向かって放った

「フン！・・・これが本気か？」

「なっ！」

仮面の男の渾身の蹴りはヴォルフに片手で簡単に止められてしまった。

「見せてやろう、これがほんとの蹴りだ。はぁぁぁぁぁ！！」

仮面の男が放った蹴りよりも鋭い蹴りを放ち、仮面の男は防御するがその上から吹き飛ばした

「ぐぅぅぅっ」

さらにヴォルフはカイザーに教えてもらった瞬動で仮面の男の上に一瞬で移動し、頭に蹴りをたたき落とした。それをまともにくらい、地面に激突してふらふらと立ち上がり

「覚えていろ！」

そういい、転移していった

「主のもとへ、戻らねば」

ヴォルフもカイザーの元へ帰って行った

数時間後

海鳴市ハラオウン家

リンディたちは闇の書の守護騎士達について話あっていた

「問題は彼らの目的よね」

「ええ、どうもふに落ちません。彼らはまるで自分の意志で闇の書の完成を目指しているように感じますし」

「それが何かおかしいの？闇の書ってのもようはジュエルシードみたくすっごい力がほしい人が集めるものなんでしょ、だったら、その力がほしい人のためにあの子達が頑張るってのもおかしくないと

思うんだけど・・」

それを聞いたクロノとリンディは顔を見合わせ説明し始めた

「第一に闇の書の力はジュエルシードみたいに自由に制御が効くような者じゃないんだ」

「完成前も完成後も純粋な破壊にしか使えない、少なくともそれ以外に使われたという記録は一度もないわ」

「そうかぁ」

クロノがなのはたちに向かって守護騎士について教える。

「それからもう一つ、あの騎士達、闇の書の守護者の性質だ。彼らは人間でも使いまでもない闇の書にあわせて魔法技術で作られた擬似人格、主の命令を受けて行動するただそれだけのプログラムに過

ぎないはずなんだ」

クロノが言い終わったとき目の前に銀色の魔法陣が現れ、カイザー・セレナード・ヴォルフの三人が現れた

第十四話

突如現れたカイザー・セレナード・ヴォルフの三人に警戒を示すリンディ達

『やぁ、先ほどぶりですかね。クロノ君』

「何しに来たんだ！」

先ほど、闇の書達の守護騎士に協力するような体制だったのでクロノは自分のデバイスをカイザーに向けて突きつけた。

『別にあなたたちの追っている闇の書事件の進展具合を聞きに来たんです』

クロノ達は闇の書のことを知っていることに驚き、リンディが皆を代表してそのことについて聞いた

「っ！どうして貴方がそのことを知っているの？」

『簡単なことですよ。クロノ君が杖を突きつけていた女性シャマルに教えてもらったんですから』

「そんないつの間に」

『なのは、貴方が結界を壊そうスターライトブレイカーを放とうとしたときに胸から手が出てきてリンカーコアを蒐集されたことがありましたよね』

「うん」

『あの後に今僕の後ろにいる二人にシャマルを捕まえてもらって自分の家まで来てもらったんですよ。最初の方は頑固でしたけど、途中からは素直に答えてくれましたよ』

「なぜ、捕まえたのに僕達に教えない！」

クロノは闇の書の守護騎士を捕まえたのならばなぜ自分たちに教えないのだとカイザーに怒鳴った。クロノの中では自分たち時空管理

局がすることは正しいと思い込んでいるので自分たちが知ることが当然のように思っているようだ。

『クロノ君、僕は以前も言いましたよ。僕は管理局の敵でも味方でもないと』

「じゃあ、貴方はここに何しに来たの？」

リンディの問いにカイザーはちょっとした情報をあげに来たんですよといいリンディ達に話した

『まず、闇の書ですが元の名前は夜天の魔導書といいます。この魔導書はもともと魔法などを記録するためのものでしたが、歴代の主達が改変を重ねて闇の書になりました。・・・あとあの守護騎士達は闇の書が完成してからの記憶はありませんよ。・・・まぁ教えてあげられるのはこれくらいですね。あとは無限書庫にでも行って調べるなりなんなりしてください』

リンディ達は驚いていた、なぜ自分たちよりも幼い子供が私たちの知らないことを知っているのかと

『そういえば、あなたたちは僕の名前を知ってましたっけ？ユーノとなのは、フェイト、アルフには教えたはずなんですけど』

「そうなの？なのはさん．彼はなんて言う名前なの？」

「カイザー君の名前はカイザー・アルベルトですけど」

なのはから名前を聞いた瞬間、リンディ・クロノ・エイミィが固まった

「おまえがあのカイザーなのか！」

「まさか、ここにミッドで天才と言われている子がいたなんて」

「すごい、すごいよ～」

三人の反応は様々だった、なのはが何を驚いているのかわからずリンディ達に聞いた

「なんでそんなに驚いているんですか？」

「なのはさんが知らないのも無理ないわね。このカイザー君はね、ミッドの方では天才といわれているのよ」

「ふぇ！そうなんですか」

フェイトとアルフはあの時からあの場所を出ていなかったのでそれについては知らなかったらしく少なからず驚いていた

『話を戻していいですか。さっき何でそんなことまで知っているんだって顔してましたけどシャマルに闇の書を借りて解析したんですよ。まぁ一人でではないですけど』

「解析だと！そんなことできるはずが。」

『現にできたんですから、助手も優秀ですし、セレナードにも手伝ってもらいましたからね』

カイザーはそういってセレナードの頭を撫でる。セレナードは気持ちよさそうに目を細めていた

「んぅ～・・」

それをなのはたちは少し羨ましそうに見ていた

「貴方の助手って誰かしら?」

『あなたたちがよく知ってる人物ですよ、なのはもフェイトもここに居る全員が知ってます』

リンディ達はそういわれ考えるリンディ達が知っており、なのは達

も知っていて助手ができるほどの人物一人だけいるがその人物なはずはなかった

「でも、そんなことあり得ないわ。だってあのとき」

「どうしたんですか、リンディさん」

「一人だけ一人だけ該当する人物が居るけどあり得ないの」

「誰なんですか?リンディさん」

「フェイトさん、貴方の母親プレシア・テスタロッサよ」

その名前を聞いた瞬間フェイトを除いた全員があり得ないと思った。なぜならプレシアはクロノ達の目の前で虚数空間に落ちていったのだから。

「あり得ない。だってプレシア・テスタロッサはあのとき確かに虚数空間に落ちたはずだ」

そのときフェイトが口を開いた

「やっぱり、そうだったんだね」

「フェイトさん、どういうこと？」

「あのとき、母さんが虚数空間に落ちていく時に一瞬だけ銀色の光が見えたんです。やっぱりあれはカイザーだったんだね」

『見えていたんですか。そうですよ。僕がプレシアを虚数空間に完全に落ちる寸前に助けました。それとアリシアは生きていますよ』

「何をふざけているんだ！アリシア・テスタロッサは何年も前に死んでいるんだぞ！！」

『確かにアリシアは死んでいましたよ。でも甦らせたんですよ』

「ねぇ、ユーノ君。死んだ人を甦らせることなんてできるの？」

「不可能だよ。そんな死んだ人を甦らせたなんて聞いたことがない」

『じゃあ、会ってみますか？会うのなら今から呼びますが』

「そこまで言うのなら会わせてもらおうじゃないか」

クロノが代表して言って皆同意した。フェイトは早く会いたくてうずうずしているみたいです

『（プレシアさん、今からこの座標に来てもらえませんか。フェイト達が会いたいようです）』

「（わかったわ。フェイトにアリシアを紹介しないといけないから連れて行くわね）」

カイザーとプレシアは念話を終えて、少ししたら目の前に魔法陣が現れて、プレシアとアリシアが出てきた

「こんにちは、皆さん。フェイト久しぶりね。」

と挨拶したがなのは、クロノ、ユーノ、アルフは警戒したままだった

「母さん、本当に母さんなの」

フェイトの声は震えており、目に涙を浮かべている

「そうよ、フェイト。あんなことしてごめんなさいね。でも仕方なかったの」

フェイトはプレシアに抱きついた

「いいのわかってる。どうしてあんなことしたのかも。母さん、うあぁぁぁぁぁ！！」

そしてフェイトはプレシアの胸の中で大声で泣いていた。その光景を残りのメンバーは見ている事しかできなかった。

「こっちがアリシアだけど、フェイトが妹にになるわね。アリシア、この人が貴方の妹よ。」

「フェイト、よろしくね」

「うん、お姉ちゃん」

『これで信じてもらえましたか？』

実際にプレシア達が生きているのを自分たちの目で見てしまった以上リンディ達はこの事実を信じざるを得なかった。

「クロノ、これはもう信じるしかないわね」

「そのようですね」

『闇の書のこと、頑張ってくださいね。プレシアさん、手伝いたかったら手伝っていいんですよ』

「いいえ、やめておくわ。フェイト、遊びに来たかったら来なさい。歓迎するわよ」

「待て、君たちは協力しないのか？」

『クロノ君、何回言わせるんですか。僕は管理局の敵でもなければ味方でもありませんよ』

「待ってください！プレシア・テスタロッサには次元震を引き起こした罪があります。協力してくれるなら、少しくらい罪を軽くする弁護をすることができます」

今度は自分たちに協力しないなら交渉を仕掛けてきますか。全く何を言ってるんでしょうか。はぁぁ～

『何を言っているんですか？あなたたちはプレシア・テスタロッサは虚数空間に落ちて死亡したと報告したんでしょう。だったら無理ですよ』

「しかし、・・・」

『あまりしつこいと僕もいい加減に怒りますよ。』

あまりにもしつこいので声を低くして少し威圧感を増しながら言い放った。なのはたちは手に汗をものすごい掻いて、体少し震えている

「わかりました」

この状況下ではリンディは頷く選択肢がなかった。

『どうしても危なくなったら今回は助けてあげますよ』

そういってカイザーはプレシアとアリシア、セレナード、ヴォルフを連れて転移し、帰って行った

「なんて子なのかしら、ほんとになのはさん達と同い年なのか疑ってしまうわ」

「相変わらず、すごいですね。前に対峙したときよりも威圧感が増してましたよ」

なのは達も緊張が解けたのかその場にへたり込んだ

「やっぱり、カイザー君はすごかったの」

「ほんとだね」

「一時期敵に回してたと思うと改めてぞっとするよ」

そして皆は再び闇の書のことについて話し合っていた

第十四話（後書き）

頑張って更新しています。何かあったら教えてください

第十五話

今は文化ゼロで人間が住んでいない世界に来ています。なぜかというとシグナムとザフィーラがここに来ているから、あとをつけてきたからです。シグナムが巨大な砂龍と戦って苦戦していますね。近づいて見ましょう。

「グウォオオオ」

「はぁ、はぁ、はぁ。ヴィータが手こずる訳だな、少々やっかいな相手だ」

シグナムは砂龍との戦闘でかなりの体力を消費し、突如後ろから現れた尻尾に反応が遅れ捕まり身動きがとれなくなった

『こんにちは・・・』

「貴様は！！」

カイザーとセレナードがいきなり現れたことに驚き、同時に警戒をした。

『貴方にはそんな趣味があったのですか？』

カイザーがそう言ったのはシグナムは今かなりいやらしい格好になっていたからである。シグナムは少し顔を赤らめている。

「そ、そんな訳あるか／／／」

『助けましょうか？』

「／／／・・・頼む」

『覇龍咆吼撃！！』

そう言って放った斬撃で衝撃波を発生させ、砂龍の体を切り刻みシグナムを自由にした。

「すまない、だが、なぜ助けたのだ？貴様は管理局ではないのか」

『僕は管理局の味方ではありませんよ、もちろん敵でもありませんが。あえて言うなら気まぐれですかね。』

「気まぐれか。そのままだな」

シグナムはカイザーの行動理由を聞いてあきれていた。同時に助けられたことに感謝もしていた。

『貴方の相手が来たみたいですよ。僕は特に手を出しませんので、見ているだけですから』

「そうか」

そこにフェイトが現れ、シグナムと対峙した。

「預けた決着はできれば今しばらく先に延ばしたいが速度はお前の方が上だ、逃げられないのなら、戦うしかないな」

「はい、私もそのつもりで来ました」

二人は互いに武器を構え、突っ込み武器がぶつかり戦闘を開始する。一度距離をとり、フェイトが高速でシグナムの後ろを取り、バルディッシュを振りかぶるがガードされ、反撃を受けて吹き飛ばされる。シグナムはカートリッジをロードする。

「Ｓｎａｋｅ　Ｆｏｒｍ」

レヴァンティンの連結刃が伸び、フェイトに襲いかかる。フェイトはそれを何とか避けカートリッジをロードする

「Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．Ｈａｒｋｅｎ　ｆｏｒｍ」

「ハーケンセイバー！」

フェイトはシグナムに向かって魔力刃を飛ばす。それをシグナムは上空に回避するがフェイトが待ち伏せており、バルディシュを振りかぶり攻撃する

ガキン

「・・鞘！！」

「はぁぁぁ！」

フェイトの攻撃は鞘で止められ、シグナムに蹴り飛ばされるがとっさにシールドを展開し、ダメージを逃がし、プラズマランサーを放ち、シグナムに直撃するがダメージはあまりないようだ。そしてフェイトとシグナムは互いに魔法陣を展開した、大型の技を使うのですね。

「プラズマ・・・」

「飛龍・・・」

「スマッシャー！！！」

「一閃！！！」

互いの技がぶつかり煙が上がる。カイザーは激しいなぁと思ってたりする

「はぁぁぁぁぁ！」

「はぁぁぁぁぁ！」

そしてその攻防が続いていた。お互いに限界が近く次の一撃で決めようとする。ん・・・また前のやつが近くに潜んでいますね。決闘の妨害は関心しません

『（セレナード、気づいていますね）』

「（もっちろん～どうするの？・・・潰していいの？）」

セレナードの性格が若干変わった。そう、セレナードには人格がもう一つ存在するのだ。カイザーを好きなことは変わらないが相手を潰すことを積極的になる。

『（かまいませんがほどほどにお願いしますよ。殺しはダメですからね）』

「（もちろん、そのくらいわかっているわ）」

セレナードはアウトフレームで１５０ｃｍ位になり、カイザーよりも大きくなった。フェイトのほうに視線を戻すと仮面の男がフェイトの胸から手を出しリンカーコアを捕獲していた

「さあ、奪え」

「っ！くっ」

シグナムはそれを見て目を見開き、迷っていた。リンカーコアから魔力を蒐集することが目的であるがこんな方法で蒐集したくなかった。悩んでいるとそこに念話が飛んで来た

「（奪いなさい、急いでいるんでしょ）」

「（誰だ！）」

「（私はカイザーの近くに居るセレナードよ。治療なら私がしといてあげるわ）」

「（すまない、感謝する。）」

そう言ってフェイトのリンカーコアを奪い、去って行った。その場に残ったのは仮面の男とセレナード、カイザーの三人だ。仮面の男は転移しようとするがシグナムが去ってすぐにカイザーが強力な結界を張ったためにできないでいた

「なぜ転移できない！」

「できるわけないじゃない。カイが結界を張っているのに」

「なぜ、邪魔をする！！」

「貴方が二人の勝負に水を差したからよ。」

セレナードはシグナムとフェイトに真剣勝負にこの仮面の男が妨害をして邪魔したことをよく思っていなかった。

「ならば、貴様を倒した後に、術者を倒すだけだ」

そう言って戦闘態勢に入った

「ふふ・・・貴方にできるかしら」

セレナードはいつもと違い大人びたように笑った。仮面の男はセレナードに突っ込んで行くが障壁にいとも簡単に防がれる。

「なにっ！」

「ふふ、もう終わり？こないならこちらから行くわよ」

「カイの技を借りるわ・・・デュアルバインド」

仮面の男はそれを避けられずバインドに拘束される。

「こんなバインドすぐに・・・どうしてバインドが解除できない！」

「貴方程度の実力でこのバインドが解除できるはずないでしょ。」

仮面の男はこの程度のバインドならば、直ぐにでも破壊できると余裕そうにしていたが実際にはバインドを破壊しようとしてもまったく破壊できなかった。セレナードは仮面の男の焦る姿を見て笑って

いる。

「ふふ、じゃあさよなら・・・ダークジャッジメントレイ・・・」

セレナードの頭上に魔力が集まり、矢のような形になり仮面の男に発射された。そして貫いた。

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ」

悲鳴をあげ最後の力を使って転移して逃げていった

「逃げられたか・・・まぁいいわ。フェイトの治療をしないと」

セレナードはフェイトに近づき、治癒魔法をかけた。

『セレナード、お疲れ様。』

「ありがとう。少し眠るわ」

そう言って元の大きさに戻りカイザーのポケットに入り眠ってしまった

「・・・ＺＺＺ」

『久しぶりの戦闘でしたので疲れましたかね。ゆっくり、休んでくださいね』

それからフェイトを管理局員が来るまで膝枕していた

第十六話

会議室

「仮面の男の映像も残せたし、エイミィのおかげだよ」

「それにしても、この仮面の男と戦ってる女は誰？」

二人は仮面の男と戦っている女が気になっているようだ

「たぶん、それはセレナードさんだと思います」

「セレナード？」

「そうだ。いつもカイザーにくっついてるやつだ。カイザー自身もそうだが、このセレナードもかなり強い。」

それを聞いてロッテとアリアが若干表情が歪む

「これより司令部をアースラに戻します。各員は所定の位置に、なのはさんはおうちに戻らないとね」

「でも・・・」

「フェイトさんのことなら大丈夫。私たちでちゃんと見ておくから」

「はい！」

八神家

「助けてもらったってことでいいのよね。」

「少なくとも仮面のほうはそうだろうが、黒いバリアジャケットのやつは違う」

「そうね、彼はどちらでもないわね」

「どういうことだよ！」

ヴィータはどういうことかわからず、怒鳴った

「つまりねヴィータちゃん、私をさらった子は完成してもしなくてもどちらでもいいのよ。彼はただ興味があるだけだもの」

「私はやつに助けられたが、どうして助けたのかと聞いたら、ただの気まぐれと言っていた。おそらくあれは本当のことだろう。」

「どうしてそんなことわかんだよ！」

「やつは必要以上のことはしてこない」

ヴィータも思い当たる節があったのか、それを聞いて黙ってしまった。そのとき結界が破壊された

「っ！みんな結界が破壊されたわ！」

「そんな簡単に結界を破壊できるなど、誰が侵入してきたんだ」

「これは！あの人達が来たわ。どうしよう」

シャマルが張った結界を破壊して侵入してきたのはカイザー達だった。

「んなもんぶっとばせばいいだろ」

「それで返り討ちにあったのをわすれたのか」

ヴィータは悔しそうに拳を握りしめる

「クソ、どうすりゃいいんだよ」

そこにカイザー達が入ってきた

『こんにちわ』

「こんにちわ～」

「・・・・・」

二人は挨拶をしたがヴォルフはザフィーラを見ていた。シグナム達は警戒をする。

「何しに来たのだ。」

『まぁそう警戒しないでください。今日はあなたたちとってかなり重要なことを教えに来たんですから』

「重要なこと？いったい何なの」

『あなたたちの主は限界が近いですよ。』

「それは本当か？」

そのとき二階で何かが倒れるような音がした

「はやて！！」

「はやてちゃん！！」

全員が二階に上がっていった。僕達も行きましょうか。二階に上がって行くと彼女たちの主の女の子が胸を押さえて倒れていった

「はやて！はやて！。病院！救急車！！」

「わかっている」

『かなり浸食が進んでいるみたいですね』

そう言ってカイザーがはやてに近づいていくとシグナムたち近づけまいと立ちはだかる

「何をする気だ！」

『彼女の症状を軽くする治癒魔法をかけてあげるだけです』

「そんなの信じられるか！！」

ヴィータはカイザーが治療と言ってはやてに危害を加えるつもりかも知れないと思い込んでまったく信用していなかった。

『そうですか。人が親切に彼女の症状を軽くしようとしているのに。じゃあ帰ります。』

そしてカイザー達は踵を返して帰ろうとする。

「待ってください！！本当に貴方ならはやてちゃんの症状を軽くできるんですか！！」

「シャマル！何いってんだよ！」

ヴィータはシャマルがカイザーを止めたことに驚いていた

『できますよ。僕ならでもしなくていいんでしょ。そこの子は早く帰れて言ってますし』

「お願いします。はやてちゃんの症状を軽くしてください」

シャマルは自分でははやての症状を軽くすることが出来ないことは実際にしてみてわかったいるので土下座して頼み込んだ

「シャマル・・・私からも頼む」

シグナムも頭を下げた

『わかりました。そこまで言うならやりましょう』

そう言いはやてに近づき治癒魔法をかける。すると先ほどまで苦しんでいたはやての表情が柔らかくなった

『治癒魔法をかけましたが完治する訳ではないので、その辺は理解してください』

「ありがとうございます」

「世話をかけた」

「あのさっきはごめん。それとありがと」

「すまない」

『いいですよ。敵と思われても仕方ありませんし、気にしてませんよ』

そう言いながらヴィータの頭を撫でて微笑んだ。それを見た女性陣は

女性陣「／／／／／」

顔が真っ赤になっていた

『それともう一つ、あまり仮面の男を信用しない方がいいですよ。結界は強力なものを張っておいてあげます』

ヴォルフとセレナードは頷き、多重結界を発動させた

「こんな結界見たことない。私のとはレベルが違う」

『はやては一応入院させておいた方がいいですよ。それともう一度言いますが僕は味方ではありません。貴方達が忠告を無視してもどうこう言うつもりはありませんが向かってくるなら排除しますからね。』

足下に魔法陣をその場を転移した。カイザーが転移した場所は仮面の男が転移していった所だった。なぜわかるかというとセレナードが調べていたのだ。

グレアムの部屋

グレアムは闇の書のデータを見ていて、そこにロッテとアリアが入ってきた。

「父様、あんまり詰めていると体に毒ですよ」

「そうだよ」

「・・・リーゼか、どうだい様子は」

グレアムが自分たちの計画の進行具合を確かめた。何せ絶対にばれてはならないもので慎重かつ確実にしなければならないもだからだ。

「まあ、ぼちぼちですね」

「クロノ達も頑張って増すけど，闇の書が相手ですから。」

「そうか。すまないな、お前達までつきあわさせて」

「何いってんの父様」

「そうですよ。あたし達は父様の使い魔、父様の願いが私たちの願い」

そう言いきったとき、目の前に銀色の魔法陣が現れた

「これは！」

リーゼ姉妹が警戒を強める。そこからカイザー達が現れた。

『到着しましたが、そうですか。あなたたちが仮面の男だったんですか』

「お前はあのときの！！」

『その反応は肯定と取ります。ギル・グレアム提督、貴方の使い魔でしたか』

「君は誰だね。ここがどこかわかっているのか！」

そう言われカイザーは平然と答える

『わかっていますよ。どうせ局員はこの部屋には入って来れません。この結界を破壊できる者が居るのなら話は別ですが』

そうカイザーはこの部屋に来た瞬間に結界を張っていたのだ

「父様の邪魔はさせない！」

カイザーに飛びかかってきたがヴォルフが現れ、ロッテの攻撃を防いだ

「くっ！」

『何をするのか知りませんが、僕と敵対するのなら相応の覚悟を持ってくださいね』

カイザーがそう言い終わると同時にアリアのバインドによって三人とも捕縛された

「ふう、これで身動きできないでしょ。残念だったわね。」

カイザー達は捕まっているのになにも焦るような表情を見せない。むしろ笑っているようにもみえた。

「君たちに私たちの邪魔はさせない。闇の書を葬るために」

「これでおしまいだね。」

『そうですか。僕がここに来たのはあなたたちの目的を知るため。来て正解だったようです』

「何言ってるのさ、捕まって何もできないじゃないか！」

『ああ、これのことですか。バインドブレイク』

手に魔力を込めてアリアのバインドをいとも簡単に破壊した。

「そんな、私の最高レベルのバインドなのに！！」

『目的も知れましたから、もう用はないので帰ります』

グレアムとリーゼ姉妹が何か言おうとしていたが言う前に転移していった。残ったグレアムたちは

「マズイことになった。」

「心配ないよ！あたし達二人がかりなら！」

「そうですよ、父様！」

「そうならいいんだが・・・」

グレアムは不安を拭いきれないでいた。アリアの最高レベルのバインドを簡単に破壊することのできるあいてなのだから。

第十七話

すずか達がはやてにサプライズプレゼントをしに内緒ではやての入院する病院にやってきてシグナム達となのは達がばったり会ってしまった。そして場所を変えて夜にビルの屋上にいた。ちなみに僕達も隠蔽魔法で姿を隠して近くに居ます

「・・はやてちゃんが闇の書の主」

なのははやての病室でシグナムを見たことによって誰が主なのかがわかってしまった。

「悲願はあとわずかで叶う」

「邪魔をするなら・・・はやてちゃんの友達でも」

「待って、ちょっと待って、話を聞いてください。ダメなんです！闇の書が完成したらはやてちゃんは・・・」

なのはが言い終わる前にヴィータが空中からハンマー振りかぶりなのはに攻撃を仕掛ける。それを見てカイザーがヴォルフに指示を出した。

『ヴォルフ、行ってください。最低限のことだけでいいですからね。』

「では、言って参ります」

ヴォルフにはなのはの方に行ってもらいました。セレナードはいつの間にか人格が変わってアウトフレームで１５０ｃｍ位になってますし。いつの間に、ちょうでいいですね。

『セレナード、貴方はフェイトを守ってあげてくださいね』

「カイのお願いなら仕方ないわね。わかったわよ、帰ってきたら頭撫でてね」

カイザーにウインクしてフェイトの方に向かうセレナード。この性格の時でも頭を撫でてもらうことは好きなようだ。

パシンッ！

「なにっ！」

「フン！」

ヴォルフはヴィータのアイゼンの側面に蹴りを当てて攻撃をはじき飛ばした。シグナムもフェイトに攻撃を仕掛けた

「はぁぁぁぁぁ！！！」

パシッ！

「「なっ！」」

「ふふふ、騎士が不意打ちなんて情けないわね」

セレナードがフェイトの前に現れてシグナムの剣を指二本で受け止められたことに驚いていた。そして同様にフェイトも驚いていたが、すぐにバルディッシュを出した

「管理局に我らが主のことを伝えられては困るんだ」

「私の通信防御範囲から出すわけにはいかない」

『じゃあ、僕がその防御範囲を壊してあげましょうか』

気配なく現れたカイザーにシャマルは後ろから手を掴まれて動けなかった。

「え！いつの間に」

「「カイザー（君）」」

『シャマル、貴方は僕の忠告を無視したんですね』

その言葉と同時に徐々に手に力を込めていき、シャマルの手首がどんどん締まっていく。

「痛っ！痛い痛い」

「貴様！！シャマルを離せ！」

シグナムにそう言われてカイザーはあっさりと手を離した。どうしてこんなにも早く解放したのだろうかと思ったが今は目の前のなのはとフェイトの二人に注意を向けた。

『いいですよ。僕は確かにあのとき忠告しました。それを無視したのはあなたたちです、絶望するといいですよ。セレナード・ヴォルフ、ここを少し離れます』

「わかったわ。ヴォルフ行きましょ」

「うむ、行こうか」

そして自分たちに攻撃の余波が来ないように注意してなのは達を見ていた。すると、なのは達とシグナム達が戦闘開始して少ししてからなのはが突如バインドに捕まった

「バインド、また！」

「なのは！」

フェイトは周りを見渡し、ある一点に攻撃を仕掛ける。すると空間が歪み、隠蔽魔法が解かれ仮面の男が出てきた。追い打ちをかけようとするがもう一人の仮面の男が出てきてフェイトを蹴り飛ばした。そしてフェイトもバインドに捕まった。

「ふ、二人！！」

そして、シャマル、シグナム、ヴィータが次々に捕まった。やはり来ましたね。仕方ないので様子だけ見に戻りましょう

『リーゼ姉妹、やはり来ましたね』

「貴様！！」

カイザーはこちらに攻撃をされそうになったが手を前に出して制した。

『今は手は出しませんので、ご安心を』

「本当だな」

カイザーは頷くき、シグナム達に声をかける

『シャマル、僕はあのとき言いましたよ。仮面の男には気をつけろと、僕は手を出しません』

「カイザー、どういうこと?!貴方はこの仮面の正体を知っているの」

『知っていますよ。手は貸す気は全くありませんがね。僕は遠くから見ていますよ』

そう言って離れた。そして仮面の男の手に闇の書が現れ、ヴィータ・シャマル・シグナムのリンカーコアを吸収し始め、シャマルとシグナムが消えていった。ヴィータも吸収され始めたとき、ザフィーラが仮面の男に突っ込んできた

「うおぉぉぉぉぉぉ」

しかし、仮面の男の障壁に阻まれてしまう。

「そう言えば、もう一匹いたな。奪え」

ザフィーラのリンカーコアが吸収され始めて、ザフィーラはその場に倒れる。なのはとフェイトは四重のバインドにクリスタルケージで閉じ込められていた。仮面の男はなのはとフェイトに変身する。魔法陣が現れ、そこにはやてが現れる。

「なのはちゃん・・・フェイトちゃん。なんなんこれ?」

「君は病気なんだよ。闇の書の呪いって病気

「もうね・・・治らないんだ」

「闇の書が完成しても助からない」

「君が救われることは・・・ないんだ」

二人にそう言われてはやての瞳に動揺が走る。もちろん、このときはやてにはなのはとフェイトが偽物だとは気づくはずもなかった。

「そんなんええねん。ヴィータを離して・・・ザフィーラになにしたん？」

「この子達ねもう壊れちゃってるの。私たちがこうする前から」

「とっくの昔に壊れてる闇の書の能力を使えると思って無駄な努力をしたの」

「無駄ってなんや！シグナムは？シャマルは？」

後ろを指さされてはやては後ろを見るとシャマルとシグナムの着ていた服だけを見つけてさらに動揺する

「運命って残酷なんだよ」

そしてはやての足下にベルカ式の白い魔法陣が展開し、闇の書が目の前に現れ、足下の魔法陣が紫色に変わる。なのはとフェイトがバインドを破って出てくる既に手遅れだった。

「はやてちゃん!!」

「はやて!!」

はやての姿を見て近くに現れたカイザー達

『覚醒しますね。いえ、闇の書の暴走と言った方が良いんでしょうか?』

目の前に現れたカイザーに先ほどのことをなのはは問い詰めようとする。

「カイザー君!どうして助けなかったの!!」

『僕は管理局の味方ではありません』

「それより覚醒ってどういうこと?」

フェイトはカイザーの発した覚醒するという言葉が今の状況を見て気になって来ていた。

「私が説明してあげるわ。闇の書の暴走と言う形で覚醒するのよ」

「そんな！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

そのとき、はやてから大きな叫び声が聞こえて紫色の膨大な魔力が溢れ始めた。そしてはやては封印解放の言葉を唱え始めた。

「我は闇の書の主なり、この手に力を・・・封印解放」

するとはやての姿が大きくなって変わっていき、銀髪の赤目の女性に変わった。

「またすべてが終わってしまった。いったい幾たびこの悲しみを繰り返せばいい」

「はやてちゃん」

「はやて」

フェイトとなのはは変わってしまったはやての姿を見つめて名前を呟いていた。

『あれが管理人格でしょうかね？』

「我は闇の書・・・我が力のすべては・・・」

「Ｄｉａｂｏｌｉｃ　Ｅｍｉｓｓｉｏｎ」

闇の書のページが開かれてあるページで止まり、手を上に掲げ、そこにまがまがしい魔力が集まっていく

「主の願いのそのままに」

『空間攻撃ですか、やっかいなことですね』

「ディアボリックエミッション」

そして攻撃が上空に放たれる。遠くにいるフェイトが空間攻撃といっているのが聞こえます。その攻撃はどんどん広がっていく。僕には関係ありませんがもうすぐここに届きますね

『セレナード・ヴォルフ近くに来てください・・・・・Ａｅｇｉｓ』

カイザーは無傷で防ぎきった。なのはたちもなんとか防ぎきったようですね。カイザーは銀髪の女性（リインフォースとします）に近づいた

第十八話

リインフォースに近づいていくカイザー

『夜天の魔導書よ。真実を知るものは居らず、一人ずっとこの負の連鎖を続けてきたのですか？』

カイザーの言葉にリインフォースは答える。

「お前はそう呼んでくれるのか。その通り、この悲しみを幾たび続ければいいのだろうか」

『もっと早く僕と出会っていれば、その悲しみの連鎖を断ち切れていたかも知れませんね』

「もっと早くお前に出会えていれば私の運命は変わっていたのかも知れないな」

『そうですね。僕はこの戦いになるべくては出しませんがこの世界が危なくなったら手を出しますからね』

「好きにするがいい」

『貴方のことを遠くから見守っていますよ。それと僕の名前はカイザー・アルベルトです。覚えておいてくださいね』

カイザーは去り際に自分の名前を告げて去って行った。

「カイザー・アルベルトか・・・今は主の願いを叶えるだけだ」

リそしてインフォースは目の前に桃色の魔法陣を展開し、魔力が集まり始めた。それを見ていたフェイト達はあれが何なのかは直ぐに察しがついた。

「あれはまさか」

「スターライトブレイカー?」

「アルフ、ユーノ」

「あいよ」

フェイトはなのはを連れて猛スピードでその場を離脱する。なぜなら、あれの威力を身をもって味わっているからだ。

「フェイトちゃん、そんなに離れなくても」

「至近距離でくらったら防御の上からでも落とされる。回避距離を取らなきゃ」

そのときバルディッシュから３００メートル先に一般市民が居ると教えられて、その場に行くとすずかとアリサがいた

「なのは？」

「フェイトちゃん」

そのときスターライトブレイカーが撃たれ、その衝撃波がこちらに

飛んでくる。なのはとフェイトは何とプロテクッションを最大展開して何とか防ぎきるが辛そうだ。そしてアリサ達の足下に魔法陣が展開し、無事に転移させられた。

「見られちゃったね」

「うん」

なのはとフェイトはアリサ達に見られてしまったことで少し不安に鳴っているところにエイミィから通信が入った

「なのはちゃん、フェイトちゃん、クロノ君から連絡。闇の書の主、はやてちゃんに投降と停止を呼びかけてって」

二人は頷き、リインフォースに呼びかけた

「（はやてちゃん、それに闇の書さん。止まってください。ヴィータちゃん達傷つけたのはあたし達じゃないんです）」

「シグナムと私たちは・・・」

「我が主は、この世界が、自分の愛する者たちを奪ったこの世界が悪い夢であればいいと願った。我はただ、その願いを叶えるのみ。主には穏やかな夢の内で永久の眠りを。そして愛する騎士達を奪った者には永久の闇を」

そういい、足下に魔法陣を展開する

「闇の書さん!!」

「お前もその名で私を呼ぶのだな。あの者だけだ、私を本来の名で呼んでくれるのは」

「あの者?・・・本来の名前?」

フェイトは誰のことか考えていると地面が割れ、そこから現れた触手のようなものにフェイトとなのはが捕まってしまう

「私は主の願いを叶えるだけだ」

「願いを叶えるだけ？それで本当にはやてちゃんが喜ぶの！！何も考えずに心を閉ざして主の願いの叶える道具でいて、あなたはそれでいいの！！」

「我は魔導書、ただの道具だ」

「だけど言葉が使えるでしょ、心があるでしょ、そうでないとおかしいよ。ほんとに心がないなら泣いたりなんかしないよ！！！」

なのははリインフォースが自分はただの道具だと言うのを否定する。道具は涙など流す事などはないと言って。

「この涙は主の涙、私は道具だ」

そこに静観しているはずのカイザーがリインフォースの元に現れた。

『夜天の魔導書、お前は道具などではありませんよ。ちゃんと感情は存在しています。』

「・・・カイザー、お前だけだ私の本来の名を呼んでくれるのは。お前が言うのならそうかも知れないな。」

そのときフェイトがバリアジャケットをパージし，バリアジャケットが薄く素早く動くことの出来るソニックフォームに変わる。

「武装を解いて、投降してお願い！」

リインフォースに呼びかけたと同時に地面が裂けてそこから火柱があがる

「早いな、もう崩壊が始まったか。私ももうじき意識をなくす、そうなればすぐに暴走が始まる。その前に主の願いを」

ブラッディダガーでフェイトとなのはを囲む。

『僕には向けなくていいんですか？』

「お前はいいのだ。もし願いが叶うのであれば私はお前のそばに居続けたい。」

『そうですか』

カイザーは素っ気なく返すが何かを考えているようだ。そしてブラッディダガーが発射される。フェイトはそれをうまくすべて回避してなのはを救出した。

「このだだっ子！！」

「Ｓｏｎｉｃ　Ｄｒｉｖｅ」

「言うことを聞けぇー」

「Ｉｇｎｉｔｉｏｎ」

フェイトは高速でリインフォースに突っ込んで行く。

「お前も我が内で眠れ」

闇の書をフェイトに向け、フェイトの攻撃をガードし、フェイトは光になり本に吸い込まれて行った

「すべては安らかな眠りの内に」

「どうしてカイザー君はなにもしないの！！」

『なのは、僕はこの世界が本当に危なくなったら手を出すと、夜天の魔導書に約束しています。まだ、そのときではないのです』

そしてカイザーは静観し、リインフォースとなのはの戦闘が激しさを増していく

「ストライクチャージャー起動、ストライクフレーム、エクセリオンバスターA・C・Sドライブ」

レイジングハートが変形し、なのははそれでリインフォースに突っ込んで行く。それを止めようと障壁を展開するが

「届いて、ブレイク・・・」

レイジングハートの先の部分だけが障壁を突き破る

「まさか！」

「シュート！！！」

そして攻撃は直撃した。直撃ですね、かなり効いたようですがなのはも負傷したようですね。それで夜天の魔導書の動きが鈍くなりましたね。そこに主の声が聞こえてきた

「外の方、えっと管理局の方。こちら、えっとそこの子の保護者八神はやてです」

「はやてちゃん！」

「なのはちゃん？ほんまに」

はやてが外に呼びかけるがその声に反応したのがなのはと言うことに驚いていた。

「なのはだよ。いろいろあって闇の書さんと戦っているの」

「ごめん、なのはちゃん。何とかその子止めてくれる」

なのははどうすればいいかわからないようだがそこにユーノからの連絡が入る

「なのは簡単にいうと全力全開でぶっ飛ばして！！」

「さすがユーノ君わかりやすい。エクセリオンバスターバレル展開中距離砲撃モード」

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ」

「ブレイクシュート！！！」

そこからなのはの中距離攻撃がリインフォースに直撃し、フェイトも脱出に成功する。そして闇の書の反応が増大し、黒い固まりになった。

『あれがどうやら闇の書と言われる由縁・・・防御プログラム』

第十九話

闇の書の防御プログラムとはやてが完全に分離し、はやてが主として覚醒した。そしてはやての足下にベルカ式の白い魔法陣が展開されて守護騎士たちがはやての元に集う

「我ら夜天の主に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂尽きることなし」

「この身に命ある限り、我らは御身のもとにあり」

「我らが主、夜天の王八神はやての名の下に」

守護騎士の四人がはやてを囲むように現れ、はやてに騎士の誓いの言葉を述べた。

「夜天の光よ我が身に集え、祝福の風リインフォース・セットアップ！」

はやての格好が六枚の翼を背につけたような格好になった

「はやて・・・」

「うん・・・」

「はやて！はやて！はやて！」

ヴィータははやてに泣きながら抱き、はやての元になのはとフェイトがやってきた

「なのはちゃんもフェイトちゃんもごめんな、うちの子がいろいろ迷惑かけてもうて」

「ううん」

「平気」

二人とも何でもないと答えた

「カイザー君は？」

「え、どこだろう？」

「わからないよ」

カイザーがどこに居るのかわからないと話しているとクロノが上から降りてきた。

「すまないな、水を差してすまない。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する。あの子の黒いよどみ闇の書の防衛プログラムがあと数分で暴走する。それを何らかの方法で止めないといけない、今ある方法は二つ、一つ極めて強力な凍結魔法で停止させる、二つ軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシェルで消滅させる。これ以外にほかにいい手はないか」

クロノが話しているところにカイザー・セレナード・ヴォルフに現れる。守護騎士達は警戒するがカイザーは気にせずに話をする

『僕がやってあげましょうクロノ君』

「できるのか？」

『まあ、できますよ。その代わり結界をかなり強力にしてください』

「わかった。少し待ってくれ」

数分後ユーノ達も手伝い結界を強力にしたがまだまだ強度が足りなかった。

『まだ弱いですね。僕らも張ります』

そしてカイザーたちも独自に結界を張る

『これでＯＫです。あなたたちは障壁を張って自分を守ってください』

「何でなん？」

その言葉にはやてはよくわからないのか首を傾げながら尋ねてきた。

『衝撃の余波で吹き飛ぶからです。では行きます。セレナード』

「わかってるわ」

『「ユニゾン・イン」』

カイザーはセレナードとユニゾンすると髪の色が銀髪から銀とオレンジが混ざったような色になり、目の色がファイアレッドから灼眼に変わる

『セレナード、ブラックフォース。あれをやります、いけますね』

「大丈夫よ」

「・・・Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ」

カイザーは右手を上に掲げる。するとそこに以前とは比べものにならないほどの魔力が集まり始める

「なんだこれは！一人で出せるものではないぞ！！」

そのときエイミィから通信が入る。

「クロノ君。大変、大変！カイザー君の技の威力予想が測定不能になっちゃった！！」

その通信を聞いた全員が愕然とする

守護騎士達は

「我々には全く本気ではなかったのだな」

「そのようだな」

後の二人も悔しそうな表情をする。

「・・・Ｅａｒｔｈ　Ｂｒｅａｋｅｒ　Ｃｈａｒｇｅ　１００％」

よし準備が整いました。カイザーの手の上にはリインフォースが使ったデアボリック・エミッションとは比べても比較ならないほど圧縮された魔力がまがまがしく集まっていた。

『Ｅａｒｔｈ　Ｂｒｅａｋｅｒ！！！！！』

カイザーの手から放たれたアースブレイカーは闇の書の防衛プログ

ラムに向かっていき、直撃した。すると海は荒れ狂い、暴風が吹き荒れる。そしてその場所は空間ごとなくなっていた。なのはたちは吹き飛ばされそうになるがヴォルフが守り吹き飛ばずに済んだ

「防衛プログラム完全消滅を確認、再生反応ありません」

『クロノ君、これで問題はありませんよね』

「あ、ああ」

クロノ達はカイザーの攻撃の反動が強くうまく反応することが出来なかった。

『ユニゾン・アウト』

セレナードはユニゾン・アウトした事で性格も元にもどったようだ

「カイ～疲れたよ～」

『そうですね。疲れましたね』

と言っているとはやてが倒れた。カイザーはいきなりの初めて戦闘をしたからだろうなと予測していた。はやてはアースラで眠っていた。もうすぐ大切な仲間との別れがくると知らずに

第二十話

夜天の魔導書の防衛プログラムを破壊し、これで終わりかと思われたが夜天の魔導書本体が存在する限り、防衛プログラムは復活するという。だからリインフォースは自分を破壊し、防御プログラムを完全に葬るといいだした。

海鳴市公園

雪が降る中一人の女性リインフォースがそこに立って海鳴市の景色を眺めていた。そこにカイザーが一人でやってきた。

『夜天の魔導書、いや今はリインフォースですか。ここに居たのですか』

「カイザーか」

『まだ、会って数日だというに久しぶりだと感じてしまいます』

「私もそうだな」

『貴方と初めて会ったときは戦闘の中でしたね』

「そうだったな。あのときの私はただ主の願いを叶えるためだけに動いた。貴方だけが私の本来の名を呼んでくれた、あのときはとても嬉しかった。まだ私の存在を認めてくれている者が居るのだと」

リインフォースは初めて会ったときの事を思い出して自分の気持ちをカイザーに語っていた。

『僕も嬉しかったですよ。貴方が、もし願いが叶うのであれば私はお前のそばに居続けたい。と言われたときはね、まるでプロポーズを受けているような気分でしたよ』

「っ！／／／／／」

リインフォースも自分が言ったことを思い出したのか。顔が徐々に赤くなっていった。リインフォースは自分で顔が赤くなるのがわかり顔に手を当てていた。

「ち、違うあれは／／／」

『あれは嘘だったんですか』

カイザーはリインの言葉を聞いて俯いて悲しそうな顔をしていた。

「あれは私の本心だ！！」

そう言ってリインフォースはカイザーに抱きついた

『嬉しいです。会って間もないですが、僕も貴方のことが好きなような気がします。今まで恋愛などしたことはないのでどんな感情かはわかりませんが。でも僕ははやて達と敵対することになるかも知れないのですよ。』

「それでもかまわない。だが時間がない、私はもうすぐ破壊されるだろう。主と別れるのは悲しい、しかしお前と別れるのも悲しいな」

リインフォースは悲しそうな表情をして抱きしめる力を強めた

『あなたが破壊されても僕が必ず甦らせてみせます。今度はプログラムではなく人間の魔導師として一人の女性として』

そう言った時のカイザーの顔は決意に満ちていた

「もうすぐ時間のようだな、彼女達も来たようだ。」

『ちゃんと見ていますからね』

リインフォースは抱きしめるのをやめ、彼女達の方を見た。カイザーはその場を離れた

「ああ、来てくれたか」

「リインフォース・・・さん」

はやてからもらった名前を二人に呼んでもらえたことにリインフォースは少し嬉しく思っていた。

「そう呼んでくれるのだな」

「貴方を空に帰すの私たちでいいの？」

「お前達だから頼みたい、お前達のおかげで主はやての言葉を聞くことができた。主はやてを食い殺さずに済み守護騎士達を生かすことができた。感謝している、だから最後はお前達に私を閉じてほしい」

「はやてちゃんとお別れしなくていいんですか？」

「主はやてを悲しませたくないんだ」

自分の決意が鈍る前に早く自分を破壊して欲しいというリインフォース。

「・・・リインフォース」

「でも、そんなの悲しいよ」

「お前達にもいずれわかる。その幸福を守りたいものが現れればな」

そしてリインフォースはにこりと笑った。そしてそこに守護騎士達もやってきた

「そろそろ始めようか。夜天の魔導書の終焉だ」

リインフォースは空を見上げた。リインフォースの足下にはベルカ式の魔法陣、その両サイドになのはとフェイトの魔法陣が展開されている

「ああ、短い間だったがお前達にも世話になった」

そのとき遠くから聞き覚えのある声が聞こえてきた

「リインフォース、みんな!!」

はやてが息を切らしながら車いすに乗って来た

「はやてちゃん」

「はやて!」

ヴィータがはやての方へ行こうとする。しかし、それをリインフォースが手で制してヴィータを止める。

「動くな!動かないでくれ、儀式が止まる」

「あかん！やめて！リインフォースやめて！。破壊なんかせんでええ、あたしが押さえる。大丈夫や、こんなんせんでええ！！」

そう言ってはやてがリインフォースを見つめる

「主はやて・・・よいのですよ」

「いいことない，いいことなんてなんもあらへん！」

はやてはリインフォースの考えは間違っていると否定する。せっかく増えた家族がまたいなくなってしまうことが悲しくて仕方がなかった。

「随分と長いときを生きてきましたが、最後の最後で私はあなたに綺麗な名前と心をいただきました。騎士達もあなたのそばにいます。何も心配はありません」

「心配とかそんなん・・・」

「ですから私は笑って逝けます」

「話聞かん子は嫌いや、マスターは私や話聞いて！！私がきっと何とかする、暴走なんかさせへんて約束したやんか！」

涙をためながら必死に止めるがリインフォースの決意はまるで揺るがない。

「その約束はもう立派に果たしていただきました。主の危険を払い、主の守るのが魔導の器の勤め、貴方を守るためのもっとも優れたやり方を私に選ばせてください」

「そやけど、やっと、やっと、悲しい思いして救われたんやないか」

はやてはもう涙がボロボロこぼれている

「私の意志は貴方の魔導と騎士達の心に残ります」

「そんなん、そんなんちゃうやろ」

「だだっ子はご友人に嫌われます」

リインフォースは魔法陣の中央に戻る

「主はやて、守護騎士達、小さな勇者たち、そしてカイザー・・・
ありがとう、そしてさようなら」

カイザーはリインフォースを見つめていた。必ずやってみせると決意を込めて。そしてリインフォースは光になって空に帰って行った。空から落ちてきたシュベルクロイツをはやてが捕まえ、その場で泣いていた。カイザーは一人リインフォースが帰った空を見上げていた

そのあとなのは達ははやてのいる病院に来ていた。

「私とシグナム達は管理局で保護観察受けることになったんや」

そこに魔法陣が現れる

「これは？魔法陣」

「これって・・」

「たぶん」

そこにカイザーが現れた。

『貴方が八神はやてですね』

「はい」

『管理局の嘱託魔導師ですか。やはり管理局に属すのですね』

「そうなります。カイザー君は管理局員じゃないん？」

「ははは、笑わせないでください。どうして僕があんな組織に属さなければ行けないんですか？まぁシグナムたちも頑張ってください」

管理局のことを悪く言われたなのは達は何か言いたげだったがカイザーの目がそれを言わせなかった。

「ああ」

『皆さん、僕と敵対しなければいいですね』

カイザーは少し睨みながらこの場にいる全員に言い放った。

「どういう意味だよ！」

「ヴィータちゃん落ち着いて、どうしてそんなことを言うんですか？」

シャマルがカイザーに思い切ってきいた

『僕ははっきり言って管理局が気に入りません。ほかの世界を自分たちの方で支配しようだなんて、おかしいと思います。あなた達の選択が間違いとは言いません。自分で決めたんでしょ』

なのはたちに尋ねてなのは頷く。

『だったら、それを貫き通してください。僕と敵対しないことを祈ってますよ』

そう言って転移して去って行った

「どうしてカイザー君はあんなことを言ったんだろう」

なのはは一人考えていた。どうしてあんな事を言ったのだろうと。
しかし、十年後カイザーの言葉が現実になるのものとは思いもしなかった。

第二十一話

はやて達と別れた後、自分のログハウスに戻ってきた

カイザー「ただいま、戻りました」

セレナード「お帰り～」

セレナードはカイザーが帰ってくるとすぐに肩に乗った。どうやらこの場所はお気に入りのようだ

ヴォルフ「主、お帰りなさい」

ヴォルフも狼の状態で出迎えてくれた

プレシア「お帰りなさい、大変だったみたいね」

アリシア「お兄ちゃん、お帰りなさい」

プレシアとアリシアも出迎えてくれた

カイザー「はい、まあそこまで大変ではありませんでしたが。することがありますので地下実験場に来てください」

そう言い残しカイザーは地下実験場に向かって行き、その後にセレナード・ヴォルフ・プレシア・アリシアが続いていった

地下実験場

カイザー「プレシアさん、今からアリシアを甦らせたようにもう一人甦らせます」

プレシア「それなら前と同じじゃないの？」

カイザー「はい、でも今回の場合はアリシアの時とは違い、肉体がありません。そこでプレシアさんたちと考えたあの術式を使おうと思います。だからプレシアさんの協力が必要なんです。」

プレシア「そう、あれを使うのね。わかったわ、私はどうすればいいの？」

カイザー「プレシアさんは僕を囲むようにヴォルフ達と同じようにして魔力を注いでください。ではいきます」

カイザーを中心にプレシア達が三角形に立ち、ミッドとベルカ式の魔法陣が合わさったような巨大な魔法陣が現れ、カイザーが詠唱を始める

カイザー「我、冥府の門を開きし者なり・・・死者の国にありし魂よ・・・カイザー・アルベルトの名において・・・汝に肉体を与え、今ここに帰還せん・・・そのものの名は・・・リインフォース」

詠唱を終えると魔法陣が激しく光り、何も見えなくなる．数分後、そこには自分と同じくらいの銀髪の少女が横たわっていた

カイザー「儀式は成功しました。プレシアさん、すみませんがあとを願いしてかまいませんか。とても疲れてしまいました」

そう言ってその場にゆっくりと倒れて眠ってしまった。ヴォルフはカイザーを背に乗せて寝室に連れて行った。

プレシア「さて、この子を運ばなくてはいけないわね。この子は誰なのかしら?あの子が自分から甦らしたい子なんて。考えるのはあとでもいいわ、とにかく運ばないと」

プレシアはそう言いながらその少女を抱きしめて運んでいった

数時間後

リイン「ここは？・・・・・あのとき私は皆に送られて破壊されたはず。」

リインフォースが目を覚まし、周りを見渡す。そこであることに気づいた

リイン「体が小さくなっているだと！どうなっているんだ」

少し混乱しているリインフォースは心を落ち着かせ、ある一点を見つめていた。そこには自分がずっと共にありたいと願った銀髪の少年が眠っていた。リインフォースはカイザーに近づいていくと寝言が聞こえてきた

カイザー「リインフォース・・・・・・貴方の願いを・・・・・・叶えました・・・・これからは・・・ずっと一緒です・・・・・・ｚｚｚ」

リイン「カイザー・・・私との約束を叶えてくれたのだな。私は幸せものだな・・・」

リインフォースは涙を流し、静かに泣いていた。泣き疲れたのか、カイザーの横でいつの間にか眠っていた

カイザー「う～ん、ん！」

カイザーは目を覚ました。隣を見るとリインフォースもちょうど起きたようだ。カイザーはなぜ自分と同じ場所で眠っていたのか不思議そうにしていたが

カイザー「リインフォース、おはようございます」

リイン「カイザー、おはよう」

リインフォースはカイザーを愛おしい者を見るような目で見ていた。
カイザーも気づいたのか、リインフォースに軽いキスをしてあげた

カイザー「・・・・ん」

リイン「／／／／／／／」

リインフォースは顔が真っ赤になってしまった。少ししてリインフォースは再起動したようだ

カイザー「どうですか？人間と同じ体になった感想は」

リイン「ああ、大丈夫だ。調子もいいみたいだ」

カイザー「じゃあ、皆の所へ行って紹介しましょうか」

そう言ってカイザーはリインフォースの腕を引いていき、皆の所へ向かった。

ログハウスリビング

そこには全員集合していた

カイザー「今からこの子の紹介をします。」

カイザーは背中を押した

リイン「夜天の魔導書の管理人格だったリインフォースだ。これか

らよろしく頼む」

そう自己紹介した

プレシア「私はプレシア・テスタロッサよ。大魔導師と言われているわ。フェイトとアリシアの母親よ」

アリシア「私はアリシア・テスタロッサだよ。今紹介したお母さんの娘です」

セレナード「私はセレナードだよ～。カイのユニゾンデバイスです」

ヴォルフ「我はヴォルフだ。主の使い魔をしている」

全員の自己紹介が終了した

カイザー「さて、全員の自己紹介が終わりましたね」

一息おいてカイザーは真剣な表情になった

カイザー「これからのことですが、僕は管理局を潰そうと考えています。」

その言葉を聞いた全員が息を飲む
カイザーはデータボックスからあるデータを取り出す

カイザー「このデータを見てください。」

そのデータを全員が見れるように映し出した。そのデータを見た皆は怒りに震えている

プレシア「なんなのよ！これが管理局だというの！！こんな所に勤めていたなんて恥でしかないわ」

リイン「これは夜天の魔導書が闇の書になったのは管理局がやっていたのか！！」

セレナード「カイの言うことはやっぱり正しかったのね」

ヴォルフ「主が管理局を嫌っている理由もわかるな」

アリシア「こんなのひどいよ・・・」

そう、皆が見たものは管理局の依頼した違法実験や不正の数々のデータだった

カイザー「僕は一人でも戦います。たとえ仲のよかったものと戦うことになろうとも、だから無理に一緒に来る必要はありません。プレシアさん、貴方はフェイトと戦うことになるかも知れません」

皆にそう訴えかけた

プレシア「確かにフェイトと戦うことになるかも知れないでも子供の間違いを正すのも親の役目よ。だから貴方について行くわ」

リイン「私はお前と共にあることを願ったもとよりお前について行くつもりだ」

セレナード「私はずっと昔から答えは決まっているわ。私は貴方に遺跡で見つけられた時からずっと一緒に居ると」

ヴォルフ「我もそうだ。主に瀕死の時に助けられてからついて行くと」

全員の答えは同じようだ。皆カイザーについて行くことを決めた

カイザー「みんな、ありがとうございます。」

皆に頭を下げた

第二十二話

みんなに管理局を潰すと告白してからカイザーはリインフォース達に相談していた

カイザー「僕に召喚魔法は使えるのでしょうか？」

「少し調べてみるか。セレナード・プレシア、手伝ってくれ」

「いいよ～」

「わかったわ」

とリインフォース達はカイザーを調べ始めた。・・・数時間後

リイン「検査が終わったぞ」

カイザー「どうでしたか？」

プレシア「適正があったわよ」

カイザー「そうですか！」

自分に適正があったことに喜んでリインフォースに抱きついてしまった。リインフォースは

リイン「な、なにをするんだ／／／」

顔を真っ赤にしていた

カイザー「いや、でしたか。ごめんなさい・・・」

カイザーは落ち込み始めた。

リイン「違うんだ！その、いやなのではなくて、恥ずかしかっただけだ！／／／」

プレシア「ふふ・・」

プレシアはそんな二人を暖かく見守っていた

カイザー「今から契約する龍を探そうと思うのですが、どこかいいところはありませんか？」

そう言われプレシアとリインフォースが考えていると

カイザー「できれば三体ほど契約したいんですが」

プレシア「一つは管理外世界にある火山地帯に住んでいると言われる龍が居るわ。あとは龍ではないのだけど樹林に龍と同じくらい強い生物がいると聞いたわ。私が思いつくのはこの二つね」

リイン「あとその世界には山の方に氷龍がいると聞いたことがある」

カイザーはそれだけ居れば十分ですねと思いながら頷いた

カイザー「準備ができ次第出発します」

準備をしにいき、準備が完了してついて行くのはリインフォース、セレナード、ヴォルフでプレシアとアリシアは留守番することになった

カイザー「行ってきます」

プレシア「気をつけてね、行ってらっしゃい」

リイン「行ってくる」

セレナード「行ってきます～」

ヴォルフ「行って参ります」

アリシア「行ってらっしゃ～い、気をつけてね」

魔法陣を起動し、転移して行った

管理外世界　樹林地帯

カイザー「無事に到着したようですが、ここは樹林ですか？」

リイン「そのようだ。目標はここには居ないようだな」

セレナード「ということは、もっと奥にいるのかな？」

ヴォルフ「そのようだ。ここには居る気配はない」

ヴォルフは狼なので気配には敏感なようだ

カイザー達は樹林の奥にどんどん進んでいく、その途中にヴォルフがカイザー達を呼び止める

ヴォルフ「待ってください主！」

カイザー「どうかしましたか？」

ヴォルフ「大きな気配がどんどん近づいてきます！！」

ヴォルフは皆に警戒を促す、皆警戒するがどこに居るかわからない。
突如リインフォースが叫び出す

リイン「皆！上だ！！！」

その声に反応して皆その場を飛び退く。そこを見てみると両腕にブレードのような物があり、強靱な尻尾を持った飛龍がいた

飛龍「ガオォォォォォォォ！！！」

飛龍はこちらに向けて咆吼し、戦闘態勢に入った

カイザー「僕が一人で相手しますよ。契約してもらうかも知れないのに複数でやったら失礼ですしね」

カイザーもブラックフォースをセットアップし、２ｎｄフォルムの剣状態にして戦闘態勢に入る。

お互いに見合ってなかなか動かない、しびれを切らしたのか飛龍が飛びかかってくる。カイザーはそれをバク転で避け、相手が着地すると同時に斬りかかる

カイザー「ハアァァァァ！！」

ガキン

カイザー「くっ・・・」

飛龍「ガァァァァァ！！」

がブレードの部分で受け止められ、力で吹き飛ばされる。空中で体制を整える。

カイザー「全くなんて力ですか！少し気合いを入れますよ」

カイザーは覇気を纏い始める。それを見て飛龍も目の色が変わり、本気になったようだ。

カイザー「これで決めます！・・・覇龍一閃！！！！」

カイザーの覇気を纏わせ重い一撃を放った

飛龍「グアァァァァァァ！！！！」

飛龍もこの攻撃で決めるつもりなのか、防御せずに突っ込みながらブレードの付いた腕を振るってきた。お互いの剣とブレードがぶつかり飛龍のブレードが折れ、血が出始めその場にうずくまった。

飛龍「グゥゥゥゥゥ」

飛龍はこちらを睨んでいるようだがお構いなしカイザーは近づき治療を始めた。飛龍はなぜ治療をするのだろうかと不思議そうな顔で見ている、治療が終わりは傷は元通りに治った

カイザー「先ほどすみません、貴方が契約するのにふさわしいか試していました。それで僕と契約してくれませんか？」

飛龍は黙って聞いているくれていたようだった。そして契約をしてもいいのか、カイザーの顔を舐めた

カイザー「くすぐったいですよ。ではＯＫということでいいんですね」

飛龍は言葉がわかっているのか、頷いた。

カイザー「では始めます。」

飛龍の下に魔法陣を展開し、詠唱を始める

カイザー「今ここに・・・・カイザー・アルベルトの名の下に・・・・召喚龍としての契約を・・・・」

魔法陣の光が強くなり、飛龍を包むと契約が完了したのか光が収まった。

カイザーが飛龍とじゃれているとリインフォース達がやってきた

リイン「どうやらうまくいったようだな」

カイザー「はい、無事に終了しました。次にいきます。」

飛龍とじゃれるのをやめると少し寂しそうにするが、カイザー達を見送っていた。カイザー達が次に行くのは雪山だった

雪山頂上

セレナード「うぅ、カイ～寒いよ～」

リイン「た、確かにこれは寒いな」

セレナードとリインフォースは寒くて震えていた。ヴォルフは大丈夫そうだ

カイザー「なら、これでどうですか？」

吹雪が気にならないように自分たちの周りだけ温度が保たれる魔法を使用した

セレナード「わあ～全然寒くなくなった！」

リイン「ほんとだな」

そんなことをしていると契約対象であろう氷龍が飛んで来た。その姿は下腕に鋭い棘が備わり、スパイク状に進化した尾部そして顔には大きな二本牙があった

カイザー「今回はこの相手ですか、見るからに強そうですね」

リイン「カイザー、あまり無理しないでくれよ」

カイザーを心配そうに見るリインフォース

カイザー「無傷は無理かも知れませんが、頑張ります」

そして氷龍の方に向かって行った

ドラゴン「グォォォォォォォォ！！！！」

カイザーは氷龍の咆吼で空中から落ちそうになった

カイザー「っとと、危ないですね。ロックシューター！！」

氷龍はそれを避けるがホーミングの機能があるので追いかけられ命中するがそこまでのダメージはないようだ。やっぱり皮膚が硬いですね、どうしましょうか

氷龍「グアァ！！！」

氷龍はカイザーに向かって至近距離で氷塊を放ってきた

カイザー「ブラックフォース！！」

ブラック「・・・Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

プロテクションで何とか防ぎきった

カイザー「ならこれでどうですか！ジェネティックバスター！！！」

氷龍も至近距離からの攻撃に反応できずに直撃し、体の爪の部分を破壊する。すると氷龍の目つきが変わる。

氷龍「グオォォォォォォ！！！！」

最初の頃よりも咆吼が強くなる。カイザーは一瞬怯み、その隙を突

かれ体当たりくらい吹き飛ばされる。当たる寸前にプロテクションで何とか防いだが衝撃で意識が飛びそうになる

カイザー「前に戦ったやつよりも明らかに強いですね」

カイザーは空中で体制を整えつつ、冷静に考える。そこに氷龍が突っ込んできてカイザーが迎撃する

カイザー「インフィニティーノヴァ！！！」

魔法陣を無数展開させ、砲撃を撃ちまくり、何発も直撃させ瀕死状態に持っていった

氷龍「・・・グァァァ・・」

弱々しく鳴いていた。カイザーは近づいていき

カイザー「こんなことをしてごめんなさい。」

氷龍に向かって謝る。氷龍も理解しているようだ、そしてカイザーは治療を施し、もとの状態に戻してあげた

カイザー「貴方に契約するのにふさわしいかを見せていました。契約してもらえますか？」

氷龍に向かって尋ねた

氷龍「・・・グルルルルル」

と鳴いてカイザーに頭を下げ服従のポーズを取った

カイザーは氷龍の下に魔法陣を展開し、詠唱を始めた

カイザー「今ここに・・・・カイザー・アルベルトの名の下に・・・・召喚龍としての契約を・・・・」

魔法陣の光が強くなり、氷龍を包むと契約が完了したのか光が収まった。

カイザー「やっと二匹目です。どんどん強くなっていますね、先が思いやられます。」

リイン「今回は前よりも危なかったな。でも無事でよかった。」

リインフォースはそう言ってカイザーに抱きついた。

セレナード「無事でよかったです～」

セレナードもアウトフレームしてカイザーに抱きついた

ヴォルフ「主、無事で何よりです」

カイザー「あと少しです。頑張りましょう次で最後です」

カイザー達は火山地帯に向かった

火山地帯

カイザー「これは冷却魔法をかけていないと焼け死にそうですね」

リイン「そうだな。さすがにこれはきついと思うぞ」

セレナード「カイ～魔法かかっても暑いよ～」

セレナードはまだ暑いようだ

ヴォルフ「・・・・・」

暑くて意識がもうろうとしているようだ。狼だから毛が多いから仕方ありませんね、僕も少し暑いですしね。

いろいろなことを考えながら歩いていると突如地面から今までとは比べものにならない大きさと威圧感を持った龍が現れた

カイザー「今回のはまた大きいですね。でもこれが最後ですから頑張りますよ」

覇龍「お前達はここに何をしに来た」

覇龍がしゃべり出したことにカイザーはそのことに驚いていた。

カイザー「貴方はほかの龍と違い話せるのですか？」

覇龍「我はもう２０００年以上も生きてきた。その中で人間達の言葉を理解していったのだ」

カイザーはその言葉を聞いて何となくだが納得したようだ

カイザー「僕達は貴方と契約をするためにここに来ました。」

覇龍「我と契約をしに来たかいいだろう契約を受けよう」

カイザー達は意外そうな顔をする

カイザー「えっと、戦わなくてもいいんですか？」

覇龍「我ほどになれば、戦わずとも見ただけでだいたいの実力はわかるものだ。おそらく、我が本気を出してもお前が本当に本気になったら勝てないだろう。」

カイザー「では始めます」

そういい覇龍の下に巨大な魔法陣を展開させ、詠唱を始めた

カイザー「今ここに・・・・カイザー・アルベルトの名の下に・・・・召喚龍としての契約を・・・・」

魔法陣の光が強くなり、覇龍を包むと契約が完了したのか光が収まった。

カイザー「契約が完了しました。僕が呼びかけますのでそのときに来てくれればＯＫです」

覇龍「わかった。ではな友よ」

そう言って地面に潜ぐって行った

リイン「戦闘にならなくて何よりだ。では帰ろうか」

カイザー「そうですね。皆集まってください」

カイザーは皆を集め、そこに魔法陣を展開し転移して帰って行った

飛龍をクルガ、氷龍をベリオ、覇龍をトルム、とします

第二十三話

管理外世界からカイザー・リインフォース・セレナード・ヴォルフが帰ってきた

プレシア「お帰りなさい、どうやら無事みたいね」

プレシアはカイザーの姿を見て、一安心したように息を吐いた

カイザー「ええ、何とか無事に契約をすることができました」

リイン「まぁ、見ている方は心配で仕方がなかったがな」

セレナード「そうですよ～カイが吹き飛ばされた時なんて心臓バクバクだったんですよ」

ヴォルフ「そうですよ、主。こちらの身にもなってください」

全員とても心配してくれたようです。まあそうですね、僕も戦っているときにリインフォース達を見たときとても心配そうに見ていましたからね。これからはもっと気をつけなければなりませんね。

プレシア「どんな龍と契約をしたの？できれば一体見せてほしいのだけど」

カイザー「そうですね、じゃあ地下実験場にいきましょうか」

そう言って地下実験場に向かって行き、皆も続いて行った

地下実験場

カイザー「じゃあ、早速呼んでみましょう。飛龍クルガ・・・来てください」

そう言うと魔法陣が展開され、飛龍のクルムが現れる。改めて見てよく契約できたな～と思いますよ。

プレシア「すごいわね、よく契約なんてできたわね」

アリシア「うわぁ～すっごい～！！」

それを見たプレシアは感心し、アリシアは単純に驚いていた。そんなこんなしているとクルガがカイザーに近づきじゃれていた

カイザー「くすぐったいですよ、クルガ。」

カイザーとクルガを見てリインフォースは何かを考えているようだ。

そこにプレシアが声をかけ話を聞いていると二人は納得したのか互いに頷いている

リイン「カイザー、クルガだが小さくして一緒に行動したらどうだ？」

カイザー「一緒に行動ですか？どうしてですか？」

プレシア「いざと言うときにすぐに対応できるようによ」

カイザーは考える。確かにクルガが出ていればトラブルに遭っても対応することができますし暇なときは遊び相手にもすることもできますから、出てもらっていた方が何かと便利ですね。

カイザー「わかりました。その方が良さそうです。クルガ少し小さくなってくれますか」

クルガ「ぐるる」

頷き足下に魔法陣が現れて光に包まれると二メートルくらいの大きさになった

カイザー「おお！ちゃんと小さくなりましたね」

クルガの頭を撫でてあげると気持ちよさそうにしている

クルガ「くるるるる」

嬉しそうな鳴き声をあげていた。セレナード達も近づいてきて頭を撫でている

セレナード「かわいいです～」

アリシア「かわいい～」

クルガもまんざらいやそうでもなかった。

カイザー「とりあえず、これで龍との契約も無事に終わりました。
次はとにかく管理局の裏の情報を集めるために行動を開始します。」

リイン「そうか、とうとう本格的に動き出すのだな。」

プレシア「これからは、忙しくなりそうね。」

セレナード「私はカイについていくだけです」

ヴォルフ「我も同じだ」

・・・六年後

管理局の違法研究所の上に二人の青年と女性が浮かんでいた。青年の方は腰まである綺麗な銀髪を首のあたりで結び、ファイアレッドの瞳をしている。女性の方は青年と同じ綺麗な銀髪が腰まであり、

赤い瞳をしている

カイザー「リインフォース、ここがそうですか？」

リイン「ああ、ここで間違いない。」

確認を済ませると二人はアイコンタクトをして互いに頷く

カイザー「じゃあ研究所に突入します」

カイザーとリインフォースは研究所に入っていく

ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！

警報が鳴り響き研究員達が慌て始める

研究員「ど、どうしたんだ！！」

警備員「侵入者です！！こちらも対応していますがまるで歯が立ちません」

どんどん遠くから爆音が近づいてきて、そしてとうとうドアが破壊される。

バコォォォン

カイザー「やれやれ、全くめんどくさい所ですね。」

リイン「そう言うな、着いたようだぞ」

研究員「な、なんだお前達はこんなことをして管理局が黙っていないぞ！！！」

カイザー「別にかまいませんよ、どのみち管理局は潰すつもりですから。バインド」

カイザーとリインフォースは研究員達を次々に捕縛していき、最後の研究員を捕縛し終えコンピュータの端末にアクセスし研究内容を確認する

リイン「これがそのようだ、ユニゾンデバイスの研究か」

カイザー「ユニゾンデバイスですか。どうやら地下に捕まっているようですね、助けますよリインフォース」

リインフォースも頷き地下に向かう

地下二階

階段を下り廊下をに沿って歩いていくと牢屋のような場所にでた。

カイザー「あそこに居る子で間違いないですね」

カイザーは先ほどコピーしたデータを見ながら確認する

リイン「かなり傷ついているようだが治療すれば大丈夫だろう。軽い治療をしておくか」

リインフォースは治癒の魔法をかけて、傷を癒し始めた。セレナードと同じユニゾンデバイスですか、この子の世話はセレナードに任せれば大丈夫ですね。

カイザー「ある程度終わりましたね」

そう言いながら通信端末を起動させセレナードに連絡を入れる

セレナード「カイ～どうしたの？」

カイザー「今からそちらにユニゾンデバイスの子を送りますから世話をしておいてください」

セレナード「りょうか～い、任せて」

そう返事して通信が終了した。

リイン「では送るぞ」

リインフォースがベルカ式の魔法陣を展開させ、ユニゾンデバイスの子を転移させた

カイザー「今日は久しぶりにゆっくり帰りましょう」

リイン「そうだな」

研究員達を研究施設の外に出し、研究施設をカイザーの撲滅魔法で破壊してその場を後にした

カイザーとリインフォースはゆっくりと空を飛んで帰っていると近くにある空港が爆発した

リイン「どうするんだ？」

カイザー「そんなわかりきったことを聞きますか」

リインフォースはふふと笑い

リイン「それもそうだな」

空港の中に入っていった

空港

スバル視点

お姉ちゃんとはぐれて探しているといきなり爆発が起こって周りが火の海になりました。

スバル「うぅ・・・痛いよ」

スバルは立ち上がり周りを見渡し、歩き始めた。

スバル「お父さん・・・お姉ちゃん・・・」

ゴォォォォォと音がして爆発が起こって吹き飛ばされてしまいました。体が痛い、もういやだよ。

スバル「痛いよ・・・暑いよ・・・こんなのやだよ・・・もう帰りたいよ・・・助けて・・・誰か助けて」

スバルの後ろにある石像に罅がはいっていき、とうとう支えの部分が崩れスバルの方に倒れてきた。私はもうダメだと思って目を瞑りました。でもいつまでたっても何も起こらないので目を開けてみると綺麗な銀髪の青年と女性が立っていました

カイザー視点

空港に入ってみたら周りは火の海でした。リインフォースに探知魔法をかけてもらいながら奥に進んでいくと青髪の女の子がおり、石像が倒れて来ていたので急いで飛んでいきました

カイザー「ふぅ～何とか間に合いましたか。リインフォース、そちらは大丈夫ですか？」

そちらに目をやるとバインドで石像を縛り、床におろしていた。

リイン「ああ、問題ない」

カイザー「貴方は大丈夫ですか？」

スバル「えっと、はい大丈夫です」

まあ怪我もそこまでひどくないようですしよかったです。そのときリインフォースから魔導師が近づいてくるという念話が入りました。ではそろそろ退散します

カイザー「じゃあね、念のために障壁を展開しておきます。」

スバルを守る障壁を作ったあとカイザーとリインフォースが行こうとするとスバルに引き留められる

スバル「先ほどはありがとうございました。あたし、スバルって言います。」

カイザー「そうですか、スバルもうすぐここに魔導師がくると思いますから僕達はもう行きます。」

そう言って魔法陣を展開し、その場から転移する

そこに魔導師がやってきた

なのは視点

私は今空港の中で逃げ遅れた人を探していた。すると正面に障壁に守られている女の子がそこに居た。

なのは「もう大丈夫だよ、助けに来たからね。」

私が少女に触ろうとすると障壁が消えてなくなった。

なのは「もう大丈夫だからね、安全な所まで一直線だからね」

私はレイジングハートを天井に向ける

なのは「一撃で天井まで抜くよ」

レイジ「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」

カートリッジを二発ロードして足下に魔法陣を展開する

なのは「ディバインバスター！！！」

天井に向けてディバインバスターを発射して天井を抜いて女の子を抱いてその場から脱出した

なのは「ねえ、少し聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

スバル「・・・なんですか？」

なのは「私が来る前に誰か来たの？」

スバル「はい、石像が倒れて来てた所に二人組の魔導師の人に助けてもらいました」

なのは「そう、ありがとう」

そして空港前の救急隊員に女の子を渡して私は空港に向かった

第二十四話

空港から転移して戻ってきたのは海鳴市からミッドに拠点を移した地下の研究所だった。

カイザー「ただいま」

リイン「ただいま」

プレシア「お帰りなさい、今回は少し寄り道をしてきたみたいね」

カイザー「わかりますか。空港で火災が起こっていましたので中に入って女の子を助けました」

プレシア「そう、今回あなたたちが研究所から助けてきたユニゾンデバイスだけどつい先ほど目を覚ましてセレナードとアリシアと一緒に居るわよ」

プレシアが指さす方を見てみるとセレナードとアリシアと一緒に遊んでいた。カイザーとリインフォースはそちらに歩いていった

セレナード「あ、カイ～リイン～お帰り」

そう言ってセレナードが飛びついてきた。セレナードはいったいいつまでこの言葉遣いなんでしょうか？まあかわいらしいのでいいですが

アリシア「お兄ちゃん、リイン、お帰り」

カイザー「ただいま」

リイン「ただいま」

カイザー達はユニゾンデバイスの方を見る。もう傷は完全に治ったようですね，よかったです。

カイザー「貴方の名前はなんですか？」

？？？「あたしの名前は・・・わからない」

リイン「炎の魔力変換質があるようだな・・・ならアギトでよいのではないか」

リインフォースが名前を提案してそれを聞いて

アギト「いい名前だな。あたしの名前は今日からアギトだ」

アギトはどうやらその名前が気に入ったようだ

カイザー「じゃあ、アギト貴方にも紹介しますね。僕の契約龍の一体を来てくださクルガ」

そう呟くと向こうの方からクルガが低空で飛んで来ました

カイザー「アギト、この子がクルガです。本当はもっと大きいのですが今は小さくなってもらっています」

アギト「こいつが兄貴の契約龍・・・よろしくなクルガ」

クルガもアギトに頭を下げた

カイザー「ん・・・僕に通信が入っていますね誰でしょうか?まあとにかく開いてみましょうか」

カイザーは開いてみるとそこには広域次元犯罪者のジェイル・スカリエッティが映っていた。カイザーはここに全員を集めて回線に応答した

カイザー「何かご用ですか?ジェイルスカリエッティ」

ジェイル「いやいや、急に通信をしてすまないと思ってるよ。君たちが管理局の違法研究所を潰し回っているという情報が入ってね。是非会って話をしたいのだよ。プレシア女史久しぶりだね」

プレシア「ええ久しぶりね、何年ぶりかしらね。カイザー、彼に会ってみるのもいいかもしれないわよ」

カイザー「わかりました。では後日そちらに伺いますので」

そう言って通信を切ってジェイルの元に行く準備をし始めた。

三日後ジェイルの研究所前

カイザー「研究所の前に着いたんですが誰もいないのですか?」

すると奥の方から銀髪をした幼い顔の女性がこちらに向かって歩いてきた

チンク「お待ちしておりました。今回案内を勤めさせていただくNo.5チンクです。ドクターの所まで案内いたします、着いてきてください。」

カイザー達はチンクの後に続いていく、研究所の一番奥に着くとジェイルが出迎えてくれた。

ジェイル「わざわざ忙しいの来てもらってすまないね。」

カイザー「別にかまいませんよ。結局用件は何ですか？」

ジェイル「君たちと手を組みたいと思ってね。君たちは管理局を潰すつもりなのだろう？私たちも同じなのだよ、だから同じ目的なら手を組もうというわけだよ。」

ジェイルの言うことも確かだ。同じ目的なら手を組まない手はないですね、それに戦力が増えることは嬉しいしジェイルほどの技術者が居れば今まで以上に技術力は上がる。これは手を組むべきですね

カイザー「皆、いいですか」

皆の方を向いて確認すると、全員が頷いてくれました。

カイザー「皆もいいようですので、これからよろしくお願いしますね。」

ジェイル「ああ、こちらもよろしく頼むよ」

こうして二人は互いに手を組んだ。そして四年後なのはたちと激突するのであった

第二十四話（後書き）

ｓｔｓに入ります

登場人物紹介（ｓｔｓ編）

名前：カイザー・アルベルト

性別：男

年齢：１９歳

身長：１９０ｃｍ

髪：銀色

眼：ファイアレッド

容姿：とてもかっこいい（１０人中１０人が振り返るほど、自分ではそこまでかっこいいとは思ってない

魔力光：銀

魔力量：ＳＳＳＳオーバー

総合ランク：ＳＳＳＳ（リミッター時Ｓ）

レアスキル：絶対防御（Ａｅｇｉｓ）

デバイス：ブラックフォース

１ｓｔフォルム：ロッド型

２ｎｄフォルム：剣型

３ｒｄフォルム：銃型

契約：飛龍クルガ・氷龍ベリオ・覇龍トルムと契約している

名前：リインフォース？（アイン）

性別：女

年齢：１９歳

身長：１７０ｃｍ

髪：銀色

眼：赤

魔力光：白

魔力量：ＳＳＳオーバー

総合ランク：ＳＳＳ（リミッター時ＡＡＡ＋）

デバイス：ホワイト

魔法：夜天の魔導書の管理人格だった頃の魔法も使える

名前：セレナード

性別：女

身長：３０ｃｍ（アウトフレームすると１５０ｃｍになる）

容姿：かわいい（１０人１０人振り返るくらい）

魔力量ＳＳ

総合ランクＳＳ＋（リミッター時ＡＡＡ）

カイザー専用のユニゾンデバイス：ある遺跡でカイザーに助けられてからカイザーのことが大好き

名前：ヴォルフ

性別：男

身長：１６０ｃｍ（人型なら１９０ｃｍ）

総合ランクＳＳ

使い魔：カイザーに瀕死状態だったところを発見され使い魔になった。カイザーを主と呼ぶ

名前：プレシア・テスタロッサ

性別：女

魔力量：ＳＳ

総合ランクＳ＋

ジュエルシード事件の時にカイザーに出会い、自分の病気とアリシアを蘇生してもらうことを条件に助手をしている

名前：アリシア・テスタロッサ

性別：女

魔力量：なし

総合ランク：なし

ジュエルシード事件でプレシアからの願いでカイザーによって蘇生された。今はプレシアと共に技術者をしている

名前：アギト

性別：女

魔力量：ＡＡ

総合ランクＡＡ

管理局の違法研究所からカイザーとリインフォースによって救出された。カイザーのことを兄貴、リインフォース？のことを姐さんと呼んでいる

主人公の魔法&剣技（ｓｔｓ編）

魔法

シルバーレイン：：ランクＡ
　砲撃を真上に撃ち、雨のように降らせる

ロックシューター：：ランクＡＡ
　相手をロックオンし、当たるまで追いかける。

ミラージュシューター：：ランクＡＡ
　魔力弾に隠蔽魔法をかけ見えなくして放つ

ファントムミラージュ：：ランクＡＡＡ
　砲撃に幻影を混ぜた攻撃

ロックバスター：：ランクＡＡＡ
　追尾機能付きの砲撃

ジェネティックバスター：ランクＡＡＡ
砲撃魔法

ブレイクバスター：ランクＳ
相手のシールドを破って貫通する砲撃

シルバーエクスプロージョン：ランクＳ＋
広域撲滅魔法

ジャスティスブレイカー：ランクＳＳ
収束魔法、ロッドの先に魔力を集め撃ち放つ。

インフィニティーノヴァ：ランクＳＳ＋
無限の砲撃を放つ

アースブレイカー：ランクＳＳＳ
最強の魔法、その威力は次元震を引き起こすほど。

リフレクト：レアスキルの応用技、相手の攻撃を弾き返す。

ナイトメア：相手が一番見たくない悪夢を見せる

バリアブレイク：左手に力を込めシールドを破壊する

剣技

瞬撃：一瞬で懐に入り込み切りかかる

幻撃剣：幻術魔法を合わせた技

覇龍一閃：自分の覇気を纏わせて放つ重い一撃

覇龍咆吼撃：覇気を纏わせた衝撃波を放つ

九瞬撃：九つの斬撃を同時に放つ

第二十五話

ジェイルと手を組んでから数日、僕とアインとセレナードはある遺跡に来ていた。ここにレリックがあるとの情報が会ったので回収に来たのだ。念のため顔がばれないように仮面をつけている

カイザー「早速回収しようと思ったんですが、どうやら二人の魔導師が来たようです。この魔導師は懐かしい顔ですね、シグナムとフェイトのようです。誰が相手しますか?相手をしている間にレリックを回収しようと思います。」

アイン「私がシグナムの相手をしよう。」

カイザーは大丈夫でしょうかと思ってしまう。昔からの仲間なのだから、アインを抱きしめながら心配そうに聞く

カイザー「大丈夫なんですか?昔の仲間だからつらいんじゃないんですか」

アイン「大丈夫だ、私を信じてくれ！」

アインの決意は固かった

カイザー「では気をつけてください。なら僕がフェイトの相手をします、セレナードはレリックをお願いしますね。」

セレナード「うん！わかったよ～大丈夫だと思うけど気をつけてね～」

セレナードが笑顔で見送ってくれた

カイザー「あなたもレリックには最新の注意を払ってくださいね」

セレナード「うん、じゃあ行ってくる」

そう言って遺跡の奥に入って行った

そこに二人がやってきた

フェイト「時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンです」

シグナム「同じく時空管理局二等空尉シグナムだ」

フェイト「ここは立ち入り禁止区域のはずです。ここで何をしているのですか！」

カイザー「別にあなたたちに教える必要性は感じませんが、中にある物にようがあります」

シグナム「ここにあるのはロストロギアだ、何のようがあるのだ？そのあたりの事情聴取をするために同行してもらいたいのだが」

そう言いながらデバイスを起動させていた。僕達もデバイスを起動させる

アイン「それは無理な相談だな」

フェイト「そうですか、なら仕方ありません。あなた方を拘束します」

カイザー「返り討ちにしてあげます」

そしてシグナムとアイン、僕とフェイトが戦闘を開始した

シグナムとアインｓｉｄｅ

キィィィィン

シグナム「はぁぁぁぁぁ！！！」

アイン「はぁぁ！！」

互いの武器がぶつかり火花を散らしている。アインはこれでは埒があかないと思ったのか戦闘方法を変えた

アイン「いくぞ！ブラッディーダガー」

シグナムはその魔法を見てを見開いた。それもそのはずその魔法は夜天の王はやてと同じ物だったからだ

シグナム「っっ！！なぜお前がそれを使える！」

シグナムは向かってくる攻撃を何とか弾き、叫ぶ

アイン「さあな、答える義理はない」

シグナムが攻撃を仕掛けるが動揺しているせいか、攻撃が少し雑になっているせいですべて回避されてしまい、振りかぶりが大きくなった一瞬の隙を突かれ腹に攻撃を受け吹き飛ばされバインドで捕縛されてしまった

シグナム「っく！しまった」

アインはシグナムを見つめているとセレナードから念話をレリックを回収したと連絡が入った

アイン「今回はここまでのようだ、ではな」

シグナム「ま、待て！！！」

それを無視してセレナードの元に向かって行った

カイザーとフェイトｓｉｄｅ

フェイト「なんでこんなことをするのですか！」

とフェイトがこちらに向かって叫びかけてくるが

カイザー「だから、中のものにようがあるといっているじゃないですか」

フェイト「フォトンランサー！ファイア！」

大量のスフィアがカイザーに向かって放たれるがカイザーは避けることをせず

カイザー「ブラックフォース」

ブラック「ＯＫ・・・ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

カイザーは難なくそれを防御する、カイザーもブラックをフェイトに向かって構え

カイザー「・・・ミラージュシューター」

小さく呟いた

フェイトには何を言ったのか聞こえておらずに少し首を傾げるがそこでバルデッシュが大きな声を出しプロテクションを展開する

バル「Ｓｉｒ！！！」

フェイト「・・え！」

フェイトはなぜバルデッシュがプロテクションを展開したのかわからなかった。前を見ても何もないし攻撃が来ている訳でもないと思っていると突如衝撃が襲ってきてプロテクションに罅が入り始めた。

フェイト「くっ！どうなってるの！！いったいどこから！！」

フェイトは周りを見渡すがどこにも魔力弾などは飛んでいない、そして今度は後ろから攻撃が飛んで来てとうとうプロテクションが破壊されてしまった。フェイトはカイザーと距離を取ろうと高速で離れようとしたが、設置型のバインドに捕まってしまう

フェイト「しまった！」

カイザー「もう終わりです。」

フェイトはバインドをブレイクしようとするがびくともしない。カイザーが追撃をしようとしたときセレナードから念話でレリックを回収し終えたと連絡が来たのでセレナードの方に向かって行く

フェイト「ま、待ってください！」

カイザーは振り向かずに

カイザー「貴方がレリックを追っているのならまた会うことになるでしょう。今度は手加減はしませんよ」

そう言って去って行った

カイザーとアインはセレナードと合流してレリックを確認する。おそらく、またフェイト達とぶつかることになるでしょうがこれもまた何かの因果なのでしょうか。まあ、仕掛けられたら勝つだけです。

カイザー「二人ともお疲れ様。レリックも回収したことですし帰りましょう」

アインはカイザーに寄り添いながら腕を絡めて幸せそうな表情をしているセレナードはカイザーのポケットに入っていた。

カイザー「どうしたんですか？アイン」

アイン「たまにはいいではないか、あまりこんなことをできないのだから」

顔を若干赤くしながら言った。僕は仕方ないなぁと思いながら魔法陣を展開し、転移した。

フェイトとシグナムｓｉｄｅ

フェイトとシグナムは互いにかけられたバインドを何とか壊し合流していた

シグナム「無事かテスタロッサ」

フェイト「はい、何ともありません」

互いに会話しているがその表情は暗かった。それもそうだろう自分たちが手も足も出なかったのだから

シグナム「今回の奴らのことはどう思う？」

フェイト「おそらくですがまたロストロギアを奪いに来ると思います。なので早く六課に戻って対策を練らないと」

二人は六課に戻っていった

機動六課

なのはがちょうど新人のＦＷの訓練を終了したところだった

なのは「今日の訓練はここまでお疲れ様」

ＦＷ「ありがとうございました」

はやて「いまから部隊長室に隊長陣とＦＷは集合してください」

はやてから放送が来た。

なのは「何だろう？とにかくみんな行くよ」

ＦＷ「はい！！」

そしてなのはとＦＷ陣は部隊長室に向かって行った。部隊長室に着くとそこには、はやて・守護騎士達・フェイトがすでに待っていた

なのは「なにがあったの？」

はやて「それは今から話すわ。単刀直入に言うと遺跡にあったロストロギアが奪われたんや」

全員「えっ！」

はやて「まあ、それだけならまだいい方やったわ・・・」

そう言ってはやてが表情が少し悪くなる

なのは「なにかほかに問題があるの？」

はやて「ちょうどそこに巡回でいっとったフェイトちゃんとシグナムが負けたんや」

それを聞き全員に緊張が走る。それもそのはず隊長陣が負けたのだから

なのは「その人はどんな感じの人だったの」

フェイト「それは私が説明するよ。二人組で両方とも綺麗な銀色の髪だったよ」

フェイトがそう言うとスバルが一人だけ反応した

スバル「えっ！！！」

そして全員の視線がスバルに集まった

フェイト「どうかしたのスバル？」

スバル「フェイトさんその二人は綺麗な銀髪だったんですよね」

フェイト「そうだよ」

スバル「その二人は男と女の人じゃありませんでしたか？」

それを聞いてフェイトとシグナムの表情が少しだけ変わる

フェイト「スバル、もしかして会ったことあるの？」

スバル「はい、一度だけ会ったことがあります。あれは四年前私が空港火災に巻き込まれたときになのはさんが来る少し前、石像が倒れてきてもうダメだと思ったときに助けてもらいました。悪い人に

は見えませんでしたよ。なにか理由があるんじゃないんですか？」

なのは「今度あったらお話しなくちゃ！」

なのははそう決意するのだった。

シグナム「もう一つ主はやてに言ってないことがあります」

はやて「なんなん？シグナム」

はやてが何なのかと聞くがシグナムの返答を聞いて愕然となる

シグナム「女性の方が主と同じ魔法ブラッディダガーを使っていました。」

はやて「なんやて！！！！でもあれを使えるのは私かリインしかおらんはずや」

シャマル「でも先代のリインフォースなら」

はやて「そんなはずあらへん、だってあのとき確かに空に帰って行くのを見送ったはずや」

そう言われてなのはたちは黙ってしまった

はやて「とにかく対策を取らないかんみたいやな」

そういって時間が過ぎていくのだった

第二十六話

遺跡からジェイルの研究所に転移してきたカイザー達はジェイルの所に向かっている。セレナードはポケットの中で熟睡しており、アインと二人で話をしながら歩いていた。

カイザー「アイン、早いものですね。貴方と会ってもう十年ですよ。」

アイン「もうそんなに経つのか。確かに早いものだな、この件が終わったらどこか静かな所でゆっくりと暮らしたいな」

カイザー「そうですね」

そう話している内にジェイルの所までやってきた。

カイザー「これでいいんですよね？」

ジェイル「ああ、すまないね。もうすぐナンバーズがすべて完成するから訓練を頼むよ。君たちがしてくれるのならもっと強くなるからね」

カイザーはジェイルにレリックを渡してそのあと雑談をしていた

カイザー「ジェイルまたレリックが見つかったら教えてくださいね。最近は運動不足なんですよ、今度はヴォルフも連れて行くので」

ジェイル「ああ、わかったよ」

カイザーたちが出て行こうとしたときＮＯ．１のウーノが書類を持ってやってきた

ウーノ「カイザー君達帰ってきたの？」

カイザー「ええ、つい先ほど。今日は眠いのでもう帰ります、またねジェイル、ウーノ」

カイザーはそう言って部屋を出て行った

ウーノ「ドクター、カイザー君達のおかげでだいぶ楽になりましたね」

ジェイル「全くだよ、彼らはとても心強いよ。僕達はもう一仕事だ、頑張っていこうじゃないか」

ウーノ「はい」

二人は作業に取りかかった。そして数日後

カイザーとアイン・セレナード・ヴォルフとジェイルとウーノがモニターを見ていた

カイザー「今回のレリックは貨車の中ですか」

ジェイル「ああ、すでにガジェットを３０機ほど向かっている。おそらく機動六課が出てくるだろうが君たちなら大丈夫だと思うが万が一の時はレリックは取ってこなくてもかまはないよ」

ジェイルも僕達のことを心配してくれているようですね。まぁ心配してるようなことは起こらないと思いますが、念のために注意しておきましょう

カイザー「わかりました。安心して見ていてくださいよ。では行ってきますね」

アイン「では行こうか」

カイザーとアインは部屋をあとにしてセレナードとヴォルフもあとに続き部屋を出て行った

機動六課

今ＦＷ陣スバル・ティアナ・エリオ・キャロは貨車の上空にヘリで待機していた。なのははすでに現場でフェイトと一緒にいた

リイン「任務は二つ、ガジェットを全機逃走させずに破壊すること。そしてレリックを安全に確保すること。ですからスターズ分隊とライトニング分隊二人ずつのコンビでガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かうです」

貨車のデータを表示し詳細を説明する

リイン「レリックはここ、七両目の重要貨物室にあります。スターズかライトニング先に到達した方がレリックを確保するですよ」

リインはバリアジャケットを展開する

リイン「私も現場に降りて管制を担当するです。あと前に説明のあった二人組の魔導師が来るかも知れないので注意してください」

FW「はい!!」

そしてスバル達はバリアジャケットを展開してヘリから飛び降り貨車に着地した

スバル「あれ?このジャケットって・・」

エリオ「もしかして」

リイン「デザインと性能は各分隊の隊長さん達のを参考にしてるですよ。ちょっと癖はありますが高性能です」

スバルはそれを聞いて感激していた

ティアナ「スバル、感激は後！」

そう言った直後貨車の天井の部分が盛り上がり中からガジェットが攻撃を開始した

ティアナ「シュート！！」

ティアナは二発の魔力弾を撃ちガジェットをいったい破壊する。スバルは天井に開いた穴から貨車に入る

スバル「はぁぁぁぁぁぁ！！」

そして中にいたガジェットを破壊した。ティアナも続いて中に入っていき奥に進んでいった

そしてエリオたちは新型のガジェットと対峙していた

キャロ「フリード、ブラストフレア・・ファイア」

フリード「キュクー！」

新型のガジェットに攻撃するが弾き返されて、今度はエリオが突っ込んで行く

エリオ「はぁぁぁぁぁ，おりゃぁぁぁ！！」

ガキン

エリオ「か、硬い！！！」

ストラーダを振りおろすが装甲が硬くて傷一つ付かなかった。そしてＡＭＦが展開され魔力結合がしにくくなった。ガジェットの攻撃を何とかかわしているが追い詰められて吹き飛ばされてしまう。

キャロ「エリオ君・・・エリオ君！！！」

キャロもエリオを追うように飛び降りていった。ＡＭＦが薄くなったおかげでキャロが魔法を行使する

キャロ「・・・竜魂召喚！」

フリードが大きくなりエリオとキャロを乗せて救出した。

キャロ「フリード、ブラストレイ！」

フリードがガジェットに攻撃を放った瞬間、ガジェットの前に四人転移してきた

カイザーｓｉｄｅ

転移する場所が少し悪かったですね、正直転移して着いた瞬間攻撃が来たときはかなり焦りました。ヴォルフが攻撃を弾き飛ばしてくれたからよかったですけど

カイザー「今のは少しびっくりしましたよ。皆大丈夫ですか？」

アイン「ああ、問題ない」

セレナード「大丈夫だよ～」

ヴォルフ「驚きましたが、大丈夫です」

全員無事のようだ。するとこちらになのは・フェイト、スバルにティアナ、フリードに乗ったキャロとエリオがやってきた

なのは「時空管理局です。武装を解いて投降してください」

アイン「それはできない相談だ。私たちはレリックを回収しなければならない」

アインがそう言い放ち、僕達は戦闘体制に入る。

カイザー「アイン、クルガを呼びます。少しだけ時間を稼いでください、ヴォルフはレリックの回収を」

アイン「任せてくれ」

ヴォルフ「主ご武運を」

アインは守りを堅め、ヴォルフはレリックの回収に向かう。

なのは「いけない！スバル！ティアナ！あの人を止めて！！」

二人は互いの顔を見て頷き、ヴォルフを追いかけようとするがセレナードによって妨害され行くことができない。

セレナード「ヴォルフのあとは追わせないですよ～」

ティアナ「そこをどきなさい！！」

スバル「そこをどいて！！」

セレナードは突如俯いてぴくりとも動かないが周りの空気が変わった。そうセレナードの人格が入れ替わったのだ。二人も何か感じたらしく身構える。セレナードはアウトフレームで１５０ｃｍくらいになる

セレナード「ふふふ、ヴォルフを追いたいのなら私を倒して行きなさい。」

そのときスバル達の後ろから咆吼が聞こえてきた

クルガ「ガアァァァァァ！！！！」

スバル「な、何あれ！」

スバルがクルガを見て若干声が震えている

セレナード「カイが龍召喚に成功したようね。私は自分の役目を果たすだけよ」

スバル達の前に立ちふさがった

カイザー「クルガ、貴方はあそこにいる竜と乗っている人たちを足止めしてください」

クルガは頷き、キャロとエリオ、フリードのほうを向き戦闘態勢に

入った。

キャロ「フリード？」

キャロがフリードに声をかけるが反応を示さない。どうしたのだろうと顔を見るとクルガを見ておびえていた。エリオは立ち向かおうとストラーダを強く握り閉めていた

カイザー「これで、僕達の相手はあなたたちだけです。」

カイザーはフェイトとなのはに向かってそう言い放つ。

フェイト「私が男の方を相手するよ、なのはは女の人をお願い」

なのは「わかったよフェイトちゃん気をつけてね」

フェイト「なのはもね」

フェイトはこちらになのははアインの方に向かって行った。そして戦闘が開始された

第二十七話

セレナードＶＳスバル・ティアナ

スバルとティアナはデバイスをセレナードに向け構え、セレナードはただそれを見ていた

スバル「早くあいつを追わなくちゃいけないのに・・・どうして邪魔するんですか！！！」

セレナード「そんなのカイのお願いだからに決まってるじゃない。あのとき遺跡から助けてもらってから何があってもついて行くと決めたのよ。もういいでしょ、私たちも始めましょうか」

そう言ってセレナードは手に魔力を集め始めた

ティアナ「スバル、作戦はまずあなたが突っ込んであいつの注意を引きつけて、その隙に私が攻撃するわ。頼むわよスバル」

スバル「うん、わかった。任せてよティア！」

そう言ってスバルはセレナードの方に突っ込んでいくが、魔力弾が飛んでくる。スバルはそれをぎりぎりですべて回避し、セレナードに接近する。

スバル「はぁぁぁぁ！！リボルバー・・・シュート！！！」

スバルがリボルバーを回転させセレナードに至近距離から攻撃を放つ。セレナードは足に魔力を集めてそれを上空回避するが、回避した場所にあらかじめ予測されたかのようにオレンジ色の魔力弾が目の前に迫っていた。そう、ティアナがセレナードの回避コースを予

測していたのだ。防御しようと障壁を展開しようとするが間に合わずに直撃し煙で見えなくなる

スバル「やったね！ティア！！」

スバルはガッツポーズして喜んでいる

ティアナ「油断しないでスバル！さっきは注意が逸れてたからうまくいったけど、もう同じ手は通用しないわ」

ティアナとスバルは煙の方をじっと見つめていると煙が徐々に晴れていき、そこには無傷とはいかないがそこまでダメージを受けていないセレナードが頭を押さえながら姿を現した

セレナード「油断したわ、まさか回避コースを予測されていたとは思いもしなかったわ。もう手加減なしよ・・・潰させてもらうわ」

セレナードはそう言うと幻術魔法を使用し自分の姿を三人に増やし
今度は先ほどとは違い黒い魔力を手に集める

スバル「ええ！！三人に増えた！！！」

ティアナ「あれは私と同じ幻術魔法フェイクシルエット？・・・でも精度のレベルが違う！」

スバルはセレナードが増えたことに驚き、ティアナは自分と同じ幻術魔法の精度の違いに愕然とする

セレナード「ふふふ、回避できるならやってみなさい・・・ファントムシュート！！！」

セレナードは両手をスバルとティアナに向け、集めた魔力を放った。
二人は目の前に迫る魔力弾を回避しようとするが魔力弾が全方向に弾けて直撃をくらってしまう。

セレナード「今のを回避できたらなかなかだけど、無理だったようね」

その場を後にしようとするが煙の中から魔力弾だ飛んできて両サイドにいた分身が消された。そこには肩で息をしているスバルとティアナがデバイスをこちらに向けてたっていた

スバル「はぁ、はぁ、はぁ」

ティアナ「はぁ、はぁ、はぁ・・・スバル、あんたまだいける？」

スバル「限界が・・近いけど・・まだいけるよ」

ティアナ「なら私が隙を作るからあんたの最大の魔法をぶっ放しなさい！」

セレナードはそんな二人を余裕な表情で見ていた。するとティアナがこちらに銃を乱射して注意を自分に引きつける。セレナードはそれをすべて回避してティアナに接近するがそれを見てティアナがにやりとした

ティアナ「今よ！スバル！！！」

そう叫ぶとスバルがセレナードの後ろに現れる

スバル「一・撃・必・倒、・・・ディバイン・・バスター！！！」

セレナード「もうその手は通用しないわ・・・ゼロ・フィールド！」

セレナードがそう呟くとセレナードを囲むようにまくそようなものが発生し、それにスバルのディバインバスターが当たると消滅してしまった。それを見て二人は目を見開く。

スバル「そんな・・・嘘・・」

ティアナ「ディバインバスターをかき消すなんて・・・どうやって」

セレナード「ふふふ、貴方には教えてあげないわよ。じゃあお休みなさい」

二人はセレナードにバインドで拘束され意識を失った

なのはＶＳアイン

アインとなのははは上空で睨み合いいつでも戦闘を開始できる状態になっていた。でもお互いに動かず、なのははアインに話しかけた

なのは「どうしてこんなことをするんですか！訳を話してください！私たちにも手伝えることがあるかもしれません。」

アイン「おまえたちに話してもどうにもならない・・・特におまえ

はな高町」

なのは「それはどういうことですか？あなたは私の何を知っているんですか」

アイン「ああ、よく知っているともおまえは昔私に会っている十年前にな」

なのははそう言われ自分の記憶を掘り起こす。十年前と言えば闇の書事件起こったときだ、そして私が会っている人物。はやてちゃん・ヴィータちゃん・シグナムさん・シャマルさん・ザフィーラさん、そしてリインフォースさん。そして今目の前にいる人物は仮面をしていて顔はわからないが髪は銀髪で体格もあのときにそっくりだった

なのは「そんな・・・あり得ないだって・・・あのとき確かに・・・

リインフォースさん。」

なのははまるで信じれないものを見たような顔でアインを見ていた

アイン「その通りだ、小さな勇者よ久しいな」

アインは仮面を外し自分の正体を明かした

なのは「でもどうしてあなたは確かにあのとき私たちに・・・」

アイン「そう、確かに私はあのときおまえたちによってこの世を去った。だが私を蘇生してくれた人物がいた私がもっとも愛しずっとそばに居続けたいと願った男・・・それがカイザーだ」

なのは「カイザー君が・・・じゃあ！あそこでフェイトちゃんと戦っているのは！！！」

アイン「そうだ。あそこで戦っているのはカイザーだ。私たちもはじめするとしよう」

アインはスフィアを複数生成し、なのはに全方向から攻撃する。

なのは「レイジングハート！」

レイジ「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

なのははそれをプロテクションで防ぎ、反撃に出ようとするがすでにアインが目の前に迫っていて追撃を仕掛けられる。それも何とか防ぎ、距離をとる。

アイン「やはり、硬いな」

アインはなのはの障壁を見ながらそう呟く

なのは「リインフォースさん、やめてください！私はあなたと戦いたくありません」

アイン「おまえになくとも私にはあるのだ！！」

なのは「それならあなたに勝ってお話を聞かせてもらうの！！・・・・アクセルシューター！！」

そう言ってなのはも反撃に出て、複数の魔力弾を生成しアインに向けて放った。アインはそれを障壁を展開し防ぐがなのはが目の前か

らいなくなっており、きょろきょろと周りを見渡すと後ろから声が聞こえた

なのは「ディバイン・・・バスター！！！」

後ろからなのはのディバインバスターが迫っていたが右手を前に出し小さく盾と呟きそれを防いだようだがリミッターがかかっているせいで少し強度が弱く反動がきたようだ

アイン「くっ！やはりリミッターをつけるとつらいものがあるがまだまだ余裕だな。今度はこちら番だ・・・ブラッディーダガー！」

アインはブラッディーダガーに普段よりも多くの魔力を込め威力を強化し、それでなのはを包囲した。

なのはも囲まれているせいで身動きがとれずにいた

アイン「諦めろ高町、リミッターの掛かっているおまえでは私には勝てない。おとなしくしていれば何もしない」

アインはなのはを諦めさせようとするが無理なようだ

なのは「私は諦めない、そしてあなたを倒してお話を聞くの！」

アイン「そうか、残念だ」

そう言いアインはブラッディーダガーをなのはに向かって発射した。なのははカートリッジを一つロードしプロテクションで防ごうとするが徐々に罅が入ったいきパリィィィィンと音を立てて破壊され、残っていたダガーがなのはに直撃し煙が上がった

アイン「私もあまり高町たちとは戦いなくないのだがこれは仕方ない」

煙が晴れるとそこにはなのはがぼろぼろになりながらも何とか意識を保ちこちらを見ていた

なのは「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・私は負けない！」

アイン「そんな状態で何ができると言うんだ高町、悪いが拘束させてもらう」

アインはなのはを強化したバインドとクリスタルゲージで拘束し完全に身動きをとれなくする

なのは「しまった！・・・どうして、どうしてなんですか！！リインフォースさん！！！」

アイン「さあな、それは教えられないと言ったはずだ。そこで見ていろカイザーたちの戦いをな」

そう言いカイザーとフェイトの戦いを見守っていた

カイザーＶＳフェイト

こちらは先ほどまでなのはとアインの戦闘を見ていた。フェイトはなのはが負けたことにも驚いていたが負けた相手を見てさらに驚いていた。

フェイト「そんな、なのはがやられるなんて・・・どうしてリインフォースが・・・」

カイザー「やはり、アインには勝てませんでしたね。まぁ、リミッターがついている状態じゃなおさら無理でしょうけどね。」

カイザーはアインに捕縛されているなのはを見ながらそう呟いていた

フェイト「あなたはいったい誰なんですか！何でこんなにひどいことをするんですか！」

カイザー「ひどいですねフェイト。僕を忘れたんですか？あなたとは何度も子供の頃に会っているのに」

カイザーはそう言いながら自分の顔に付けていた仮面を取って捨てた。フェイトは露わにされた顔を見るとまた驚いた

フェイト「そんな・・・どうして・・・・・・カイザー」

カイザー「僕は言いましたよ。十年前に僕と敵対しなければいいねと、それが現実になっただけですよ。僕は敵対したものにはいくら

昔仲がよくても容赦はしませんよ。」

カイザーはフェイトに感情の籠もっていない冷たい声で言い放った

フェイト「どうしてこんなことするの、これは犯罪だよ。今ならまだ間に合うよ、今から自首すれば罪は軽くなるから！」

カイザー「それは無理です。僕は自分の行いが間違いとは思いません。たとえここでやられることになろうともやり遂げて見せます。まぁ、もっとも負ける気は微塵もありませんがリミッターの掛かっているあなたには」

そういい自分のデバイス・ブラックフォースをフェイトに向ける。
フェイトもカイザーに向けバルディッシュをむけて

フェイト「カイザー、わかったよ。なら私もあなたを倒した後に事情を聞かせてもらうよ！」

フェイトはそう言ってバルディッシュを構え、突っ込んでくる。カイザーはそれを２ｎｄフォルムの剣で受け止め、火花を散らしていた。そしてお互いに武器を弾き距離をとった。

カイザー「リミッターがついているといっても、前と変わりませんか？ではそろそろ仕掛けます」

そしてカイザーはフェイトの正面になり、剣を斜めに構えるがフェイトが金色の魔力弾を数十個形成し、こちらに向けた

フェイト「・・・ファイア！！」

フェイトのかけ声と同時にすべて魔力弾がカイザーに向け発射される。カイザーはそれをすべて回避する。

フェイト「ターン！！！」

その一声で魔力弾がすべて止まり再びカイザーの方に向かっていく。

カイザー「しつこいですね全く、・・・覇龍咆吼撃！！」

自分の周りの覇気を剣に集め、振りかぶり魔力弾に向け衝撃波を飛ばしすべてを破壊した。そして２ｎｄフォルムから１ｓｔフォルムに変えた。

カイザー「シルバーレイン！！」

そう叫び真上に砲撃を撃ち、かなりの高さまで上がったところで砲撃が破裂し雨のように降り注いだ。

フェイト「っ！！・・・ソニックブーム！！」

フェイトはソニックブームを用いて雨のように降り注ぐ魔力弾を回避するがさすがにすべては避けきれずに数個に当たってしまうがプロテクションを展開したためダメージはほとんどなかった

フェイト「まだまだ！・・・アークセイバー！！」

フェイトは鎌になっているバルディッシュの魔力刃をカイザーに向けて飛ばすがカイザーはそれを回避するが設置型のバインドに捕まる。カイザーはバインドブレイクしようとするがリミッターが掛かっているのとフェイトが魔力を多く込めていることもあり、なかなか抜け出せない

フェイト「やっと、捕まえたよカイザー。諦めて投降してくれないかな、できれば私もあなたを攻撃したくない！！」

カイザー「何度も言うようですが、僕は諦めません。連れて行きたいなら僕を倒してからにしてください」

フェイトも覚悟を決めたようだ。

フェイト「手加減はできないからね。・・・アルカス・クルタス・エイギアス・・・疾風なりし天上、今導きのもと撃ちかかれ・・・

バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・」

魔力弾が発生し徐々に強さを増しはじめた

フェイト「フォトンランサー、ファランクスシフト。撃ち砕け…、ファイア！」

フェイトの周りの魔力弾がすべてカイザーに向かって発射されて直撃したように見えたが

カイザー「・・・Ｒｅｆｌｅｃｔ　Ａｅｇｉｓ」

と呟き魔力弾がすべてフェイトの方に跳ね返っていく。フェイトがそれを回避しようとする

フェイト「・・っえ！バインド！！いつの間に！」

いつの間にかバインドに捕まり身動きがとれなくなり自分の放った

魔力弾すべて自分に直撃してしまう。そしてカイザーはフェイトに追い打ちをかける

カイザー「ジャスティスブレイカー！！」

煙が晴れていないところに砲撃を撃ち込みフェイトを狙うが煙が晴れるとそこに居らず、カイザーは後ろに回し蹴りを放ち後ろに回り込んでいたフェイトを吹っ飛ばした

フェイト「っうぁ！！・・・」

フェイトは自分の攻撃がかえって直撃していたことでもうボロボロになっていたのでカイザーの蹴りが直撃した時点で意識を失っており、どんどん下に墜ちて行くがカイザーがフェイトをお姫様抱っこして貨車にゆっくりと下ろしバインドで拘束した

カイザー「さあ、あとはヴォルフがレリックを回収するだけだったのですがヴォルフの元にはあの小さいのが行っているようですが大丈夫でしょうね「（主、レリックの回収が完了しました）」と言ってるうちにレリックの回収が終わったようですね。（ヴォルフ、小っこいのが行きませんでしたか？）」

ヴォルフ「（小っこいの？はい、青い髪をした小さい子は来ましたがとりあえず気絶させてバインドで拘束しておきました）」

カイザー「（わかりました。では帰還しますので準備をしておいてください）」

そう言って念話を切ってアインの元に向かった

アイン「高町、おまえたちの負けのようだ。おそらく、私たちはまた戦うことになるだろう、そのときはもっと覚悟を決めておくことだ」

そこにカイザーがやってきた

カイザー「これで今回はすべて終わりましたね。なのは、久しぶりですね」

なのは「カイザー・・・君」

カイザー「あまり戦いたくはなかった僕たちはレリックを集めています。おそらく、あなたの所属する機動六課もそうでしょう。また、戦うことになります。忠告だけしておきますよ、管理局を信じすぎない方が身のためですよ。」

なのは「カイザー君、それはいったい・・・」

カイザーとアインはなのはが言う前にすでに転移しており、なのはは一人呟いていた

その後、ロングアーチの局員がきてなのはたちを回収していった

第二十八話

ジェイルアジト

レリックの回収を終えてカイザー達が帰ってきてジェイルとウーノが出迎えてくれた。

カイザー「ただいま、レリックは無事回収しましたよ。まぁどうせ見てたんでしょうから知ってると思いますが」

ジェイル「お疲れ様、今からナンバーズ達を紹介したいから着いてきてくれたまえ」

ジェイルはそう言ってウーノと奥に進んでいき、僕達もあとを追っていった

訓練場

ジェイル「じゃあ、紹介するよ。」

ウーノ「すでにご存じと思いますが、Ｎｏ．１・ウーノです」

トーレ「Ｎｏ．３・トーレだ」

クアットロ「私はＮｏ．４・クアットロですわ」

チンク「私はＮｏ．５・チンクだ」

セイン「私はＮｏ．６・セインだよ」

セッテ「・・・Ｎｏ．７・セッテ」

オットー「・・・Ｎｏ．８・オットー」

ノーヴェ「あたしはＮｏ．９・ノーヴェ」

ディエチ「Ｎｏ．１０・ディエチ」

ウェンディ「私はＮｏ．１１・ウェンディっす」

ティード「私はＮｏ．１２・ティードです」

ナンバーズは自己紹介を終えてもう片方を見た

ルーテシア「ルーテシア」

ゼスト「私はゼストだ」

カイザー「ジェイル、Ｎｏ．２が居ないようですが」

ジェイル「彼女は今は任務中だよ」

一人足りないが全員の自己紹介が終わり、僕は全員を見渡した。ナンバーズは個性的な人が多いですね、実力を知りたいですね。ジェイルに頼んで模擬戦をさせてもらいましょうか

カイザー「ナンバーズ達の実力を知りたいので模擬戦をしたいのですが」

ジェイル「ああ、かまわないよ。今からするかい？」

カイザー「じゃあ、お願いします。（アギト、今からここに来てください）」

アギトに念話を送り数分後に来てもらった

アギト「兄貴、何のようなんだ？」

カイザー「実は・・・・ということなんですが」

アギト「わかった」

そう返事をして向こうの方へ飛んでいった

アイン「何を言ったのだ？」

カイザー「小さいことですよ」

そして模擬戦を開始した

ノーヴェＶＳヴォルフ

ノーヴェ「ふん、お前なんかすぐにぶっ潰してやるよ」

ノーヴェはヴォルフを挑発しているようだがヴォルフは何も答えずずっとノーヴェの構えを見ていた

ヴォルフ「・・・・・」

ノーヴェ「〜なんだこいつ隙が全くねえぞ！突っ込むか〜」

ノーヴェがどう攻撃するかと思考して一瞬視線を外したのをヴォルフは見逃さなかった。その瞬間、瞬動を使い一気にノーヴェに接近する

ノーヴェ「なにっ！！」

ヴォルフ「はぁぁぁぁぁぁ！！」

ヴォルフは回し蹴りを放つがノーヴェが腕をクロスさせガードする。しかし、威力は弱まったがガードの上からでもものすごい衝撃が襲い、１０メートルほど後ずさった。

ノーヴェ「どんな蹴りしてんだよ！ガードしてなかったら意識もってかれるとこだぜ」

ヴォルフ「今のを耐えるのか、少し強めに蹴ったんだがな」

そう呟きヴォルフはノーヴェと距離を取り、相手を分析する。ノーヴェはそんなこと関係なしに突っ込んでくる

ノーヴェ「おおおおおおお！！」

ローラでブースト加速しながらヴォルフに向かって殴りかかってくるがヴォルフはその拳を受けとめる。加速のおかげで重みが増し、一瞬だけヴォルフが怯み、そこにノーヴェが渾身の蹴りを放ち吹き飛ばした。

ノーヴェ「やっと一発当たったぜ。かなりきついのがはいったからすぐには立ち上がれないはずだ」

ヴォルフは吹き飛ばされたときに体制を整えてダメージを逃がしていたのでそこまではダメージはないが蹴られた所は少し赤くなっているようだ

ヴォルフ「今のは効いたぞ、だがまだまだだ。次で決めさせてもらうぞ！」

ノーヴェはヴォルフの姿を見て、唖然としていた。自分の自信のあった蹴りを食らってもなお平然と立ち上がってきたからだ。

ノーヴェ「嘘だろ！かなり効いているはずなのに、まるでダメージがないみたいに」

ヴォルフ「いくぞ！！！・・・猛狼瞬撃！！」

そう叫び、ヴォルフはノーヴェの前から一瞬でいなくなりノーヴェはキョロキョロと周りを見渡すがどこにもいない。そして、後ろから衝撃が襲い意識がブラックアウトした。ヴォルフは気配を消してノヴェの後ろに回り込んで魔力を足に乗せ蹴り飛ばして意識をなくさせたのだ。

カイザー「ヴォルフの勝ちですね、ジェイル。ノーヴェもなかなかやりますね。」

ジェイル「ふむ、しかし、ヴォルフ君も強いね。まだまだ全力ではなさそうだ」

カイザー「そうですね、まぁとりあえずノーヴェの治療をしましょうか。」

そう言ってノーヴェに近づいて回復魔法をかけて、傷がなくなっていった。少ししてノーヴェは意識を取り戻し、ヴォルフに近づき。

ノーヴェ「完敗だよ、あんた強かったんだな。よかったらまた相手してくれないか？」

ヴォルフ「我はそこまで強くはないぞ、主のほうが強い。相手ならいつでもしよう。」

ノーヴェ「主？もしかしてあたしに回復魔法かけてくれたやつか」

ヴォルフ「そうだ、主にしてみれば我など赤子同然だ」

ノーヴェはそれを聞き自分の耳を疑った。自分が苦戦して勝てない相手が赤子同然など信じられなかったのである。

このあとも模擬戦をしたいものとした。そして終わったあと、ナンバーズはカイザー達と交流を広め仲良くなった。特にセインとウェンディが人懐こかった。

カイザー達にやられてすぐに医務室でシャマルに見てもらったが全員ダメージはあったもののひどくはなかた。そして、今はミーティングルームで全員でカイザー達のことを話あっていた

はやて「みんな、かなりやられたみたいやけどそこまでひどくなくて何よりや。ここに集まってもらったんは今回の事件の首謀者とこの四人についてや。」

そう言ってモニターを大きく表示して５つの画面を出す。

はやて「ガジェットの製作者およびレリックの収集はこの男広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティを中心に調べる。」

フェイト「こっちの捜査は私が中心で調べるけどみんな覚えておいてね」

ＦＷ「はい！！！」

そして今度ジェイルのモニターを消して四人のモニターを拡大して表示した

はやて「問題はこっちの四人や、なんでレリックを回収しとるかはわからんけどジェイル・スカリエッティと協力しとる可能性が高い。みんな、戦ってどうやった？」

はやてがＦＷとなのはとフェイトに聞いた

スバル「すごく強かったです。途中から手も足も出ませんでした」

ティアナ「レベルの違いを見せつけられました」

エリオ「僕とキャロはフリードの上から見るしかできませんでしたが、すごく強そうでした」

キャロ「フリードが相手の出した龍を見て、突然震えだして何もできませんでした。あの龍は召喚士の私から見てとても強いです。」

FW陣は意見は違うが思っていることは同じように見えた

なのは「わたしの戦った相手ははやてちゃんの夜天の魔導書の元管理人格だったの。でもはじめはおかしいと思ったの、だってリイン

フォースさんははやてちゃんの前で私たちが葬り去ったのに」

すこし疑問に思ったティアナが聞いた

ティアナ「それってどういうことですか？」

フェイト「それはね、リインフォースはもうこの世に存在するはずがないんだよ。でもなぜか今は甦ってるの。」

ティアナ「そんな甦らせるだなんて不可能ですよ。死者蘇生させたなんて聞いたことがない」

なのは「その通りだよ。死者を蘇生なんてできるはずなかった、でもそれをやった人物がいたんだよ。それがフェイトちゃんが戦った相手カイザー君だよ。」

はやてがモニターを操作してカイザーの映ったのを拡大させる

フェイト「カイザーは昔よりも強かったよ、私たちにリミッターが付いてることも知ってるみたいだったし、かなり手加減もしてくれたみたい。」

スバル「あのフェイトさん、なのはさん、その口ぶりだとその人のこと知ってるですか？」

なのは「知ってるよ十年前から、ジュエルシードと闇の書事件に関わっていたんだから」

ティアナ「あの事件に関わっていたんですか！！その人は」

フェイト「ティアナなら聞いたことあるんじゃないかな？カイザー・アルベルトって知ってる？」

スバル「ティア～誰それ？」

ティアナ「そんなこともわからないの！ミッドで天才って言われたひとよ。でもそれが・・・まさか！」

ティアナは感づいたようだが他のＦＷ陣はわからないようだ

フェイト「ティアナの思ってる通りだよ。そう、それがこの人だよ」

それを聞いてティアナ達が顔色が悪くなっていく、そんな人物がま

さか関わっているとは思わなかったのだ。

はやて「何でリインフォースがあっちにおんのかわからんけど私が守護騎士達と説得したら何とかなるかもしれん、シグナムたちもそれでええか」

シグナム「はい主」

ヴィータ「おう」

シャマル「ええ」

ザフィーラ「うむ」

はやて「だから、みんなも気をつけてや相手は一筋縄ではいかへん」

ミーティングを終えて解散になり、ホテル・アグスタの警備の当日になった

第二十九話

今はホテル・アグスタのオークション会場にいます。なぜかというと

回想～

カイザー「ジェイル、ホテル・アグスタでオークションがあるのを知っていますか？」

ジェイル「ああ、知っているよ。あそこは自動ガジェットがロストロギアに反応していくだろうがね。それがどうしたんだい？」

カイザー「遊びに行ってもいいですか？アインと一緒に」

ジェイル「かまわないよ、今回は今のところほしい物はないからね。機動六課が警備に来るだろうから気をつけてね」

現在

僕はアインと一緒にオークション開始前会場に来ていた。アインは僕に腕を組んで寄り添いながら歩いている。周りの目もあるので少し恥ずかしいですがアインが幸せそうな表情をしているのでまぁいいです。

アイン「カイザー、機動六課の隊長陣がここに入ってきたぞ。挨拶でもしていくか？」

カイザー「なのは達ですか・・・いいでしょう。挨拶しておきましょう、でもユーノが前にいるのでそちらを先に行きましょう」

アイン「わかった」

ユーノが誰かと話しているが肩をたたいてこちらを向かせた

カイザー「やぁ、久しぶりですね。ユーノ」

するとカイザー達の顔を見てユーノは驚いた表情をして口をパクパクさせていて、隣の緑色の髪をした青年は僕達の顔を見てなにか考えている

ユーノ「カイザー・・・どうしてここに・・それに君はあのときなのは達によってこの世を去った夜天の魔導書の管理人格」

ヴェロッサ「夜天の魔導書？・・・確かはやてが持ってる」

ユーノ「そう、その管理人格だよ。この世にいるはずないんだ！ど

うして」

二人でなにやら討論しているが面倒なのでほっておいて隊長陣の元に向かった

はやてｓｉｄｅ

今はフェイトちゃんと別れてなのはちゃんとオークション会場のチェックなどをしとる

はやて「会場内の警備はさすがに厳重っと」

なのは「一般的なトラブルには十分対処できるだろうね」

はやて「外は六課の子達が固めてるし、入り口には防災用の非常シャッターもある。ガジェットもここまで入ってくる用もなさそうやしな」

なのは「油断はできないけど少し安心」

はやて「まぁ、どっちにしても私らの出番はほんまの非常事態だけや」

そうなのはちゃんと話しとると後ろから肩をたたかれて話しかけられた。

カイザー「八神はやてですか?」

はやて「そやけどあなたは・・・!」

私は相手の顔をみて固まってしまった。だってそこには私たちが追っとる事件の最重要参考人がおったんやから

はやてｓｉｄｅ　ｅｎｄ

カイザー「隊長がこんなのんびりでいいんですかね。アイン」

アイン「そうだな、まぁ私たちには関係ないがな」

はやて「リインフォース！！なんでそっち側におるんや、はよ戻ってきい！」

はやてはアインに手を伸ばして腕を掴もうとするがアインによって弾かれた

はやて「・・・っえ！」

アイン「勘違いしないでください。私は自分の意志でカイザーと共にいたいと願い、そしてやっと一緒になれたのですからカイザーの元を離れるつもりはありません」

アインははやてに自分はあなたの元に戻るつもりはないと述べて拒絶すると、はやてはあからさまにがっかりとした

なのは「はやてちゃん・・・貴方達はどうしてここにいるんですか？」

カイザー「そんなのオークションを見に来たからですよ。でもいいんですか、先ほどガジェットがこちらに向かっていると報告を受けましたがここに居て大丈夫ですか？」

はやて「それなら問題あらへん、新人達と守護騎士達もおるしな、

だからあんたらを拘束させてもらうで」

どうやらはやては立ち直ったようだ。僕も捕まる気なんてさらさらありませんね、とりあえず魔力を最高値まであげますか。魔力をばれないように徐々にためていく

カイザー「それは難しいですね、僕は捕まる訳にはいかないので。どうしても捕まえたいなら会場の人たちを巻き込む覚悟をするんですね」

なのは「それはどういう・・・っっ！！！」

なのははカイザーの言葉をどういう意味か考えたがすぐにカイザーの魔力を感じ取り理解した。はやても動揺に理解したようだ。二人はとても悔しそうな顔をした後どこかに念話で連絡したようだ。

カイザー「では、またお会いしましょう二人とも」

カイザーはそう言ってアインと一緒に会場の出口に向かって行った。
残った二人はお互いの顔を見てため息をついた

はやて「せっかく捕まえれると思ったけど詰めが甘かったわ」

なのは「そうだね、カイザー君は昔から隙がないからなかなか捕まえるのは難しいね」

会場外

僕達が外に出るとガジェットがこちらに向かって来ているのがわかった。その先にルーテシアとゼストがいたので話しかけた

カイザー「ゼストさん、ルーテシア。お久しぶりです」

アイン「久しぶりだな」

ゼスト「ああ、久しぶりだな」

ルーテシア「・・・久しぶり」

全員で久しぶりの再会で少しだけ話した。

カイザー「ゼストさん、アギトはどうですか？」

ゼスト「アギトか、よく頑張ってくれている」

カイザー「そうですか・・・元気で何よりです。僕達は少し六課を相手に遊びますので、手伝ってほしいことがあったら行ってくださいね。」

そう言って少し離れて行った。そのあとルーテシア達はジェイルから通信で依頼を受けたようだ

カイザー「さあ、六課の皆さん楽しんでいきましょう。アインは僕の補助と隠蔽魔法で僕達がどこにいるかをわからなくしてください」

アイン「任せてくれ、では行くぞホワイト・セットアップ」

ホワイト「・・・Ｓｅｔ　ｕｐ」

アインの格好は夜天の魔導書の時の衣装の白色バージョンになった。

カイザー「では僕もブラックフォース・セットアップ」

ブラック「・・・Ｓｅｔ　ｕｐ」

カイザーの格好は黒衣の死神のような格好になってブラックフォースを３ｒｄフォルムに変えた

カイザー「ブラックフォース、スナイパーモード」

ブラック「・・・Ｓｎｉｐｅｒ　ｍｏｄｅ」

カイザーはブラックフォースをライフルに変形させ、狙う相手を探した。

カイザー「近くにシグナムとヴィータがいますね。そしてビルの上にはおそらくシャマルが広域の探索魔法でカジェット達の位置も教えているんですかね、どちらにせよやっかいなことには変わりないです。シャマルから狙い撃ちます」

カイザーはシャマルのいるビルに向けて狙いを定める。

カイザー「いきます、ミラージュショット！！」

隠蔽魔法のかかった魔力弾を三連射し、シャマルの方へ向かって行く。それからカイザーは次々と狙い撃っていく

機動六課ｓｉｄｅ

カジェットを全機撃墜しようと最後の一機にだけになったときにシャーリーからシャマルに緊急通信が入った

シャマル「シャーリーどうしたの？そんな慌てて」

シャーリー「シャマルさん、すぐにそこから逃げてください。今いる位置に魔力弾が迫っています。」

シャマルは周りを見渡すがどこにも魔力弾など見あたらず、間違いではないのかとシャーリーに連絡しようとした

シャマル「シャーリー、魔力弾な・・・」

魔力弾なんてと言おうとしたとき、シャマルの体に三回衝撃がきてそのまま倒れて気を失ってしまった

シャーリー「シャマルさん？シャマルさん！」

シャマルはシャーリーの通信に反応がなかった。シャーリーはシャマルがやられたのだとわかり全員に通信を入れるがすでに遅く、他のメンバーも攻撃を受けていた

ＦＷ陣＆ａｍｐ；ヴィータ・シグナム・ザフィーラ

どこからともなく攻撃が飛んで来て防御するのが精一杯で相手の位置を特定するには至らずにいた

ヴィータ「クソ、いったいどこから攻撃してんだよ。こうも攻撃が激しいと探せねえじゃか！！ロングアーチ、まだわかんねーのか」

シャーリー「まだわかりません。かなり強力な隠蔽魔法のようです。場所が特定できません」

シグナム「落ち着けシャマルはどうしたんだ！シャマルなら見つけることも可能なはずだ。」

シグナムはシャマルならば時間は少しかかるが見つけられると主張するが

シャーリー「シャマルさんは一番始めに狙われて今は気絶しています。気をつけてください、今までと比べものにならないほどの量の魔力弾が来ます。3，2，1，来ました」

シャーリーがそう言いヴィータ達が上を見渡すと空を覆い尽くすほどの魔力弾が降ってきた。ヴィータ達がＦＷ陣の前に出てなんとか守り抜き攻撃がやんだ。

カイザーｓｉｄｅ

カイザー「ふう、終わりました。今回はこのくらいでいいでしょう、あのティアナ・ランスターにプレゼントでも渡してきましょう。」

アイン「プレゼントですか？何をわたすんですか」

カイザー「これですよ、前に作ったオートプロテクションのアクセサリーですよ。ランクでいえばＳランクの攻撃までなら耐えられますよ。ピンチの時にしか発動しませんがね、渡して発動するか見るので一応後をつけて六課に潜入してきます。一応先に帰ってジェイルに報告しておいてください」

アイン「気をつけてな、待っているぞ。」

アインはそう言って去ろうとするがカイザーが後ろから抱きしめる。

カイザー「僕はやられませんよ、あなたと共に生きるのですから」

アイン「／／／そ、そうか。私もそう思っているぞ。」

少し顔を赤くしながらそう言って急いでその場を去って行った。ティアナのいるところに付いたんですがとても行きにくい状況です。

ティアナ「あたしはここを警備してるあんたはあっち行きなさいよ」

スバル「あのねティア」

ティアナ「いいから行きなさいよ。」

スバル「ティア、全然悪くないよ。私がちゃ「行けっつってんでしょ！！！」っ！！」

スバルは悲しそうな顔を一瞬したように見えた

スバル「ごめんね、また後でねティア」

そう言い残しスバルは向こうの方へ走って行った

ティアナ「・・・あたしは・・・あたしは・・」

そう呟きながら静かに泣いていた。僕もお人好しなんですかね、いちいち関わろうとするなんて

カイザー「何を泣いているんですか？ティアナ・ランスター」

ティアナ「っ誰！・・・あなたは！！」

ティアナは振り向きこちらにクロスミラージュを向ける

カイザー「落ち着いてください。別に争いに来たのではないのですから」

カイザーは何もしないと両手をあげてなにもしないとジェスチャーするティアナも信じてくれたようでクロスミラージュをおろしてくれた。

ティアナ「わかりました。じゃあ何をしに来たんですか？」

カイザー「貴方の悩みに答えるのとある物をプレゼントしにきました。貴方は自分には何もないと思ってるんでしょ？」

ティアナ「っっ！！そうよ。私には才能もなければレアスキルもない、周りにいるのは優秀な子や歴戦の勇者ばかり、私には何もないのよ！！！」

ティアナは涙を流しながらカイザーに叫んだ

カイザー「何も自分の武器は才能やレアスキルだけではありませんよ。貴方の武器はここじゃないんですか。」

自分の頭を指し、ティアナはそれを見て考えた。

カイザー「貴方の武器は冷静な判断力と指揮能力じゃないんですか」

ティアナ「私の武器は冷静な判断力と指揮能力・・・」

カイザー「それとこれはプレゼントです。できれば受け取ってほしいのですが」

ティアナ「これはネックレス？どうして私に・・・」

ティアナはどうして自分なんかにプレゼントをくれるのかがわからなかった。もっといい人がいるのではないかと

カイザー「まぁ、それはお守りですよ。いやなら捨てて結構です、僕は気まぐれな性格をしていますから」

ティアナがネックレスを見つめている間にカイザーは隠蔽魔法で姿を消していたためティアナにはどこかへ行ったように思えていた。一応ネックレスをつけてくれた。そして機動六課に戻って行った、僕もあとをつけていきましたけどね。

第三十話

今はスターズ、つまりスバルとティアナがなのはと２ｏｎ１で模擬戦をしています。僕はビルの上で隠蔽魔法で姿を隠して、ヴィータとフェイト、エリオとキャロの後ろで見てますよ。ティアナはちゃんとネックレスをつけてくれてるみたいですね

ヴィータ「お、クロスシフトだな」

下ではティアナが無数のオレンジ色の魔力弾が展開し、なのはに狙いを定めていた

ティアナ「クロスファイアー・・・シュート！！！」

オレンジ色の魔力弾が一斉になのはに向かって行く

ヴィータ「ん？・・なんかキレがねえな」

フェイト「コントロールはいいみたいだけど」

ヴィータ「いや、それにしたって・・・」

なのはを追っているが魔力弾には確かにキレがないように見えた。かなり追い込まれているようでしたから無理な練習でもしたんでしょうね。おっと、なのはの前にスバルのウイングロードが現れて、なのはは四つの魔力弾を形成するがスバルを見て

なのは「ん！フェイクじゃない本物！」

スバルに向かって形成した四つの魔力弾を放つ。スバルは右手を前に出しプロテクションで2発はガードするが残りの2発は一つは肩をかすめ、もう一つは右足に当たるがそれに構わず突っ込み、右の拳でなのはに殴りかかるが、杖で防御され反撃を受け吹き飛ばされる

なのは「こら、スバル。ダメだよ，そんな危ない機動」

なのははティアナの魔力弾を避けながらスバルに言う。スバルは何とかウイングロードの上に着地した。

スバル「すいません！でもちゃんと防ぎますから！！」

なのははその言葉を聞き少し違和感を覚え、周りを見渡しあることに気づく。

なのは「ティアナは？・・・」

そしてビルの一点が光り、自分に標準が定められていることに気づく。

フェイト「砲撃？ティアナが！」

なのははティアナを見たあと再びスバルに目を向ける。

ティアナ「（特訓成果、クロスシフトC行くわよスバル！！）」

スバル「おう！！」

スバルはカートリッジを一つロードし、ローラを加速させウイングロードの上をなのはに向かって走る

スバル「でりゃぁぁぁぁぁ！！！」

右のリボルバーを回転させて向かうがなのはも魔力弾を発射する。
それをすべて回避してなのはに殴りかかるがまたしてもプロテクションで防がれる。その状態が続いているときティアナの方を見るとすーと消えた。

幻影の使い方がまだセレナードの方がうまいですね、連れてこればよかったですねぇ。まあ続きを見ましょうか

キャロ「あっちのティアさんは幻影！」

エリオ「本物は！」

本物のティアナはというとウイングロードの上を走り、クロスミラージュの先に魔力刃を形成する。

ティアナ「バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける。・・・一撃必殺・・・てぇぇぇぇぇ！！！」

ウイングロードから飛び降りなのはに突っ込む

なのは「レイジングハート・・・モードリリース・・・」

レイジ「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」

レイジングハートは待機状態の玉に戻るがティアナは気づかず、そのまま突っ込んで行きなのはに直撃して煙が上がり、晴れるとそこにはスバルの拳とティアナの素魔力刃を素手で掴んでいるなのはがいた。うわぁ、痛そうですね。わざわざ、素手で取ることもないのに。

なのは「・・おかしいな、・・・二人ともどうしちゃったのかな・・・」

スバル「・・・・・」

ティアナ「・・・え！」

二人ともなのはを見て唖然とする

なのは「頑張ってるのはわかるけど・・・模擬戦は・・・喧嘩じゃないんだよ。・・練習の時だけ言うこと聞いてるふりで、本番でこんな危険な無茶するんなら・・・練習の意味ないじゃない」

ティアナはなのはの手の血を見て動揺する。ティアナは血を見るのが少ないのですか？かなり動揺しているようですね

ティアナ「っっ！・・・・」

なのは「ちゃんとさ練習通りやろうよ・・・ねぇ」

スバル「あ、あの・・・」

スバルはびびってますね、あんな感じになったのを見たことないんですね。確かに今のなのはの目は怖いかもね

なのは「私の言ってること・・・私の訓練・・・そんなに間違ってる？・・・」

ティアナは魔力刃を解除し、後ろに飛びウイングロードに乗る

ティアナ「あたしはもう誰も傷つけたくないから！！なくしたくないから！！」

ティアナは魔力弾を形成し始める

スバル「・・・ティア」

ティアナ「だから・・・強くなりたいんです！！！」

なのは「少し頭冷やそうか・・」

なのはは指をティアナに向け、足元に魔法陣を形成する

なのは「クロスファイア・・・」

ティアナ「ファントムブレイ・・」

なのは「・・・シュート」

ティアナの技が完成する前になのはクロスファイアーが直撃し、煙が上がる。

スバル「ティア！！バインド！」

なのは「じっとしてよく見てなさい・・・」

再びティアナに攻撃をし、直撃をしたがそこには無傷のティアナが立っていた。どうやらプロテクションが無事発動したようですね、強度も申し分ないです。

ティアナ「え！これはあの人にもらったネックレス・・・そうこれが守ってくれたんだ。」

スバル「え！ティアにはもうそんな魔力はないはず、しかもあれはティアナと魔力光が違う」

ティアナもスバルもそれには驚いていた。なのははそれを見て何か考えていた。フェイト達は

フェイト「あれは！ティアナと魔力光が違う、しかも銀色・・・」

ヴィータ「あの色はあたしの知る限り一人しかいない」

フェイトとヴィータは互いに顔を見合わせ頷く、どうやら考えていることは同じようだ

フェイト「あの魔力光はカイザーだね」

ヴィータ「ああ、間違いない。でもどうしてティアナが」

フェイト「あとで本人に聞いてみよう」

エリオ「それにしても、あのプロテクションそうとうな強度ですよ。たぶん、僕の攻撃では破壊できないです。」

ヴィータ「それはそうだろうな、もしあれが本物のカイザーのプロテクションと同じ物ならあたしでも破壊できない」

キャロ「ヴィータ副隊長でもですか！！」

ヴィータ「ああ、闇の書事件の時あいつのプロテクションをアイゼンで攻撃したことがあったんだよ。結果は硬すぎてアイゼンの方がおかしくなりそうだったからな」

エリオ「ほんとですか!!!信じられない」

と四人の会話を聞いていた、僕は今度はアインに最高傑作の出来の指輪をあげようかと考えていた。もちろん、セレナードにもあげますよ。ヴォルフはガントレットがいいでしょうか。

なのは「ティアナ、それはどうしたの?そんなの持ってなかったよね」

なのはは再びレイジングハートを起動させながらティアナに問う

ティアナ「はい、確かに数日前まで持ってませんでした。でも、お守りにともらったんですよ」

なのは「誰にもらったのかな?教えてほしいんだけど」

なのははなぜか魔法陣を形成していてレイジングハートの先に魔力を集めていた。

ティアナ「顔は暗くて見えなかったからわからなかったです。」

ティアナは攻撃しようとするが魔力がほとんどないのか、攻撃することができない。フェイト達は

ヴィータ「おい、あれは！なのは、本気でティアナ落とすつもりじゃねぇか！！」

フェイト「マズイよ、どうしよう」

そこでカイザーの声が聞こえてきた。

カイザー「その必要はありませんよ。まぁ、見ていればいいじゃないですか」

ヴィータ「か、カイザーだと、どうしてここに」

ヴィータ達は声のした方を振り返るとそこにはカイザーが正確にはティアナのプロテクションが発動したときに作り出した限りなく本物に近い分身だが本物はティアナの横で隠蔽魔法で姿を隠している

カイザー「ずっと居ましたよ、ここにね」

フェイト「それより見てればいいってどういうこと！」

フェイト達と話していると足下に魔法陣が現れて、そこから鎖が出て捕まってしまう。それだけでは不安なのか、その場にいる全員からバインドをかけられた

フェイト「これだけ厳重にかければ逃げられないでしょ」

エリオ「ティアナさんは大丈夫なんでしょうか？」

カイザー「見ていれば、わかりますよ」

フェイト達はなのはのほうに視線を戻した。

なのは「ティアナ、少し頭冷やそうか」

スバル「もうやめてください、なのはさん！！！」

スバルはなのはに叫ぶがそれを無視してティアナに攻撃しようとする。カイザーは真横でプロテクションの強度などの詳しいデータを計算している。

なのは「ディバインバスター！」

ティアナに向かって放たれティアナ直撃したかと思うと、またプロテクションに防がれる。もういいですね、さて少しお仕置きします

か。そして、隠蔽魔法を解きティアナの真横に姿を現した。

ティアナ「え！・・・いつの間に！！」

スバル「嘘！！いきなり現れた！」

なのは「・・・カイザー君・・・」

三人とも驚いているようだがなのははそれほど驚いていないようだ。

カイザー「そのネックレスは役に立ってるようですね、あげたかいがありましたね」

ティアナ「ありがとうございました。助かりましたけどどうして」

カイザー「言いましたよ、僕は気まぐれですと。僕はそろそろ帰りますが少しなのはに悪夢を見てもらいましょう。・・・なのは、今

の貴方は教導官としては失格ですね」

その言葉になのはが反応する。

なのは「それはどういうことかな?私の教導が間違ってるって言うの」

カイザー「そうですね、今の貴方は少なくとも間違ってると思いますよ。話し合いも碌にせず、自分の教導に反したから痛めつけていてはね。それとも自身を持って自分は正しいといえますか?そこで貴方を睨んでいるスバルに向かって」

なのははスバルを見ると思いっきり睨んでいた

なのは「私は・・・間違ってないの!!」

そしてなのはは先ほどより巨大な魔法陣を展開し、先ほどとは比べものにならないほどの魔力が集まり始めた。

カイザー「ティアナ、スバルを連れて避難してください。ここは危険ですよ」

それを聞きティアナはスバルの元に行くがスバルはバインドにかかっており動けない。それを見たカイザーは指をパチンと鳴らし、スバルにかかっているバインドを破壊した。スバル達はびっくりしていたがすぐにフェイト達の元に避難した

フェイト達はなのはを見て確信する

フェイト「あ、あれはスターライトブレーカー！」

ヴィータ「あんなのくらったらひとたまりもねえぞ」

ティアナ「だ、大丈夫なんでしょうか」

といろいろな意見が出ていたが一人だけ別のことを言っていた

カイザー（分）「あ～あ、なのははだいじょうぶですかね」

ヴィータがそれを聞いて反論する

ヴィータ「どういうことだよ！どう見たってなのはの方が有利じゃねえかよ！！」

カイザー（分）「フェイトは何となくわかってるんじゃないんですか？あれを僕に撃ったらどうなるか。僕に実際に撃ってるでしょ、魔法を」

フェイトはそれを聞いて自分が魔法を撃ってどうなったか思い出す。
そして思い出したのか、突如焦りだした。

スバル「フェイトさん、どうしたんですか？そんなに慌てて」

フェイト「大変だよ、あれを撃ったらただじゃすまないよ！」

ヴィータ「それはそうだろ。」

フェイト「違うよ！危ないのはなのはだよ！！」

カイザー「フェイト、もう遅いですよ」

指さした方を見るとスターライトブレーカーをすでに放っていた

視点戻って

カイザー「なのはは学習しないんでしょうか。まぁいいです。・・・Ｒｅｆｌｅｃｔ　Ａｅｇｉｓ」

なのはが放ったスターライトブレーカーにカイザーが飲み込まれたと思っているとそのままの威力のスターライトブレーカーがなのはに返って行った

なのは「え！きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

自分の砲撃に飲み込まれて地面に向かって落下していった。カイザーはそれを追いバインドで拘束するとなのはに近づき頭に手を置いた

カイザー「・・・・・ナイトメア」

と小さく呟き、そう言い終わったと同時になのはの悲鳴が響き渡った

なのは「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

そしてカイザーは何かを小さく呟き手を離し転移してその場を去ったがなのはは叫び続けている。皆は心配して分身のカイザーを引っ張ってなのはの元に行った

なのは「いやぁぁぁぁぁぁぁ！！」

フェイト「な、なのは、落ち着いて、ね」

フェイトはそう言うがなのはは落ち着かず悲鳴が響き渡るばかりだった．ヴィータははやて達を呼んでなのはの元に集まった。

はやて「なのはちゃん!!どないしたんや!!なのはちゃん!!」

はやてもフェイトと動揺に話しかけるがそんなことお構いなしに叫び続けている。シャマルがその場にいたヴィータ達にこうなる前の状況を聞いていた

エリオ「カイザーって人がなのはさんの頭に手を置いて何か呟いていましたよ」

シャマルはエリオのこの言葉を聞いてなのはに何が起こっているのか確信した

シャマル「はやてちゃん、なのはちゃんに何が起こっているかわかりました」

はやて「ほんとか!!シャマル!!」

ヴィータ「なのははどうなっちまったんだよ!!」

フェイト「ヴィータ、落ち着いて。それでどうなっているんですか？」

シャマルは一呼吸置き、皆に今の状況を告げた

シャマル「なのはさんは今、ある魔法にかかっています。」

キャロ「ある魔法？」

シャマル「その魔法の名前はナイトメアと言うものです。その効果は自分がもっとも見たくない悪夢を見ることになります。」

ティアナ「そんな魔法聞いたことないんですけど・・・」

シャマル「それは彼が作ったオリジナルの魔法だからです。だから、私には治療法も何もわかりません。おそらく、知っているのは本人だけです。」

そう言って視線を分身のカイザーに向ける。そしてヴィータが胸ぐ

らを掴みかかる

ヴィータ「おい！！お前なら治せんだろ！！治せよ！！！！」

カイザー「無理ですね、僕にはできません。」

シャマル「どうしてですか！！あなたならできるでしょ！！！」

カイザー「本人じゃない限り治せません。時間のようです。」

そう言うとカイザーの体が徐々に透けてきた。それを見て皆どうなっているのかわからず驚いている。

カイザー（分）「こういうことですよ、僕は魔力で作られた分身です。そのナイトメアは以前シャマルが受けた物とは違って改良が施されています。ですからその分すごいでしょうね、今連絡をもらいました。二日後に治るようにしたようですよ。本人も気まぐれですね、なのはが反省したと判断したようです。」

説明したあと透けた体でティアナに近寄った。

カイザー「そのネックレス、いやなら捨ててもいいですからね。」

ティアナ「いえ、大事にさせてもらいます。」

カイザー「そうですか、ほんとにさよならです。また、会いましょう戦場で。」

カイザーはすーっと体が完全に消えた。なのはのも元に皆が近寄っていくと

なのは「一人はいやだよ・・・」

と呟いていた。

第三十一話

カイザーはジェイルのアジトに戻ってきた。

カイザー「ただいま戻りました。ってジェイルは何をしてるんですか？」

ジェイル「カジェットを少し改良してね。それの稼働テストだよ、相手の戦力を測る目的もあるんだがね」

カイザー「ああ、そうそう、なのはは二日動けませんよ。」

ジェイル「ん?どういうことだい、なにかしたのかね?」

カイザー「ジェイルは僕がオリジナルの魔法を作れるのを知っていますよね。その魔法の以前より強化したものを使用したんですよ。精神力が弱かったら精神崩壊を起こすかも知れないですね。・・・ナイトメアを使ったんですよ」

ジェイルはそう言われカイザーのナイトメアの効果を思い出していた。ナイトメア、彼のオリジナルの魔法で相手がもっとも見たくない悪夢を見せるという魔法。ふむ、末恐ろしいね。

カイザー「今度は僕とプレシアさんもカジェットの改造を手伝ってあげますよ。では・・」

そう言い残し奥に入って行く

ジェイル「ふふふ、今度は彼とプレシア女史が手伝ってくれるか楽しみだね。あはははは・・・」

ひとり笑っていた。カイザーはナンバーズ達とアインたちのもとへ来ていた

ウェンディ「あ、カイ兄！お帰りなさいっす」

クアットロ「お帰りなさい～」

セッテ「お帰り」

セイン「おっかえりー」

アイン「お帰り」

セレナード「カイ～お帰り～」

カイザー「ただいま。他のみんなは？

他のナンバーズとヴォルフがいないので周りをみるがどこにもいない

ウェンディ「それなら、チンクとトーレは訓練所で模擬戦、ノーヴェとヴォルフさんは組み手、オットーとディエチは射撃場で射撃訓練をしてるっすよ」

カイザー「ありがとう，ウェンディ」

頭を撫でてあげると少し顔を赤くして照れていた

ウェンディ「くすぐったいっすよ」

カイザーが撫でるのをやめると少し残念そうな顔をしてカイザーの手を見つめていた。

カイザー「僕は自分の部屋でプログラムでも作りますかね。アイン、セレナード、来てください。二人にも手伝ってもらいですから。ウェンディ、クアットロ、セッテ、セイン、またあとで」

カイザーのあとにアインとセレナードが続き、部屋に向かって行った。

それから三日が経ち、なのはもナイトメアが解けて今では完全に回復していた。僕もその頃新しいプログラムを完成させていました。今日はジェイルに緊急で呼ばれました。なんでしょうか？

ジェイル「すまないね。少し仕事を頼みたい、ナンバーズ達も何人か向かってもらっている。」

カイザー「仕事は何ですか？レリックですか。」

ジェイル「それもあるのだが、この少女を捕まえてきてほしい。レリックも一緒に持っているから頼むよ」

ジェイルはモニターに今回の標的である5～6歳ほどの少女を映し

た。それを見て僕はジェイルを冷たい目で見る

ジェイル「何だね、その目はまるで・・・私が何をしたんだ。」

カイザー「いいんですよ、僕は貴方の趣味をとやかく言う気はありませんから」

ジェイル「待ってくれ!!違う!違うんだ!私はそういう趣味はない、あれは聖王の器なのだよ。」

セレナード「つまんないの～そう言うことは最初に行ってください～」

カイザー「では行ってきます」

カイザー達はその場をあとにし現場に向かった

海上

なのはとフェイトはガジェットを確実に破壊していくがきりがないとしびれを切らしていた。そこで通信が入り、はやてが自らカジェットを破壊するといい、クロノからリミッター解除許可をもらい広域空間魔法を使用しようとしていた。

あれはクアットロのＩＳですね。一応連絡しましょうか

カイザー「（クアットロ、手伝いはいりますか？）」

クアットロ「（その声はカイザーちゃん、大丈夫ですわ。問題ありませんから地下に向かってください。）」

カイザー「（わかりました、気をつけてね）」

カイザーはジェイルに頼まれた少女を捜しに行き、セレナードとヴォルフは地下へ、アインには念のためクアットロと合流するように頼んだ。

地下

セレナード視点

レリックが地下にあると報告を受けたから地下に来たんだけど～、レリックどこにあるのかな～。そう言えば、私って二重人格っぽいんだよね～。自覚はあるんだよ～。今はいいや。

セレナード「ねえ、ヴォルフ～。今地下には魔力反応が５つあるよね、たぶん機動六課のＦＷ陣ともう一人誰かわからないけど」

ヴォルフ「そのようだな、ともかく今は早く見つけることだ。戦闘になるかもしれんがそのときは仕方あるまい．ティアナであったか、主のあげたネックレスを破壊か回収するのだろう」

セレナード「そうだね～、あのネックレスは私たちでもやっかいだからね。」

セレナードはヴォルフの上に乗りながら呑気に会話していると前にレリックらしきケースが落ちていた

セレナード「ねぇ～これだよね？たぶん・・・」

ヴォルフ「おそらく、では回収してしまおう。・・・誰だ？」

ヴォルフが声をかけた方を向くとそこにはルーテシアとガリューがいた。

セレナード「あ～、ルーテシアだ！どうしたの？もしかしてレリックの回収？」

ルーテシア「・・・うん」

セレナード「じゃあ、レリック持つ？私たちがあの子達の相手をするけど」

ルーテシア「・・・じゃあ、お願い」

セレナードはルーテシアにレリックを渡した。ちょうどそのときFW陣とギンガが来たようだ。ルーテシアはレリックを持ってその場を去ろうとするがキャロが走って近寄っていく

ルーテシア「・・・邪魔」

レリックを持っていない方の手を前に出し、そこに魔力を集中させキャロに放つ。キャロもプロテクションで防ごうとするが破壊されエリオの方に吹き飛ばされ、エリオごと壁にたたきつけられる。そこにガリューが追い打ちをかけようとする

スバル「うおぉぉぉぉぉ！！！！」

スバルがガリューに殴りかかるがぎりぎりで回避される。そしてガリューの後ろからギンガが殴りかかりガリューは腕をクロスし、防御するがガードの上から吹き飛ばされる。

スバル「こらぁ～！！そこの女の子、それは危ない物さわっちゃダメ。私たちに渡して」

ルーテシアはその場に一瞬立ち止まるがそのまま歩いていくがいきなり目の前にオレンジ色の魔力刃が現れて、ティアナが姿を現し、ルーテシアを捕まえる。セレナードはこの瞬間を待っていた、そう一番気がゆるむこのときを

ティアナ「ごめんね、乱暴ででもこれ本当に危険なものなのよ・・・っ！」

セレナード「カイのネックレスは確かに回収させてもらったよ。これは私たちでもなかなかつらいからね。あと貴方はすぐには動けないでしょ、足下が凍ってるんだから。ルーテシア、こっちだよ」

ルーテシア「・・・うん」

セレナードに向かってルーテシアが歩いていった。ティアナはセレナードの気配が全く無かったことといつ自分は足下を凍らされていたのかわからず、困惑していた。そこに向こうからアギトがやってきた。

アギト「ルール～、もう勝手に行くなよ。心配したじゃんか、セレナード、久しぶりだな。」

セレナード「そうだね～久しぶり～」

アギト「もう大丈夫だぞ、烈火の剣精アギト様が来たからな。みんなまとめてかかってこいやぁ！！！」

セレナード「アギト、うるさいですよ。凍りますか・・・」

手に冷気を纏わせた魔力を集め始め、それを見てアギトは顔を青くして謝り始めた

アギト「ごめん！ちょっと調子こいてた。だから許して」

必死に謝っているようなので取りあえず、魔力を集めるのをやめた。

セレナード「ふざけるのはここまでにしてさっさと終わらせますよ。ヴォルフも準備してください」

アギト「・・・っはぁ！！！」

アギトは手から炎を出しスバル達に向かって投げつける。それを避けるが煙で何も見えなくなる。ガリューが煙の中に突っ込みスバル達に攻撃するがギンガがそれを相殺し、互いに距離を取った。

スバル「ティア、どうする。」

ティアナ「任務はあくまでケースの確保よ。撤退しながら引きつける。」

スバル「こっちに向かってるヴィータ副隊長とリイン曹長とうまく合流できればあの子達も止められるかも、だよね」

ティアナ「そう！｛確かにあの女の子と召喚虫は止められるかもないけど、もう一組はわからないわ｝」

そこに念話が届いた

ヴィータ「（よし、なかなかいいぞ。スバルにティアナ。）」

スバ・ティア「（ヴィータ副隊長！！）」

二人はヴィータからいきなり念話が来たことに驚いたようだ

リイン「私も一緒です。二人とも状況をちゃんと読んだナイス判断ですよ。」

エリオ「ヴィータ副隊長、リイン曹長、今どちらに！」

アギト「ルールルー、セレナードなんか近づいてきてる！魔力反応でけぇ！！」

セレナード「そうだね、でも私とヴォルフよりは小さいですよ～」

セレナードとルーテシア、ヴォルフは天井を見上げた。そして叫び声と共に天井が破壊されて煙が立ち、そこからリインが飛び出て魔法を発動する。

リイン「捕らえよ、たてつく足かせ・・・Ｆｒｉｅｒｅｎｆｅｓｓｅｌｎ」

ルーテシアとアギトの周りに氷が現れてドーム場になり二人は捕らえられたようだ

ヴィータ「吹き飛べー！！！」

ハンマーでガリューに攻撃する。ガリューは耐えようとするが耐えきれず吹き飛ばされ壁に激突する

セレナード「あ～あ、二人は身動きとれなくなるし、もう一方は吹き飛ばされてるし、どうするヴォルフ？」

ヴォルフ「問題あるまい、大丈夫だろう」

ヴィータ「あとはお前達だけだぞ、どうするんだ」

セレナード「どうするもこうするも別にただ向かってくる相手を叩き潰すだけだよね～」

ヴォルフ「その通りだ。」

二人とも戦闘態勢を取り攻撃を仕掛けようとする。あれ～ルーテシアとアギトの魔力反応がどこかへ移動したみたい。じゃあ、別に戦う必要は無いよね。そして戦闘態勢を解く。

ヴィータ「どうした、降参か」

セレナード「いえ、護衛対象がもうここにいないので私たちもここをさらさせてもらいます」

そう言って二人の足下に魔法陣を展開する。

リイン「ヴィータちゃん、二人がいないです。」

セレナード「そう言うことです～。ではでは～」

二人は転移していった。その瞬間突如揺れ始める。

ヴィータ「何だ！！」

キャロ「大型召喚の気配があります。たぶん、そのせいです。」

そしてさらに揺れが激しくなる

ヴィータ「とにかく脱出だ！！スバル！！！」

スバル「はい！！！」

スバルは拳を地面にたたきつけウイングロードを天井に向け発生させ、皆脱出していった。

地上

ルーテシアが地雷王を出しているが突如地雷王のしたにに魔法陣が現れてそこから出たチェーンに地雷王が捕まってしまう。

アギト「何だ？」

アギトの見ているほうを見るとキャロがいて、その後ろから2本のウイングロードが伸びてきてその上をスバルとギンガが滑走してその間にヴィータが飛んで来た。ルーテシアは後ろに気配を感じ取り後ろを向くとティアナが攻撃態勢に入り魔力弾を放つが間一髪で避け、反撃する

アギト「このぉぉぉぉぉ！！！！！」

アギトは炎を発生させ、ルーテシアはナイフのような物を放った

ティアナ「・・・ふっ！」

ティアナはジャンプして避ける。ルーテシアも無事に着地するが目の前に雷光のようなものが走り、エリオにストラーダを突きつけられ、アギトも周りを氷に囲まれて身動きがとれずにいた。

リイン「これまでです。」

リインはルーテシアとアギトにバインドをかけて拘束する。遠くからセレナードがそれを見ていた、やっと見つけました。今助けにいきますよ～。その場からヴォルフとセレナードは高速で移動してすぐに近くに来た。

ヴォルフ「はぁぁぁぁぁ！！！！！」

エリオ「え！うわぁぁぁぁぁ！！！」

突如の奇襲でヴォルフはエリオに蹴りを放ち、吹き飛ばした。セレナードはその隙にリインに二重のバインドとクリスタルゲージで拘束した。

リイン「しまったです。それにこの拘束はかなり強力で出られないですよ」

ギンガ・キャロ・ティアナ・スバルは一瞬の出来事に反応できずにいた

ヴィータ「このやろぉぉぉ！！！」

ヴィータはカートリッジをロードしギガントフォームにしてヴォルフに攻撃するが当たる寸前に柄の部分を蹴られてハンマーの軌道をそらされて大きな隙を作ってしまう。

ヴィータ「しまっ！！！」

ヴォルフ「はぁぁぁぁぁ・・・・っはぁ！！！」

ヴォルフはヴィータの顎を蹴り上げて脳を揺らし、体を一瞬麻痺させ反応を鈍くさせる。さらにそこから体を一回転させ回し蹴りを放ち、ビルのほうへ吹っ飛ばした。

スバル「ヴィータ副隊長！！！！！」

ティアナ「くっ！！やっぱり強い！！！」

ギンガ「なんなのあの二人は！！ティアナあの二人を知ってるの！」

ティアナ「知ってますよ、貨車のレリックを回収しに行ったときに戦闘をしています。スバルと二人がかりでもあの小さい方に返り討ちにされました。」

ギンガは絶句していた。あんな小さいのにティアナとスバルが手も足も出ずにやられたと教えられたからだ。

そして四人対二人の戦闘を開始した。

次はアインｓｉｄｅへ

第三十二話

アインｓｉｄｅ

今私はクアットロと合流したあとディエチとも合流しビルの上にいる。

クアットロ「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

ディエチ「ああ、遮蔽物もないし空気も澄んでる。よく見える」

アイン「聖王の器の少女は砲撃を受けても大丈夫なのか？」

クアットロ「ええ、ドクターとウーノ姉様の言うとおりなら本物な

ら砲撃を受けてもおそらく大丈夫ですわ」

アイン「おそらく、カイザーもその少女の場所を掴んでいるだろう。ディエチ、思いっきりやっても問題ないと思うぞ。」

ディエチはそっかっと言うような顔をして手に持っている物の布を取り去って巨大な銃が姿を現した。そして銃をヘリに向け標準を定めチャージを開始する

ロングアーチｓｉｄｅ

シャーリー「市街地にエネルギーは反応・・・大きい！」

ルキノ「そんな！！・・・まさか！！！」

シャーリー「砲撃のチャージ確認、砲撃レベル推定Ｓランク」

視点戻って

もうすぐチャージが完了するが向こうから魔導師二人が拘束で接近しているようだが間に合うかぎりぎりのようだな。アインがそんなことを思っているとチャージが完了したようだ

ディエチ「Ｉｎｆｌｕｅｎｔ　ｓｋｉｌｌ・・Ｈｅａｖｙ　Ｂａｒｒｅｌ発動」

ディエチがカウントダウンを開始する

ディエチ「あと１２秒・・１０・・９・・８・・７・・・・・・・・・・・・・発射」

発射する少し前

四人対二人での戦闘の結果、セレナードとヴォルフは勝利していたが少し油断していたのか、手傷を少し負っていた。今、目の前にはスバル・ティアナ・ギンガ・キャロそしてヴィータとエリオが戻ってきていた。リインはまだ捕まったままだ。

セレナード「ヴィータ、貴方は私たちばかり構っていていいんですか。」

ヴィータ「どういうことだ！」

セレナード「貴方はまた守れないですよ・・・ふふふふふ」

ヴィータはまた守れない、その言葉に異常に反応しすぐにヘリの方に目をやる。

セレナード「もう遅いですよ」

そう言った瞬間、ディエチの砲撃がヘリに向け発射されて直撃した。
ロングアーチから連絡が入り詳細がわからないとヴィータ達に通達される

エリオ「そんな・・・」

ティアナ「ヴァイス陸曹とシャマル先生が・・・」

ヴィータ「てんめぇぇぇ!!!」

ヴィータが近くにいたルーテシアに掴み掛かる

スバル「副隊長、落ちついて」

ヴィータ「うるせぇ！おい！仲間がいんのか、どこに居る。言え！！」

セレナード「そんなのあたり前じゃない。私たちがここにいる時点で他にもいるに決まってるじゃない。（セイン、ちょうどいいところに来たわね。ルーテシアを連れて行って）」

ギンガの後ろに手だけを出しているセインを見つけたので念話をした

セイン「（了解、ルーお嬢様にはあたしから知らせるね）」

念話を終了し、ルーテシアの方を見ると目を瞑っていた。ギンガがセインを見つけて皆が混乱しているなかでセインがルーテシアを捕まえてＩＳのＤｅｅｐ　ｄｉｖｅｒで地面に潜りその場を離脱した。

ヴィータ「クソ！！」

セレナード「残念でしたね、逃げられて私たちもそろそろ帰らせてもらいます。」

ティアナ「待ちなさい！！！」

ティアナの言葉を無視してセレナードとヴォルフはジャンプしてビルを飛び越えあっという間に見えないようになっていた。

アインｓｉｄｅ

ディエチの砲撃がヘリに直撃したと思ったがこの反応は高町が間に合ったようだな。

クアットロ「うっふっふ、どうこの完璧な作・戦」

ディエチ「黙って今確認してるから」

アイン「クアットロ、ディエチ。どうやら防がれたようだ、当たる直前に高町が来たようだ。

クアットロ「嘘！間に合ったの！！」

ディエチ「確かにヘリは無傷、その前には高町なのはがいる」

どうやら限定解除されたようだな、魔力が一気に上がった。ん・・これはそう言うことか。

アイン「二人とも私の所に来い！」

クアットロ「え？」

ディエチ「どうして？」

アイン「いいから早く！！」

二人はアインが真剣な表情をしていたので言葉の通り従った

アイン「・・・盾」

と呟き上からくる金色の魔力弾をすべて防いだ。

フェイト「見つけた！」

アイン「ふ・・・テスタロッサか、どうやら高町も来たようだな」

そしてなのはもこちらにやってきた

フェイト「市街地での危険魔法使用および殺人未遂で貴方達を逮捕します」

アイン「（クアットロ、ＩＳはいつでも使えるか？）」

クアットロ「（はい、いつでも発動できますけど）」

アイン「（もうすぐ、必ず隙ができる。そのときに一緒にここを退

散するぞ、どうやらカイザーがチェックをかけたようだ）」

クアットロ「カイザーちゃんが？わかりましたよ～）」

念話を終えいつでも発動できるようにしてもらう。

アイン「ふふふふふ・・・」

突然アインが笑い出す。これは予定外なのかクアットロでさえもびっくりしていた

なのは「何がおかしいんですか！リインフォースさん！！」

アイン「お前達は不用心だな、ヘリから離れるなど」

フェイト「どういうことですか！！」

アイン「おかしいと思わないか？私たちがお前達に追い詰められても焦っていないのが。それにセレナードとヴォルフは六課のＦＷ陣、私は今お前達の前にいる。さてカイザーはどこにいるのだろうな」

フェイト「・・・っっっっ！！」

なのは「まさか！！！」

そのときヘリの方から爆音響き煙を出して落ちていく光景が目に入

った

なのは「そんな・・・」

フェイト「なんてことを！！」

アイン「ではさらばだ」

フェイトはアイン達に攻撃しようとするが忽然と消えるフェイトはまだ近くにいるはずとはやてに連絡をいれる

はやて「位置確認、詠唱完了、あと発動まで四秒・・・」

フェイト「了解」

フェイトはその場を離脱するがクアットロとディエチはどうしてと首を傾げる

アイン「どうやら広域空間攻撃魔法のようだな。私が押さえようお前達は早く脱出してくれ、気をつけて行けよ」

アインははやての元に向かって行く

クアットロ「そんなアイン姉様・・・」

ディエチ「言われたようにしよう、やられるはず無いよ。カイザー兄様の次に強いんだから」

二人もその場を離脱した

アイン「さてどうするか、はやては限定解除しているようだな。リミッター付きの私ではきついな（カイザー、聞こえるか）」

カイザー「（聞こえますよ、僕は標的を無事に確保しました。どうしました？）」

アイン「（今はやてを相手にしようとしているのだが、リミッター付きでは厳しいと思ってな解除してもらっていいか）」

カイザー「（わかりました。アイン、リミッター解除許可します）」

するとアインの魔力がＡＡＡからＳＳＳオーバーになった

はやて「なんや、大きい魔力がいきなり出てきた。今は攻撃や・・・
ディアボリック・エミッション！！」

アイン「そうはいかない！相殺させてもらう！！・・・ディアボリ
ック・エミッション！！」

お互いの技がぶつかりはやての魔法はアインによって相殺された。
それに気づき、なのはとフェイトがはやてに合流した

はやて「あれは私と同じ魔法と言うことはさっきの魔力反応はリイ
ンフォースやったんか」

なのは「はやてちゃん！」

フェイト「はやて！！」

これで実質3対1になったがアインは不安になるどころか、余裕を持っている

アイン「久しぶりに会いましたね、はやて」

はやて「そうやね、その魔力は？管理人格の時はそんなになかったはずや」

アイン「そうだろうな、私も体が成長しているからリンカーコアが育ったのだろう。私の体は人と同じだからな」

なのは「それって、あなたはプログラムなんかじゃなくて人間って

こと？」

アイン「そうだ、私は人間として蘇生させられたからな。カイザーには感謝しても仕切れない。カイザーは標的を回収したし、私としてはそろそろ帰りたいのだが、」

なのは、フェイト、はやては戦闘態勢に入る。

はやて「そうはいかへんで、いろいろ聞きたいことがあるから捕まってもらうで」

なのは「お話を聞かせてもらうの！」

フェイト「3対1ならかなり厳しいでしょ、だから確実に捕まえる」

アイン「私はカイザーのためにも捕まる訳にはいかない！！」

アインＶＳなのは・フェイト・はやての戦闘を開始した

第三十三話

アインが戦闘を開始する少し前

カイザーは聖王の器の少女をジェイルに届けたあと、セイン達が持ってきたレリックのケースを見て中に反応が無いことに気づいた。

カイザー「ふ～ん、セレナードにどういう状況かだけを聞きましたが、どうやらあのときに中身だけを封印して持ち出したみたいですね。と言うことは持っているのはＦＷ陣ですか、それとアインがフェイトとなのはとはやてに囲まれてますね、もうすぐ、戦闘を開始しそうなので急がないといくらリミッター解除をしているとはいえアインには３対１は不利ですからね」

その場に魔法陣を展開させＦＷ陣の元に向かった

機動六課ｓｉｄｅ

ヴィータははやてと通信をして詳細を報告していた

スバル「あのヴィータ副隊長・・・」

スバルが声をかけるがアイゼンを向けられて黙り、ヴィータは報告の続きをする。

ティアナ「副隊長～あの・・・」

ヴィータ「何だよ!!報告中だぞ!」

ティアナ「いや、あの、ずっと緊迫してたんで切り出すタイミングが無かったんですけど・・」

スバル「レリックには私たちで一工夫してまして、」

ティアナ達がヴィータとリインにどうしたかを報告していく

ティアナ「ケースはシルエットではなく本物でした。あたしのシルエットって衝撃には弱いんで取られた時点でばれちゃいますから」

キャロ「なので、ケースを開封してレリック本体に直接厳重封印をかけて」

スバル「その中身は・・・」

そう言ってキャロの防止を取るとそこには花があった

ヴィータ「ん？・・」

ティアナ「こんな感じで」

と言って指をパチンと鳴らすとその花がレリックに変わる

エリオ「敵との直接接触が一番少ないキャロに持っててもらおうって」

リイン「なるほど！！～」

その光景をビルの上からシグナムとシャッハが見ていた。そのときロングアーチからヴィータ達に慌てた声を荒げたシャーリーからの通信が入る

シャーリー「大変です、ヴィータ副隊長！！」

ヴィータ「どうした？そんなに慌てて」

シャーリー「今、そこに転移反応があります。ランクはSです！！来ます！！！」

シャーリーがそう言った時、ヴィータ達の目の前に銀色の魔法陣が展開される。

スバル「え！何？・・・」

キャロ「これは転移魔法陣！」

ティアナ「しかもこの銀色は！！・・・」

ヴィータ「あいつしかいねぇ！！！来るぞ！気をつけろ」

そしてその魔法陣からカイザーが姿を現した。カイザーは周りを見渡しキャロの頭の上を見て、ニヤリと笑った

カイザー「やはり、あなた方が細工をしていましたか。ケースの中に反応が無いのでまさかとは思いましたが思った通りでしたね。ではそのレリックを渡してもらいます。」

ヴィータ「うるせぇ！！お前なんかに誰が渡すか！！！」

そして全員が戦闘態勢を取る

カイザー「セレナードとヴォルフに勝てなかった貴方達が僕に勝てると思ってるんですか？それにまだ先ほどの戦闘のダメージがある

のでしょう?まぁセレナードにはリミッターが付いていますけどね」

ティアナ「あの強さでリミッター付きだって言うの!!!じゃあリミッターを外したらいったい」

カイザー「そうですね、リミッターを外せば魔力量がＳＳで総合ランクＳＳ＋になりますね。」

その言葉を聞き全員の顔色が悪くなっていく

カイザー「こちらも時間がありませんので、レリックをすぐに回収させてもらいます。」

そしてカイザーは一直線にキャロに向かって突っ込んで行く。それをスバルとギンガがプロテクッションを張り防御しようとする。

カイザー「そんなものは無意味です。・・・バリアブレイク！！」

左手に力を込めそのままスバルのプロテクションを殴りつけ破壊し吹っ飛ばして、ギンガにはプロテクションの上から蹴りを放ち、十メートルほど後退した。

スバル「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ギンガ「っくぅぅぅ！・・・」

二人を突破したあともそのまま突き進むがティアナが魔力弾で牽制し、エリオが横から攻撃を仕掛けてくる。カイザーはプロテクションを張りそれを難なく防御する。そしブラックフォースを上に向ける。

カイザー「シルバーレイン!!」

カイザーが上空に向けて砲撃を放ち、そこから雨のように魔力弾が降り注ぐ。これで詰めです、ほとんどの人は防御をするだろうから動けないでしょう。その間にキャロの持つレリックを回収させていただきます。

そして防御をしている隙にキャロの頭の上にあるレリックを回収した

キャロ「っあ!!」

カイザー「確かにレリックはいただきました。僕は急ぎますので」

その場を去ろうとしたカイザーだが不意に後ろに気配を感じ後ろに向かって杖を振った。するとガキンという音がしてシグナムの剣を受け止めた。

シグナム「っく！やはり気づかれたか」

カイザー「甘いですね、僕に奇襲を成功させたいならもっと気配を消すことですね。僕は早く行かなければならないんです。そこをどいてください。」

シグナム「そうはいかん！お前をここで捕まえさせてもらう。」

シグナムは剣を構え、もう一人はトンファーを構えるがカイザーはそんな二人を無視して上空に上がって行く

シャッハ「待ちなさい」

カイザー「僕は急いでいるんです、これで決めます。シルバーエクスプロージョン！！！」

カイザーが巨大な魔力の塊を上空で作り、それを爆発させヴィータ達に迫る。

ヴィータ「あれは!!マズイ、全員防御しろ!!!」

スバル「どうしたんですか?そんなに慌てて」

スバルにはどうしてヴィータが焦っているのかがわからなかったがリインが説明をした。

リイン「あの攻撃は広域撲滅魔法ですよ!!防御しなかったらババーンって吹っ飛ばされちゃうですよ!」

スバル「ええ～!マジですか!!」

全員がプロテクションを展開し爆発の衝撃に備えたが予想以上に衝撃が強くFW陣とギンガ、リインのプロテクションが破壊され衝撃で気絶してしまった。シグナム、シャッハ、ヴィータはなんとか防いだがヴィータはすでにふらふらで今にも倒れそうだ。

カイザーはその光景をみて追ってこれないだろうとそのままアイン

の元に向かった。シグナム達は

シグナム「クソ！何というやつだ」

シャッハ「っう！すごい攻撃ですね。まともに当たったらどうなるか」

ヴィータ「はぁ・・はぁ・・・はぁ、く・・・そ・・・」

そう言いヴィータが倒れて気を失ってしまった。シグナム達は急いで連絡して救急班を呼び寄せた

アインＶＳなのは・フェイト・はやて

こちらはなかなか均衡が崩れずにいた。

アインは今は防御だけをかためていた。なぜなら3対1なので一人に攻撃しようとするとその隙にあとの二人に攻撃をされてしまうのだ。

アイン「これでは埒があかない。どうするべきか」

アインはいい方法が無いか防御を続けながら考えている。なのはたちもアインの防御が壊せなくて困っていた。

なのは「フェイトちゃん、はやてちゃん、あの防御は相当硬いよ。普通の攻撃じゃ壊せそうに無いよ」

フェイト「うん、そうみたいだね。さっきから攻撃してるけど、びくともしないよ。」

と言っていたときヴィータ達のいる地点で巨大な魔法が発動されて、こちらにまで衝撃が来ていた。

はやて「うわぁぁ！なんやいったい！」

なのは「はやてちゃん！今の魔法の発動地点はヴィータちゃん達のいたところだよ！！」

はやて「なんやて！！・・・・今シグナムから連絡が来たわ。」

連絡が来たというはやての声はとても暗かった

フェイト「なんて連絡が来たの？」

はやて「いきなりカイザー君が現れて、レリックを回収されて広域撲滅魔法でＦＷ陣とギンガ、ヴィータとリインが気を失って、シグナムとシャッハもダメージを大きいそうや。それで今こちらに向かっとるそうや」

フェイト「そんな、キャロ達が・・・」

なのは「フェイトちゃん・・・・・」

二人も暗い感じの雰囲気になっていたがすぐに気持ちを切り替えた。
そのとき各デバイスが警告を促しプロテクションを展開する。

なのは「レイジングハート？」

はやて「なんやいきなり？」

フェイト「・・・まさか！！」

なのはとはやてはどうしてプロテクションを展開したのかわからなかったがフェイトだけはこの感覚を一度体験していた。なのは達に教えようとしたがすでに遅かった

なのは「フェイトちゃんどうし・・・っ！！」

なのはに突如衝撃が来てプロテクションにも若干罅が入っていた。
はやてにも同じようなことが起こっていた。

フェイト「カイザー！いったいどこから」

フェイトは周りを見渡すがどこにもカイザーが見あたらないと思ったがアインの方向見たときにカイザーが笑顔で手を振っているのを見つけた

カイザー「フェイト、貴方はまだこの攻撃が見切れていないようですね。アインとも無事に合流することができましたが、少しだけ相手をしましょう。アインはどうしますか？」

アイン「私もやろう。先ほどはずっと守りに徹するしか無かったからな」

カイザー「これで3対2にですね。さぁ、始めましょうか」

二人も戦闘態勢に入る。そしてカイザーが先制攻撃とばかりに三人に攻撃を仕掛ける。

カイザー「ファントムミラージュ！」

自分の後ろに3個の魔法陣を展開する。そして発射の寸前に幻術魔法を発動させ発射と同時に砲撃の幻術を相手に見せる。そして三人に砲撃が向かって行く。

なのは「来るよ！二人とも」

フェイト「うん！」

はやて「まかせとき！」

三人は散り避けるがはやてが遅れてしまい目の前に砲撃が迫りプロテクションで守りを固めるが砲撃がすり抜ける。

はやて「・・・はぁ？」

ととぼけているとアインのブラッディダガーに囲まれ身動きがとれなくなってしまう。

アイン「はやて、これで詰めです。ブラッディダガー！」

そしてはやてを囲むナイフが数倍に増え、はやてに向かって発射される。はやてもプロテクションで耐えるが徐々に罅が入っていき、ついに破壊され残りのすべてがはやてに直撃し、はやてが落下していた。

なのは「はやてちゃん！！！」

フェイト「はやて！！！」

二人は急いではやての元に向かおうとするが銀色の砲撃によって妨害される。

カイザー「行かせませんよ。行くなら僕を倒すことですね」

フェイト「っく！！」

なのは「早く行かないとはやてちゃんが！！」

なのはとフェイトは急いで僕を倒そうとしていますがそんなに焦っていては当たるものも僕には当たりませんよ。

フェイト「トライデント・・・スマッシャー！！！」

なのは「エクセリオン・・・バスター！！！」

二人がカイザーを挟むように両サイドから砲撃を放つ。カイザーは両手をそれぞれの砲撃に手を向け、魔法陣を展開する。

カイザー「これではまだやられませんよ。」

そう言いその魔法陣にそれぞれの砲撃を吸収する。

なのは「嘘！砲撃が吸収されちゃったの！！」

フェイト「いったいどうなってるの！！」

二人も自分の砲撃がカイザーに吸収されたことが信じられないようだ。カイザーはその魔法陣に自分の魔力を上乗せする。

カイザー「さぁこれでチェックメイトです。ロックバスター！！」

フェイトとなのはに向かって放たれる。二人の魔力を上乗せしたおかげでＡＡＡの威力がＳランクまであがっている。それを二人は平

然と避ける。

フェイト「そんなまっすぐな砲撃じゃ私たちには当たらないよ！」

なのは「そうだよ。これでも伊達に教導はしてないんだから・・・何がおかしいの？」

カイザー「あはは、すみませんね。僕がそんな単純な砲撃でチェックメイトと言うと思いますか？」

フェイト「どういうこと？」

カイザー「もう遅いですよ」

カイザーは振り返ってアインの元に向かって行く。そのときフェイトとなのはは後ろからものすごい衝撃を襲った。二人も撃墜された。

フェイト「まさか・・・さっきの砲撃が・・・後ろから」

なのは「どうしてなの・・・・・カイザー君・・・」

二人はそう言って意識を失った。カイザーは一応二人をビルの上に移動させてからアインの元に向かったようだ。

アイン「カイザー、お前は相変わらず優しいのだな」

カイザー「さて、何のことやら。さあ、帰りましょう」

二人は転移魔法陣を展開し、帰っていった。

第三十四話

アジトに帰った二人を待ち受けていたのは大きな泣き声だった

カイザー「何ですか？この泣き声は」

アイン「おそらく、お前が連れてきた子供だろ」

カイザー「そう、じゃあそこへ行きましょうか」

そしてカイザーとアインはその泣き声のするほうに向かって歩いていった

？？？「うわぁぁぁぁぁぁん！」

カイザーたちがリビングに入ると、泣き叫ぶ少女に戸惑いまくるナンバーズたちの姿があった。カイザーとアインを見た瞬間、ナンバーズ達が助けてくれと言わんばかりに近づいてきた。

チンク「カイザー！助けてくれ、私たちではどうにもできん！」

ウェンディ「カイ兄！助けてっす！」

カイザー「仕方ありませんね」

カイザーはアインを連れて泣き叫ぶ少女の元に向かい、しゃがんで目線を合わせた

？？？「うぅ・・・ひっく・・だれ？」

カイザー「僕はカイザーと言います。こちらはアインです。」

アイン「私がアインだ」

カイザー「それで君の名前は？」

？？？「わたし・・・ヴィヴィオ」

カイザー「ヴィヴィオですか。いい名前ですね」

そして徐々に泣き止みつつあるヴィヴィオを見てナンバーズ達はさすがだな～と思ってたりする。カイザーがその場を去ろうとするとヴィヴィオにズボンの端を掴まれる。

ヴィヴィオ「もう行っちゃうの？・・・一人はさみしいの・・」

カイザー「そうですか・・・セレナード！いますか」

とセレナードはいないのかと呼ぶとセレナードが奥の方から飛んで来た

セレナード「ん～どうしたの？カイ～」

カイザー「ヴィヴィオと一緒に遊んでくれませんか」

セレナード「いいよ～、ヴィヴィオこんにちは～」

ヴィヴィオ「うわぁ～妖精さんだ～」

そしてヴィヴィオはセレナードと遊んでもう泣き止んで今は笑顔だ。
その姿を見て一安心した。そしてカイザーはその場を去りジェイル
の元に向かった。

カイザー「ジェイル、なんでヴィヴィオがあんな大泣きしてたんですか？」

ジェイル「それがだね、私が見に行って私の顔を見た瞬間に泣き出してしまったのだよ」

カイザー「あ～なんかわかる気がしますね。もっと笑顔でいてください、そうすれば泣かないと思いますよ」

ジェイル「う、うむ。努力してみよう」

ジェイルは次からヴィヴィオが泣き出さないように努力しようと決意したようだ。

カイザー「では僕は休みます。ヴィヴィオをいじめたらダメですからね」

そう言い残して寝室に向かって行った。

機動六課ｓｉｄｅ

シャーリ視点

私はモニター越しに見ていた光景を信じられずにいた。管理局のエース・オブ・エースと言われているなのはさん、フェイトさん、そして八神部隊長が撃墜されたのだから。

シャーリー「そんなあの二人が落とされるなんて、あの人はいったい・・・」

そのあと三人は医療班に救助されて幸い怪我などはほとんど無かった、そして数日後何事もなかったように思えるほどに回復していた

今なのは達は聖王協会に向かっていた。その理由はこの機動六課を設立した理由を教えてもらうためだった。

コンコン

なのは「失礼いたします。高町なのは一等空尉であります。」

フェイト「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。」

二人は綺麗な敬礼をした

カリム「いらっしゃい。初めまして、聖王協会騎士団騎士カリム・

グラシアと申します。・・どうぞこちらへ」

カリムに案内された机にはクロノが座っていた

なのは「失礼します」

フェイト「クロノ提督少しお久しぶりです。」

クロノ「ああ、フェイト執務官」

その光景を見てカリムは笑っていた

カリム「うふふ、お二人ともそう固くならないで。私たちは個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ。」

クロノ「と騎士カリムがいっている。普段と同じで」

はやて「平気や」

なのは「じゃあクロノ君久しぶり」

フェイト「お兄ちゃん、久しぶり」

ここではやてが真剣な表情になり話し出す

はやて「さて、昨日の動きについてのまとめと改めて機動六課設立の裏表について、それから今後の話や」

そしてカーテンを閉めてクロノが話始める

クロノ「六課設立の表向きの理由はロストロギア・レリックの対策と独立性の高い少数部隊の実験例、この設立には僕と騎士カリム、そして僕とフェイトの母さん、三提督も認めてくれている」

それを聞いてなのはとフェイトは驚いていた。

カリム「その理由は私の能力と関係しています。私の能力Ｐｒｏｐｈｅｔｉｅ　Ｓｃｈｒｉｆｔｅｎ。これは最短で半年、最長で数年

先の未来、それを詩文形式で書き出した予言書の作成をすることができます。二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんからページの作成は年に一度しかできません」

カリムの周りには先ほどほどいた予言書が光り周りを回っている。
その二枚がフェイトとなのはの元へ行く

カリム「予言の中身も古代ベルカ語で解釈によっては意味の変わる難解な文章、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度。つまりはあまり便利な能力では無いんですが」

クロノ「聖王協会はもちろん次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかどうかは別にして有識者による予想情報としてな」

はやて「ちなみに地上部隊はこの占いがお嫌いや、実質のトップがこの手の占いやレアスキルがお嫌いやからな」

なのは「レジアス・ゲイズ中将だね」

クロノ「そんな騎士カリムの予言に数年前からある事件が書き出されている。」

そして一枚の紙がカリムの前で止まり、それをカリムは読み上げる

カリム「―旧い結晶と無限の欲望と黒衣の天才が交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる―」

なのは「・・・それって」

フェイト「・・・・まさか」

カリム「ロストロギアをきっかけに管理局地上本部の壊滅と、そして管理局システムの崩壊」

クロノ「それにしても、旧い結晶、無限の欲望、黒衣の天才かこれはいったい？」

はやて「たぶん、旧い結晶はレリックのことやと思うんやけど、この黒衣の天才って言うのは・・・」

はやてがそこまで言うと黙ってしまう

クロノ「どうしたんだ?」

フェイト「クロノ、この黒衣の天才って言うのはたぶん、カイザーのことだよ」

クロノ「カイザーだと!!!」

クロノは大声をあげと席を立ち上げる。カリムもそれにはびっくりする。

カリム「どうしたんですか！クロノ提督？」

クロノ「失礼、騎士カリム。この人物を知っていますか」

クロノはモニターにカイザーの映像を映して出す。

カリム「この人物は確かカイザー・アルベルトでしたか？・・・・まさか！」

クロノ「そうです。彼が敵に回ったんですよ。現にフェイト達も何度かレリックの回収現場で戦闘になっています。」

そう言ってクロノは苦い顔をする。それもそうだろう、カイザーの実力はクロノ自身が身をもって体験している。それだけやっかいなやつが敵にまわったのだから。

そしてはやて達は聖王協会を後にした。

はやて自室

はやては机に座り、昔のアルバムを見ていてグレアムの写真を見て手が止まった

はやて「グレアム叔父さん・・・あたしの命はグレアム叔父さんが育ててくれて・・・うちの子達が守ってくれて・・・なのはちゃん

達が救ってくれて・・・あの子が初代リインフォースが残してくれた命や」

席を立ち窓から夜景を眺める

はやて「今初代リインフォースはカイザー君に蘇生されて一緒におることを望んどる。でも戦わなかんのやな、覚悟を決めやなな。あたしはもうあんな悲しみや後悔なんてこの世界の誰にもあったらあかん。わたしの命はそのために使うんや」

そう胸に決意を秘めて夜が過ぎていった

第三十五話

公開意見陳述会当日

ナンバーズ達はすべて配置についていた。僕はちなみに自由に動くとジェイルには言ってあります。ヴォルフにはノーヴェに着いてもらっています。

カイザー「もうすぐ地上本部を攻撃するわけですが、どうせ強い人はあんまりいないんでしょうねっと言ってるうちに始まりましたか。ルーテシアがガジェットを遠隔召喚しましたね。」

さあ、僕は何をしましょうかね。僕もヴォルフのもとに行きましょう

カイザー「アイン、セレナード、僕はヴォルフを見てきます。セレナードは六課に行ってオットーの援護にアインは他の人たちをカバーしてあげてください。では」

そう言ってヴォルフの元に向かって行った

アイン「カイザーも仕方ないものだな、私たちも他に当たるぞ」

セレナード「りょうか～い」

アイン達も別の場所に向かった

地上本部

カイザー「さあ、ヴォルフはどこに居るんでしょう?まあ、進んでみましょう」

カイザーはどんどん奥に進んでいくとスバルが壁に吹っ飛ばされていた。ここにいそうですね。
ティアナ達も魔力弾に囲まれいるみたいですね

カイザー「ヴォルフ、ここに居たのですか。」

ヴォルフ「あ、主どうしたのですか!何かトラブルでも」

カイザー「いいえ、することが無いので来たのですよ。ノーヴェとウェンディも頑張っているみたいですね」

ノーヴェとウェンディの方を見ながら言った

ウェンディ「カイ兄～私頑張るからね」

ノーヴェ「ふん・・・」

ウェンディは元気に手を振ってくれたようだがノーヴェは顔をそらして不機嫌そうにしているがちらちらと目でカイザーを見ていた

カイザー「任務内容は覚えていますね」

ウェンディ「もちろんっす、捕獲対象を3人を生かして連れてくことっす」

カイザー「僕は極力手は出さないので」

ノーヴェ「わかってるよ」

そしてウェンディはエリオを狙うが素早く動いて攻撃を当てられない

ウェンディ「ちょこまかとっ」

ノーヴェがスバルと同じウイングロードみたいなものを使いその上を滑走しティアナに蹴りかかるがティアナが消えた

ウェンディ「幻影！・・うっそぉ～！」

ティアナとキャロは崩れた壁の隙間に隠れて幻術魔法を行使していた。

キャロ「（あともうちょっと！）」

ティアナ「（脱出タイミングができるまで頑張って！）」

まぁ頑張りますね、２人とも限界が近いはずですがそう言えばスバルとエリオはどこにいったいどこに？

ウェンディ「あたしらの目を騙すって、この幻術使い、あたしらの戦闘機人システムを知ってる？」

ノーヴェが足のローラを回転させ手の周りに魔力弾を形成する

ノーヴェ「幻術だが何だろうがようは潰せばいいんだろうが！！」

ノーヴェを後ろからスバルが加速し殴りかかる。ノーヴェもガードするがその上から吹っ飛ばされる。

ウェンディ「ノーヴェ！！・・・っ！」

後ろを振り向くとエリオがストラーダを今まさに振り下ろすところだった

エリオ「サンダー・・・レイジ！！！」

ウェンディも迎撃するがエリオに周りのガジェットを破壊され爆発が起きた。それをタイミングにティアナが声をあげる

ティアナ「撤退！、撤退～！」

そしてティアナ達は幻術を含めて四方向に撤退していった

ノーヴェ「この野郎～！！」

そこにヴォルフがやってきた

ヴォルフ「大丈夫か、ノーヴェ」

ノーヴェ「すまねえ、ヴォルフ」

ヴォルフ「気にするな」

ヴォルフはノーヴェを瓦礫から引っ張り出した。

ウェンディ「う・・・うぅ」

カイザー「ウェンディ大丈夫ですか？」

ウェンディ「ごめん、カイ兄逃げられちゃったっす」

カイザー「気にすることはありません。まだ完全に逃げられた訳では無いのですから」

そう言ってウェンディの頭を撫でてあげるとやはり顔が赤くなって俯いてしまった。そこにモニターが現れチンクからの通信が来た

チンク「ノーヴェ、ウェンディ、ちょっとこっちを手伝え、今もう一機のタイプゼロ、ファーストと戦闘をしている」

カイザー「チンク、僕とヴォルフもいますからそちらに一緒に向かいましょうか？」

チンク「カイザーとヴォルフか、それは心強い。頼む」

機動六課方面

機動六課は今火の海になっていた

セレナード「オットー、余裕ですか？」

オットー「セレナード、この分なら問題ないよ。」

セレナードはオットーとしゃべっているが下ではシャマルとザフィーラが息絶え絶えになっている

シャマル「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・」

ザフィーラ「はぁ・・はぁ・・はぁ・・はぁ・・」

2人はオットーとセレナードを見上げている

オットー「たった二人でよく守った、だけどもう終わり。僕のＩＳレイストームの前では抵抗は無意味だ」

右手を掲げそこから何本にかビームが別れ六課の建物を攻撃した。
シャマルは立ち上がり必死に守ろうとする

シャマル「クラールヴィント！防いで！！」

シャマルがオットーの攻撃を防ぎ、その間にザフィーラがガジェットの攻撃を回避しオットーに向かって行く

オットー「・・・ディード」

ディード「ＩＳツインブレズ」

２本のブレード状の武器をザフィーラに振りおろす

ザフィーラ「グアァァァァァ！！！！」

ザフィーラはその攻撃で地面に叩きつけられて、その衝撃でシャマルの守りが解かれ六課にオットーの攻撃が直撃し爆発する。

セレナード「二人ともファイトです～」

ディード「ありがとう」

オットー「さよなら」

シャマルとザフィーラに手を向け攻撃をした。そしてさらに被害が広がった。

地上本部地下

チンク「これでタイプゼロファーストは確保完了だな」

ギンガはチンク達との戦いで血を流してボロボロの状態で倒れていた。そこに調度スバルがやってきた。
そしてギンガの姿を見て目を見開き、目の色が戦闘機人モードの黄色に変わった

スバル「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

そしてスバルから膨大な魔力が漏れて周りにものすごい衝撃が来る。
マズイですね、今の状態ではノーヴェとウェンディでは太刀打ちできません。チンクでも厳しいですね。

スバル「返せ・・・・ギン姉を返せ！！！！」

スバルがこちらに向かってものすごい勢いで突っ込んできてノーヴェが魔力弾で迎撃するがそんな物無視して攻撃をしかける。ノーヴェはガードするがガードを武器ごと破壊する。

スバル「どけぇえええええ！！！！」

そして互いに空中で蹴り放ち、ぶつかり爆発が起こりお互いに吹っ飛ばされるがノーヴェはヴォルフに受け止められる

ヴォルフ「ノーヴェ大丈夫か！」

ノーヴェ「ヴォルフ・・・なんとかな。あいつのＩＳは接触兵器か！」

チンク「ノーヴェ、ウェンディ、あいつは姉が抑える。二人はここを離脱しろ！！」

カイザー「いえ、チンクここは僕とヴォルフが抑えます。三人とも行ってください」

ウェンディ「了解っす。行くっすよ、二人とも」

チンク「ウェンディ、お前！」

ウェンディ「カイ兄はあんなやつに絶対負けないっす。だから行くんっすよ」

二人は頷きウェンディのボードに乗ってこの場を離脱して行った

カイザー「ヴォルフ、今回は久しぶりに僕が肉弾戦をしましょう。」

ヴォルフ「了解しました主」

そしてカイザーはスバルの状態を冷静に分析する。今は暴走してあの状態になっているようですね、とにかく久しぶりの肉弾戦です。張り切っていきましょう

スバル「邪魔すんなー！！！！！！！！！」

スバルが何も考えずに突っ込んでくる。

カイザー「ブラックフォース、防御です」

ブラック「ＯＫ・・・Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

プロテクションを展開し、スバルの攻撃を受け止める。このレベルなら先ほどノーヴェが防御を武器ごと破壊されたのも納得ですね、僕には届きませんよ、この程度ではね。

カイザー「この程度では僕を倒して先には行けませんよ。スバル」

スバル「黙れ！！！ギン姉を返せ！！！！」

スバルの攻撃はさらに激しくなるがカイザーのプロテクションは罅一つ入らない。そしてカイザーが攻撃を開始する。

カイザー「僕も攻めさせてもらいましょう。・・・瞬動！」

スバル「消えた！！どこに！」

カイザーが瞬動を使ったことによりスバルはカイザーを見失う。カイザーは一瞬で後ろに回り込みスバルの背中に蹴りを放ち壁に吹っ飛ばした。

カイザー「今のが反応できなければ少なくとも僕には絶対に勝てませんよ」

スバルが吹き飛ばされたほうを見ながらそう言い放った。スバルは立ち上がりこちらに向かってくるがそこにカイザーが追い打ちをかける

カイザー「貴方には寝ていてもらいましょう」

一気に間合いを詰めてスバルの顎に向かって蹴りを放ち直撃させる。

スバル「っっうぅ！！・・・」

そしてさらにそこからスバルに回し蹴りを放ち、入ってきた入り口の方に吹き飛ばした。

スバル「ギン・・・姉・・・を・・・・返・・・・せ・・・」

そこで意識を失い、後ろからなのはとティアナがやってきた。

ティアナ「スバル！！！」

なのは「大丈夫、気を失ってるだけだよ。」

ティアナはなのはの言葉を聞いて安心する。そしてカイザー達のほうを向く

カイザー「手加減はしましたよ。姉が連れて行かれたことで暴走したみたいですけどね」

ティアナ「ギンガさんが！！」

カイザー「チンクとの戦いで敗れたようで連れて行かれましたよ。僕の用事は済みましたから別の所に行かせてもらいます。」

足下に魔法陣を発生させる

なのは「行かせると思うの？」

カイザー「貴方では無理ですよ、リミッターの付いた僕に勝てないんですから」

そう言い残して魔法陣が発動し転移した

ティアナ「なのはさん！今はスバルを！」

なのは「そうだね」

地上本部会議室

ここにはレジアス中将やはやて達も閉じ込められていた。そこに回線がつながりモニターが現れた

ジェイル「ミットチルダ地上の管理局員諸君、気に入ってくれたかい？ささやかながら、これは私からのプレゼントだ。治安維持だの、ロストロギア規制だのと言った名目の元に圧迫され、正しい技術の促進をしたにもかかわらず罪に問われた稀代の技術者達。今日のプレゼントはその怨みの一撃とでも思ってくれたまえ」

ジェイルは少し間を開けてまたしゃべりだした

ジェイル「しかし、私もまた人間を命を愛する者だ。無駄な血は流さぬよう努力はしたよ、可能な限り無血に人道的に忌むべき敵を一方的に制圧することのできる技術。それは十分に証明できたと思う。今日はここまでにしておくとしよう。このすばらしき力と技術が必要ならば、いつでも私宛に依頼をくれたまえ。格別の条件でお譲りする。んふ、あはははははは・・・」

カリム「予言は覆らなかった。」

はやて「まだや、機動六課は、私たちはまだ終わってない」

はやてはモニターで燃えている機動六課を見ながら言い放った。

第三十六話

ジェイルアジト

とりあえず六課の建物の破壊と地上本部の破壊が完了し一段落したところです。僕はと言うとヴィヴィオと一緒にいますよ

カイザー「ヴィヴィオ、ちゃんと描けてますか？」

ヴィヴィオ「うん！ちゃんとかけてるよ～・・・完成～！」

そして先ほどからヴィヴィオに僕の絵を描いてもらって、今完成したようです。

カイザー「どれどれ、なかなかうまく描けてるじゃないですか。偉いですよ～」

とヴィヴィオの頭をくすぐったそうにしている。

ヴィヴィオ「えへへ～くすぐったいよ～」

カイザー「じゃあヴィヴィオ、僕は仕事をしてきます。何かお土産を買ってきてあげますよ」

ヴィヴィオ「えっとね、じゃあかわいいお人形がいい！」

カイザー「わかりました。いい子にしててくださいね」

ヴィヴィオ「は～～い」

そしてカイザーはその場を去り培養槽に向かった

培養槽

培養槽に着くとそこにはクアットロ、セイン、ノーヴェ、ウェンディがいた。クアットロに至っては端末をいじっていた

ウェンディ「あ、カイ兄～」

セイン「カイザー兄～」

クアットロ「あら、カイザーちゃん」

ノーヴェ「カイザーか」

カイザー「どうしたんですか？こんな所で」

カイザーは四人に培養槽で何をしているのかが気になった

クアットロ「あの子、ゼロセカンドの情報を見ていたんですよ。あのＩＳ振動破砕は私たちの体内にある電子部品やフレームに対してものすごい威力が出るのね。もちろん、対人や対物に使ってもかなりの威力だろうけど」

カイザー「確かにそうですが、当たらなければ意味はありませんよ。戦いましたが僕にはどうってことありませんでしたよ」

ウェンディ「さすがっすね！カイ兄は」

カイザーは何かを思い出したようでノーヴェを見た

ノーヴェ「なに見てんだよ！」

カイザー「そう言えば、ノーヴェは右手に攻撃を当てられていませんでしたか？」

クアットロ「ええ、ノーヴェちゃんの右腕も結構な手術が必要なの」

カイザーはノーヴェの右腕を掴み、何か呪文を小声で詠唱を始めてノーヴェの右腕が光りみんな驚いたが、数分が光が収まるとノーヴェがさらに驚いた表情をしていた

そしてカイザーは何も言わずにその場を出て行った。

クアットロ「ノーヴェちゃん、どうしたの？」

ノーヴェ「・・・治ってる」

ウェンディ「何っすか？」

ノーヴェ「だから右腕の破損が元の状態に治ってるんだよ！！！」

セイン「ほんとに・・」

ウェンディ「やっぱり！カイ兄はすごいっす！！」

ウェンディは目をキラキラさせながらカイザーが出て行った方向を見ていた。ノーヴェは右手を開いたり閉じたりしていて、クアットロとセインは口をあけてびっくりしていた

カイザー「ジェイル、ギンガの様子はどうですか？」

ジェイル「タイプゼロファーストのことかい？それなら順調だよ」

カイザー「そうですか、そろそろヴィヴィオをゆりかごに連れていかなければなりませんね。軌道には痛みがあるでしょうからそこの改造は任せてください。」

ジェイル「では頼むよ」

それから一週間が経過し、ゆりかごの改造が完成した。

ゆりかご内部

僕はヴィヴィオを連れてジェイルとウーノとアインとでゆりかごの玉座に来ていた

カイザー「ヴィヴィオ、少し痛いかも知れないけど我慢できる」

ヴィヴィオ「お兄ちゃんのために頑張る」

そしてヴィヴィオに玉座に座ってもらってゆりかごを起動した。

カイザー「ヴィヴィオ、痛く無かったかい？」

ヴィヴィオ「うん！何にも痛く無かったよ！」

カイザー「じゃあ、僕はお仕事をしてくるからちゃんと座っててね」

そう言いながら頭を撫でてあげ、プレゼントを渡した

カイザー「ヴィヴィオ、遅くなったけどプレゼントだよ」

ヴィヴィオ「ウサギさんだ～！！ありがとう」

とても大事そうに抱きしめてくれていた。よかったです、いやだと言われたらどうしようかと思いました。ジェイル達とアイコンタク

トしてその場を去って言った

ジェイル「アインヘリアル三機と周辺の制圧は完了したよ。これから始まる、楽しい夢の始まりだ～」

カイザー「そうですね、僕は外に出るであろう部隊でも潰してきましょうかね」

アイン「私も行こう、あと二人も呼んでおくぞ」

カイザーは頷き、ジェイルのいろいろ確認していく

ジェイル「では、外は任せるよ。」

カイザー「まぁ、大丈夫だとは思うんですけど気をつけてくださいね。二人とも」

ジェイルとウーノは頷いて奥に進んでいった。そして突然アラートが鳴り響く。

カイザー「侵入者ですか、早いですね。ここが見つかるとは僕が出ましょう、アインは二人を呼んでおいてください」

アイン「わかった。気をつけろよ」

カイザー「はい、でも僕はやられませんよ」

そう言って侵入者の反応があったほうに向かって行った。

カイザー「確かこの辺なんですがもしかして外ですか、音がしていますが。行ってみましょう」

ゆりかご外

外に出てみるとそこにはガジェットの残骸とシャッハとヴェロッサがいた

カイザー「貴方達ですか、侵入者というのは?」

シャッハ「貴方は!!!!!」

ヴェロッサは通信をしているようだ。

カイザー「面倒ですね、一撃で決めますか」

シャッハ「そうはいきません、先手必勝！！はぁぁぁぁ！！！」

シャッハはトンファーで全力の一撃を放つが僕はブラックフォースの２ｎｄフォルムで受け止めました。軽いですね、聖王協会の騎士はこの程度なのでしょうか？

シャッハ「なっ！」

シャッハは自分の全力の一撃をいとも簡単に受け止められたことに驚いているようだ。

カイザー「次はこちらの番です。・・・覇龍一閃!!!」

カイザーは自分の覇気を剣に纏わせとても思い一撃を放つ。シャッハはそれを受け止めるがトンファーに徐々に罅が入り始める。それを見て後方にジャンプして距離を置き、罅の入ったトンファーを見つめていた

カイザー「後退しましたか、賢明な判断ですね。そのまま受け止め続けていればそのトンファーが砕けていたでしょう。」

シャッハ「〜なんて重い一撃を放つのですか!!あのときは魔法だけでしたが剣の腕も一流じゃないですか!!〜」

シャッハはかなり焦っていた。魔法の腕だけで剣がダメなら接近戦で勝てると思っていたが剣の腕も一流なので勝てるのかと、思考に浸っているといつの間にかバインドをかけられて体が急に重くなり地面に膝をついてしまった

シャッハ「っっ！バインド！何ですか、このバインドは体が重い！！」

カイザー「残念でしたね、このグラビティバインドは体に数倍の重力がかかるので、動けないでしょう。次はあちらですね」

カイザーはヴェロッサの方に気づかれないように近づきいていく。

シャッハ「ヴェロッサ！！！」

シャッハはヴェロッサに叫ぶが少し遅くカイザーの結界に閉じ込められた後だった。

カイザー「さぁ、捕まえましたよ。その結界は３０分は抜け出せませんからね。頑張ってくださいよ。ふふ・・」

そしてカイザーはヴェロッサの通信相手に話しかけるのだった

数分前アースラ

シャーリ「アコース査察官から直通連絡」

そしてシャーリーははやてに連絡を回した

ヴェロッサ「はやて、こちらヴェロッサ。スカリエッティのアジトを発見した。シャッハがガジェットをすべて迎撃し終えたところだ。協会騎士団から戦力を呼び寄せてるけど、そっちからも制圧戦力を送れるかい」

はやて「うん、もちろんやけど「ヴェロッサ！！」っ！」

はやてがヴェロッサと会話をしているとシャッハの声が聞こえるがヴェロッサが結界に捕らえられたところだった。

カイザー「一週間ぶりですか、八神はやてさん」

はやて「カイザー君！！」

シャーリー「あの人はなのはさんとフェイトさんを撃墜した人！！！」

シャーリーの言葉を聞いてそれを知らなかった人たちは驚く

はやて「シャッハはどうしたんや！」

カイザー「シャッハ？ああ！女の人ですか、それなら僕のバインドで地面に這いつくばっていますよ。ゆりかごは動き出しましたよ。早くしないと手遅れになりますよ。では、僕は他にも行かなければならないので」

そう言って通信が切れた。

はやて「マズイで、カイザー君が本気になったら私らが束になってもかなわへん・・」

はやては絶望を味わったような表情をしている。

シャーリー「どうしてかなわないんですか？いくら強いと言ってもＳランクなんですよね」

はやて「なのはちゃんに聞いたんやけど、カイザー君にはリミッターがかかっとるし、９歳の時にＳＳＳあったらしいんや」

シャーリー「９歳でＳＳＳって・・・」

そこからは会話は続かず沈黙が続いていた。戦闘の火ぶたが切って落とされた。

第三十七話

ゆりかごが上昇し始めて少し時間が経ち、ウェンディ、ノーヴェ、ディード、オットー以外が迎撃の配置についた

カイザー「ジェイル～、どうしますか？ゆりかごの外に隊長陣と魔導師部隊が居ますけど」

ジェイル「好きにしてくれて構わないよ。」

カイザー「わかりました。そう言えばＮｏ．２は地上本部にいるんですよね？」

ジェイル「そうだよ。それがどうかしたかい？」

カイザー「一応確認しておこうかと」

ジェイルとの通信を終え、カイザーは自分の横に魔法陣を発生させ、前回よりも完成度の高い自分の分身を作り出した。

カイザー「地上本部に行って警戒をしておいてください。頼みますよ」

カイザー（分）「任せてください。じゃあ、行きます」

そして足下に魔法陣を発生させ地上本部へ転移していった。

カイザー「セレナード、アイン、ヴォルフ、居ますか」

セレナード「居るよ～」

アイン「どうした？」

ヴォルフ「どうなされたので、主」

カイザー「セレナード、ウェンディ達の方を見に行ってくれませんか。暴れても構いませんよ、たぶん僕が覇龍召喚でそちらにトルムを送るかも知れませんけど、ヴォルフは地上の戦闘地域の上空で待機して緊急時に備えてください」

セレナード「了解～頑張ってくるね」

ヴォルフ「行って参ります」

僕はセレナードの頭を撫でて頑張ってと言い転移するのを見送った。

カイザー「さぁ、外の人たちを少し掃除しますね。気絶してもらうだけですが、行きます・・・遠隔召喚・・・氷龍ベリオ召喚」

ゆりかご外

はやて達は外のガジェット達を確実に破壊していった。そのとき突如隊員が連絡をしてきた。

隊員「や、八神二佐！」

はやて「どうしたんや！」

隊員「目の前に巨大な魔法陣が現れました！！」

そしてはやては隊員の言っていた魔法陣があるところまで見に行った。それを見たはやては大声で叫んだ。

はやて「これは！！！あかん、早くこの場を離れなかん！！これはカイザー君の召喚魔法陣や！！！」

はやてがそう叫んだ瞬間、魔法陣から莫大な冷気が溢れ出しそこから巨大な龍が現れる

ベリオ「ガアァァァァァァ！！！！！！！！」

ベリオも咆吼で大気が揺れ、魔導師達が空中でバランスを保てなくなり、武器などを落としそうになる

隊員「何ですか！！あれ、」

はやて「あれは前のと種類が違う！二匹目の龍！！相変わらずなんてもん召喚するんや！！！」

そう言っているうちにベリオは魔導師を攻撃して次々と落としていく

はやて「私が攻撃してみる・・・ブラッディダガー！！」

はやてはベリオに向かってブラッディダガーを放つが尻尾で弾き飛ばされ、今度ははやてに向かい氷の塊を放つ反撃をする。

はやて「うわぁぁ！！危なかった」

はやてはぎりぎりで回避し、汗を拭った。はやて達がベリオを相手している間になのはとヴィータがゆりかごの侵入に成功した。僕がヴィヴィオの所にアインは駆動炉の所に居る。

セレナードｓｉｄｅ

私は今ノーヴェとウェンディの所にやってきました。今はティアナさんと戦闘をしているです～。

セレナード「ウェンディ、苦戦しているようですね。」

ウェンディ「せ、セレナード！こんな所になんでいるっすか！！」

セレナード「カイが心配だから見に行ってくれだって～」

ノーヴェ「余計なことを・・・っ！」

セレナード「カイのことを悪く言うのは私が許さないわよ・・・」

セレナードはアウトフレームで大きくなりノーヴェの首を持ち、持ち上げた。ノーヴェは苦しそうにもがいているがセレナードの手を

外すことができなかった

セレナード「わかったなら首を縦に振りなさい」

そしてノーヴェはコクコクと首を縦に振り、それを見たセレナードは満足そうな顔をしてノーヴェを離した

ノーヴェ「ゲホッ・・・ゲホッ・・・」

セレナード「助けてほしかったら言いなさい」

ウェンディ「わかったっす」

そしてティアナにノーヴェが攻撃をするが消えてしまう。

ウェンディ「また幻影っ！」

岩陰の向こうからオレンジ色の魔力弾が飛んでくるがウェンディは横に回避し。ノーヴェはそれを回避しながらティアナの幻影を解析し、本物を見つけて突進する

ノーヴェ「幻術バカのひとつ覚えが・・・見えてんだよ！！」

そして本物に向かって蹴りを放ちぶっ飛ばした。

ティアナ「っ！きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

そしてティアナに向かってウェンディが攻撃をするが反撃されウェンディがボードでガードした。ティアナは上に向かった。

ウェンディ「前より弾丸が鋭いっすね」

ノーヴェ「あんな豆鉄砲一発、二発どーってことねぇ」

ティアナが上に向かっていると上からディードが降下してきて攻撃を仕掛ける。ティアナは直撃はしなかったがあたってしまった。ディードの武器には血が付いていた。

ウェンディ「ディード！あんたも」

ディード「オットーからの指示。あの幻術使いは確実に仕留めておかないと面倒だって」

ティアナ「〜よりによって足をやられるなんて、それに戦闘機人三機にガジェット、あいつまで居るなんて。これは無理かな・・・〜」

そのときスバルが大丈夫だよとティアならきっとできるっと言う場面が頭をよぎった。まだやれると覚悟を決めたようだ。３対１ねぇ、普通なら無理かも知れないけどあの子は何かしでかしそうね。ふふふ。

ヴォルフｓｉｄｅ

我は今は上空で待機している。そのしたでルーテシアと二人の魔導師が戦闘をしているがルーテシアがクアットロと通信をしてからどうも要すがおかしい。そしてルーテシアが苦しそうにし、周りに召喚魔法陣が複数現れていた。

ヴォルフ「おかしい。主に少し聞かなければ独断ではできん。主、やりたいことがあるので許可がほしいのですが」

モニターを開きカイザーと通信をする

カイザー「どうしたんですか？なにかありましたか」

ヴォルフ「主、ルーテシアを見てください。少し様子がおかしいのです」

カイザー「あれは、操られていますね。いいですよ、許可を出しま

す。やることは予想がついていますのでやってください」

そしてカイザーはモニターを閉じて通信を終えたようだ。そしてヴォルフはルーテシアの元に向かった。

ルーテシア「インゼクト、地雷王、ガリュー、こいつら殺して，殺して！！！」

そしてガリューがエリオに攻撃しようとするが、ルーテシアの前にヴォルフが現れる。全員が驚く。

エリオ「貴方はあのときの！！！」

キャロ「レリックの時の！！」

ルーテシア「貴方も邪魔をするの・・・」

ヴォルフ「今の貴方は操られているようですので、止めさせていただきます。・・・六晶結界！！」

ヴォルフは六晶結界を発動し、ルーテシアをクリスタルに閉じ込め、魔法や念話を使えない状態にした。そしてインゼクトや地雷王、ガリューは消えていくがガリューは消える間際にヴォルフに向かって頭を下げていた

そしてヴォルフはルーテシアのクリスタルのしたに魔法陣を発生させ、転移させようとするがエリオに止められる

エリオ「待ってください！その子をどうするつもりですか！！」

ヴォルフ「主のところにつれていくのだが・・・」

キャロ「どうして犯罪者の協力をしている人の所に連れて行くんですか！」

ヴォルフ「ほぉ、お前達は主も犯罪者と言いたいのか？」

エリオ「でもやっていることは一緒です。その子を置いて行ってください」

そしてヴォルフに向けてエリオはストラーダを向ける。

ヴォルフ「お前達はなぜ管理局を主が潰そうとしているか知っているか？」

キャロ「知りませんけど・・・」

ヴォルフ「なら教えてやろう、管理局は人体実験や違法研究をしているから主は管理局を潰そうとしているのだ。」

エリオ「そんなの嘘だ!!管理局がそんなこと・・・」

ヴォルフ「信じようが信じまいがお前達の自由だ。ルーテシアは主のもとに送らせてもらう」

ヴォルフはクリスタルのしたの魔法陣を発動させ、カイザーの元に送った。

エリオ「しまった！！」

キャロ「ルーちゃん！」

二人はしまったという顔をして悔しそうにしていた。エリオはすぐに立ち直りヴォルフに言い放つ

エリオ「貴方を捕まえて事情は聞かせてもらいます。」

ヴォルフ「我の相手をしている暇があるのか」

エリオ「どういう意味ですか」

ヴォルフ「お前達の後ろを見てみろ」

とエリオとキャロの後ろを指さし、二人は振り向くとそこには銀色の魔法陣が展開されていた。

エリオ「お、大きい！」

キャロ「これは召喚魔法陣！！」

そして魔法陣から徐々に姿を表し始める。キャロは自分と同じ龍召喚だと気づくがそのサイズにびっくりしてしまっていた。そして覇龍トルムが姿を現した。大きさはとてつもなく大きかった。

ヴォルフ「そこの召喚士はこの龍がなんなのか聞いたことがあるんじゃないか。お前の龍はこの姿を見て頭を下げているようだぞ。」

キャロ「フリード!!じゃあ，この龍はまさか!!!龍の頂点の覇龍・・・」

そしてキャロはその場に座り込んでしまった。エリオがキャロに近づくがキャロは震えているようだ。

エリオ「キャロ、どうしちゃったの!」

キャロ「エリオ君・・・勝てないよ・・・この龍には・・・・たとえヴォルテールを出したとしても・・・」

そしてキャロは黙り込んでしまった。エリオも何も言うこともできず、トルムを見ていた。

ヴォルフ「どうするのだ?戦うのか」

エリオ「僕達は降参します」

ヴォルフ「一応軽いバインドだけかけさせてもらうぞ」

エリオ「・・・はい」

そして二人を軽いバインドで拘束した後、ヴォルフはトルムに民間人には被害を与えないようにと伝え、二人の元に帰ってきて話をしていた。

第三十八話

ゆりかご玉座の間

僕は今、ヴィヴィオと一緒にお菓子を食べています。ちなみにお菓子は僕の手作りですよ。あとでクアットロにはお仕置きが必要みたいですね。そんな思考に浸っているとこちらに向かって大きな魔力が近づいて来たと思うといきなりドアが爆破され、なのはが突入してきた

カイザー「ヴィヴィオ、大丈夫ですか？」

ヴィヴィオ「うん、何とも無いよ。」

カイザーとヴィヴィオがそのようなやりとりをしているとなのはがこちらに叫びかけてきた

なのは「カイザー君!!その子を解放して!」

カイザー「解放しても何もヴィヴィオは自分からここに居てくれるんですけど、何だったら本人に聞いてみればどうですか?」

なのは「それは本当なの?」

ヴィヴィオ「ほんとだよ。お兄ちゃんは優しいし、戦闘も教えてくれた、それでわからないことがあれば何でも教えてくれたよ」

なのははヴィヴィオの言葉に動揺した。自分はこの子が何も知らずに利用されているとばかり思い込んでいたからだ

なのは「でも、大規模騒乱罪の現行犯でカイザー君、貴方を逮捕します。すぐに騒乱の停止と武装の解除を」

カイザー「なのは、すでに一部は戦闘は終了していますよ。」

カイザーはモニターを出して、エリオとキャロがバインドで拘束されてヴォルフと会話をしている映像を出した

なのは「そんな、エリオとキャロが・・・」

カイザー「ちなみにこの二人は僕の契約龍を見て、戦闘せずに降参しましたよ。それとヴィヴィオの前で僕を犯罪者扱いしたのはまずかったですね。」

カイザーにそう言われてなのははヴィヴィオを見てみると、ヴィヴィオから虹色の魔力光が溢れ出していた

ヴィヴィオ「どうしてお兄ちゃんを悪く言うの？お兄ちゃんは管理局の違法研究所を潰していただけなのに」

なのは「えっ！それって・・・・」

カイザー「なのは、もう遅いですよ」

カイザーがそう言った瞬間ヴィヴィオは虹色の光に包まれて数十秒後、光が収まるとそこに大人の姿になり、戦闘の鎧を身につけたヴィヴィオが居た

カイザー「ヴィヴィオ、アインに負けないくらい美人になりましたね」

まだ身長がカイザーの方が高いので頭を撫でてあげると、ヴィヴィオは小さいヴィヴィオの時と少し反応が違い、少し顔を赤くして恥ずかしそうにしていた。

ヴィヴィオ「お兄ちゃん、恥ずかしいよ／／／」

恥ずかしそうな表情をしたあと、すぐに表情を戻しヴィヴィオはなのはを見据えた

ヴィヴィオ「私は貴方達を許さない、お兄ちゃんはアインさんと一緒に管理局の闇を潰していただけなのに、貴方は犯罪者扱いをした」

そしてヴィヴィオは戦闘態勢になり、なのはにいつでも攻撃できるように準備した

なのは「待って話あえば「うるさい！」っ！」

ヴィヴィオ「もう言葉はいらない、話がしたいなら私を倒して」

そして二人の戦闘の火ぶたが切って落とされた

セレナードｓｉｄｅ

今はティアナが幻術を使ってノーヴェ達を撹乱しているようだけど時間の問題ね。せいぜい頑張ることね、ふふふ。

ノーヴェ「はぁぁぁぁぁ！！このカスが！そのちゃちな射撃も幻術も無駄なんだよ！！！」

ノーヴェはティアナのフェイクシルエットをどんどん撃って消していく

ディード「（なかなか・・・しぶとい）」

ウェンディ「（つっても、応援が来られるまで逃げ切られるのもまずい。さっさと潰して次ぎいかねえと！）」

二人は走りティアナの隠れて居るところを捜すがなかなか見つからない。

ノーヴェ「ん・・・（見つけた）」

三人は一斉にその場所に向かって行く。

ティアナ「はぁ・・はぁ・・はぁ・・はぁ」

ティアナはかなり疲れているようだがそこにクロスミラージュから
戦闘機人達に見つかったと報告を受けた

ティアナ「シューターとシルエット制御ＯＫ、このまま現状維持。
ここで向かい撃つ！」

クロス「Ｙｅｓ」

そしてクロスミラージュを一丁から二丁にして立ち上がる

ティアナ「〜右足も潰されてカートリッジも魔力ももうあとちょっ
と、頼みの綱の最後の一発勝負も通用するかどうか〜・・・・・ほ
んとはさ、ずいぶん前から気づいてたんだ。私はどんなに頑張って

も万能無敵の超一流になんてきっとなれない。悔しくて情けなくて認めたくなくてね、それは今もあまり変わらないんだけど・・・だけどっ！」

そう言っていると天井が破壊され、そこにノーヴェとディードが襲いかかる。ディードがツインブレイズで攻撃し、ティアナはあクロスミラージュをダガーモードに受け止めるがディードの後ろからノーヴェが体を回転させながら蹴りかかりその場に煙が立ちこめる。ティアナは上に逃げようとするがそれをウェンディが狙い撃つが幻影だった。

煙が晴れるとティアナがクロスミラージュの一つをダガーモードにもう一つを銃にし魔力弾を二つ浮かばせていた。あれは何か考えてるわね、一発逆転の手を。

ウェンディ「（逃げない？）」

ディード「（罠か）」

ウェンディ「（本物なのは間違いないっすね）」

ノーヴェ「（ああ、本物だ）」

ディード「（油断しないで、同時攻撃で一瞬で仕留める）」

ティアナはこの間にいろいろなことを考えるがあることに気づいた

ティアナ「〜やっぱり、最初の時と同じポジショニングだ。こいつらの唯一の穴、完璧だけど単純な連携、コンビネーションの初動を見抜けば〜」

そのときビルを囲っていたＡＭＦが解除された。あらあら、どうやらオットーが捕まったみたいね。まだ静観でいきましょう。

ノーヴェ「このー！！！！」

ディード「・・・」

二人がティアナに向かって突っ込みウェンディは攻撃の魔力弾をチャージし始める。

ティアナ「ここ！！！」

ティアナはタイミングをはかり、二人に浮かせていた魔力弾を放ち、一瞬動きを遅らせ、その隙にウェンディに攻撃をして爆発が起こる。そしてディードが後ろから斬りかかるがそれ受け止め、最初にティアナが放った魔力弾が戻ってきてディードとウェンディに直撃して戦闘不能になり、ノーヴェだけになる。

ノーヴェ「ディード！ウェンディ！」

ティアナ「貴方達を保護します。武装を解除しなさい！！」

地上本部レジアスの部屋

中にはレジアス、ゼスト、オーリス、女性局員、そして分身の僕を含めた5人が中にいた。僕は隠蔽魔法で隠れて居ますよ。

ゼスト「俺はお前のためになら殉じる覚悟があった。だが俺の部下達は何のために死んでいった、どうしてこんなことになってしまった。俺たちが守りたかった世界は、俺たちがほしかった力は、俺とお前が夢見た正義はいつの間にこんな姿になってしまった。」

そしてレジアスが言葉を発しようとしたとき胸を何かに貫かれた。痛そうですね、今の僕は貫かれても平気ですが、痛みはありますからね。

レジアス「ぶはぁ・・・」

レジアスは血を吐き、ゼストはバインドで拘束されてレジアスの後ろには女性局員が立っていた。

オーリス「父さん!!!」

オーリスがレジアスに近づいていこうとするが女性局員に吹き飛ばされ、本棚にぶつかった。

ドゥーエ「お勤めご苦労様です。貴方はもうドクターの今後にとってお邪魔ですので」

レジアス「ゼスト・・・・俺は・・・・俺は・・・・」

ゼスト「レジアス・・・」

レジアスはゼストに手を伸ばすが途中で力尽き倒れた。ゼストは倒れたレジアスをじっと見ていた。

ドゥーエ「さぁ、これにて貴方の役目も復讐も終わりです」

ゼスト「いつでもそうだ、俺は遅すぎる」

そう言われドゥーエは何かを感じ取り、ゼストはバインドを破壊す

る。

ドゥーエ「なっ！」

そしてゼストは斬りかかり、ドゥーエはいきなりのことで反応できず、もうダメだと目を瞑り妹達に会えなかったことを悔やんだ。

パシィィィン

と音がして目を開けてみるとそこにはゼストの攻撃を指二本で止めているカイザーの姿があった。

ドゥーエ「・・・えっ！！」

ゼスト「お前は！！！」

ゼストも驚いていた。先ほどまで部屋にはカイザーの気配はどこにも無かったのにいきなり現れたからだ。

カイザー（分）「貴方がＮｏ．２のドゥーエで間違いないですね」

ドゥーエ「え、ええそうよ。私がドゥーエよ」

カイザー（分）「そうですか、見てこいと言われたので来て正解でしたね。ここに居てもしょうがないでしょう。僕が安全な所に送りましょうか？と言ってもオリジナルの所ですけど」

ドゥーエ「オリジナル？貴方はクローンなの？」

カイザー（分）「いいえ、僕は魔力だけで作られた一時的な存在です。時間が経てば消えてしまいますよ、それでも限りなくオリジナルに近いですから同じ魔法が使えますけどね。さぁ早く行きましょう、援軍が来るかも知れません」

ドゥーエ「そうね、じゃあお願い。」

そしてドゥーエの足下に魔法陣を発生させる。そこにシグナムとリイン、アギトが入ってきた。

アギト「兄貴！」

カイザー（分）「アギト、貴方はそちらに付いたのですか。確かにアギトにはシグナムの魔力変換資質はぴったりですからね。構いませんよ、貴方がロードと認めた人物ならば、しかし敵になるのならば容赦はしません」

アギト「兄貴、ごめん」

シグナム「これはお前がやったのかカイザー」

カイザー（分）「僕ではありませんよ、時間が迫っているのでさよなら」

シグナム「逃がすと思うかカイザー」

そしてレヴァンティンをカイザーに向けていつでも捕まえられる体勢になる

リイン「逃がしませんよ！」

カイザー（分）「もう遅いですよ」

そして足下の魔法陣が発動してドゥーエと分身のカイザーは転移した

第三十九話

ジェイルアジト

ゆりかごからジェイルに通信を入れたのですが応答してくれません。
もしかしてやられたのでしょうか?あそこに行く可能性があるのは
フェイトですね。と考えているうちに応答してくれたみたいです。

カイザー「やっと出てくれましたね，ジェイル大丈夫ですか?」」

しかし通信モニターに映ったのはジェイルではなくフェイトだった

フェイト「カイザー、ジェイル・スカリエッティと戦闘機人は倒し
たよ」

カイザー「そうですか、それでどうするんですか？そこからでは今からゆりかごには来れませんよ」

フェイト「ゆりかごにはなのはが居るから大丈夫。ゆりかごの外にははやてと空戦魔導師も居る、この戦いは私たちに勝ちだよ」

フェイトは自分たちの勝ちを確信したような表情をしている。あの自身はいったいどこから来るのでしょうかね。現実を見せてあげますか。

カイザー「フェイト、確かに普通の相手ならリミッター解除したなのはには勝てないでしょう。でも今戦っている相手は聖王なんですよ。」

そう言ってフェイトになのはが映っているモニターを拡大して表示する。

フェイト「そんな・・・なのはが!!!」

フェイトが見たモニターにはヴィヴィオがなのはを吹き飛ばし、壁にめり込んでいる映像だった

カイザー「フェイト、これが現実ですよ。確かになのははエース・オブ・エースです。でも上には上がいるってことですよ。もうすぐゆりかごが予定の軌道に乗りますので、また会いましょう。」

そしてカイザーはフェイトとの通信を終えて、モニターが消えた

ゆりかご駆動路

ヴィータは先ほどまでのカジェットの戦闘でボロボロになり血を流していた。そして目の前に駆動路が見えもうすぐつける所だったがアインが立ちふさがった

アイン「ヴィータ、ボロボロだな」

ヴィータ「何でここにお前がいるんだよ！アイン！！！」

ヴィータは自分の前に立ちふさがったアインに向かって叫んだ。ア

インはそれを気にせずしゃべり続ける。

アイン「そんなものは決まっているだろう。ここを守護するためにいるのだ」

ヴィータ「何でだよ！これのせいで多くの人が犠牲になるんだぞ！！」

アイン「犠牲はでない、すでにミッドチルダ照準から外れている。それでも駆動路を破壊するというなら、相手をするぞ」

そしてアインは自分のデバイスを剣状態して構える

ヴィータ「あたしは何としてもここを破壊しなくちゃいけねえんだ！」

そしてヴィータもアインにアイゼンを向けて構える。そしてお互いに突っ込んで行く

ヴィータ「うおおおおおおおおおお！！！！！！！」

アイン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ガキィィィィン

お互いの武器がぶつかり火花を散らすがヴィータのアイゼンはガジェットとの戦闘でボロボロになり罅が入っており、今の衝突でさらに罅が入っていく。そしてお互いに距離をとり体勢を整えた

ヴィータ「っ！アイゼン、もう限界が近いか。次の一撃で決める」

アイン「なら私も次の一撃で決めよう。カイザーから教わった技を改造した技だかいけるだろう」

そしてお互いに心を落ち着かせる

ヴィータ「アイゼン、リミットブレイク！・・・・ツェアシュテールングスハンマー！！」

ヴィータはリミットブレイクでアイゼン巨大なハンマに変形し先にドリルが付き、後ろには加速装置が付いた状態になりカートリッジを一つロードし、加速装置に点火され、アインに向かって行く

アイン「いくぞ・・・・覇龍九重瞬撃！！」

アインは自分の剣にカイザーから教わった覇気を纏わせ一瞬のうちに九つの重い一撃を放つ

ヴィータ「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

アイン「はぁぁぁぁ・・・・・・はぁっ！！」

そしてお互いの攻撃がぶつかる。アイゼンはミシミシと音を立てて徐々に罅が大きくなり，ついにパキンと言う音が鳴りアイゼンが折れた。

ヴィータ「・・・・・・ごめんね・・・・・・は・・・・・・や・・・・・・・・・て・・・」

そしてヴィータは崩れ落ちて気を失った。

アイン「危なかったな、もう少しデバイスを強化してなかったらこちらが砕けていたかもな」

自分のデバイスを見ながら呟き、ヴィータを壁に横たわらせてアインは再び駆動路の守りについた

ゆりかごの外

はやてと魔導師達はベリオが現れてからどんどん落とされていき、ベリオを倒せずにかなり苦戦していた

はやて「今、空戦魔導師は何人残っとる?」

隊員「はい、今は最初の頃と比べて八割があの龍に落とされました。今もあの龍と交戦していますがまるで歯が立ちません」

はやて「わかったわ、引き続き頼むで」

隊員「はい！！」

そしてベリオの方に向かって行った。

はやて「まずいな、このままやとゆりかごが軌道上に乗ってしまう。中に入ろうにもあの龍が守ってるから、迂闊に近づけへん。まったく、なんてもんを出してくれとんのや！・・・私も突入や」

はやてはベリオに向かって行き、隙を伺いゆりかご内部に突入する

タイミングをはかるがなかなか訪れない。

ベリオ「ギャオォォォォォォォ！！！！！」

はやて「今や！！」

そしてはやてが隙を見つけゆりかご内部に侵入することに成功した。
そして、はやては駆動路にいるヴィータの元に向かった。ベリオはそれに気づいたが気にせずに周りの魔導師を倒していった。

ゆりかごご玉座の間

玉座の間ではかなりの高速戦闘になっているがヴィヴィオにはほと

んどダメージを受けていないが、なのは所々バリアジャケットがやぶれている

なのは「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・なんでこんなに強いの」

なのはは肩で息をしながら何とか立ち振る舞っていた。それを少し前に転移してきたドゥーエと見ていた。ヴィヴィオもなかなか強くなりましたね、ですがまだまだ甘いですね。

ヴィヴィオ「貴方はこの程度ですか、私に勝負を挑んでおきながら」

ヴィヴィオは腕を組み上からなのはを見下ろしながら言い放ち、手に虹色の魔力弾を複数生成し自分の周りに浮かす、そしてなのはに突っ込んで行く。

ヴィヴィオ「はぁぁぁぁぁ！！！！！」

ヴィヴィオは蹴りを放つが空中に回避される。そして、なのはに浮かせておいた魔力弾を全方向に放ち、魔力弾を近くで破裂させぶつける。プロテクションで防ぐが上から吹き飛ばされ床に叩きつけられる。そこに追い打ちをかけるように先ほどより大きな魔力弾を生成し、それを右拳で殴り勢いをつけさせ飛ばす。

レイジ「Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ」

ラウンドシールドでヴィヴィオの攻撃を防ぎ、なのはが反撃に出る。

なのは「ブラスターツー！！！」

そしてヴィヴィオを衝撃波で後退させ、レイジングハートの先の形をしたような物が二つ現れヴィヴィオに向かい、バインドをかける。

なのは「ブラスタービット、クリスタルゲージ・ロック」

そしてなのははヴィヴィオにクリスタルゲージのピラミッドに閉じ込める。甘いですね、ヴィヴィオは僕のデュアルバインドを一応抜け出せるんですよ、そんな物は無意味ですね。

ヴィヴィオ「こんなのは私には聞かない、お兄ちゃんのバインドの方が数倍強い・・・はぁぁぁ！バリアブレイク！！！」

ヴィヴィオはなのはに掛けられたバインドを引きちぎり、クリスタルゲージを右手に力を込め殴りつけた。そしてクリスタルゲージはパリィィンと音を立てて崩れ去った。

カイザー「ああ、そうか」

ドゥーエ「どうかした？」

カイザー「いえ、あのなのはが使っているブラスターモードの正体がわかりました。あれは術者の限界を超える自己ブースト、そして術者が使えば使うほど術者の命とデバイスの命を削っていきますね。使うほど自分が苦しくなります。もうそろそろヴィヴィオに決めてもらいましょう。」

そしてカイザーはヴィヴィオに念話を飛ばし内容を伝える

カイザー「（ヴィヴィオ、聞こえますか？）」

ヴィヴィオ「（聞こえるよ、どうしたの？）」

カイザー「（もうそろそろ決着をつけてください、時間です）」

ヴィヴィオ「（うん、わかった。すぐに終わらせる）」

そしてヴィヴィオは先ほどよりも真剣な顔つきになり、なのはを見て言い放った。

ヴィヴィオ「もう時間がないようだから、さっきより本気で行くよ」

ヴィヴィオは虹色の魔力光が数倍のなり、今までの構えとは違う構えをする

なのは「そんな・・・あれで本気じゃないなんて・・・」

なのはも構えるがいきなり目の前にヴィヴィオが現れ、顎を掌で打ち上げられて一瞬意識が飛び動きが止まる。そこに体を回転させ反動を利用してなのはの頭を蹴り飛ばし壁に叩きつけた。そこでなのはの意識は無くなり、そのまま床に落ちていった。

ヴィヴィオ「・・・ふう～」

カイザー「ヴィヴィオ、お疲れ様」

ヴィヴィオに近寄り頭を撫でてあげると嬉しそうに笑ってくれた。

ヴィヴィオ「んぅ～～／／／」

カイザー「もうすぐゆりかごが予定軌道に乗ります。それまで楽にしていてください、それよりヴィヴィオのその姿はいつ戻るんでしょうか？ヴィヴィオ、戻れと念じれば戻りますか」

ヴィヴィオ「やってみる」

そしてヴィヴィオが自分の中で念じると虹色の光に包まれて、光が収まると元の姿に戻っていた。

カイザー「できましたね。では休んでいてくださいね」

カイザーは気絶しているなのはの元へ行き、ドゥーエとヴィヴィオの元に連れて六晶結界とクリスタルゲージで拘束してその場に寝かせておいた。

カイザー「ドゥーエ、貴方はどうするんですか？ほとんどのナンバーズは捕まって、残っているのはおそらく、貴方とゆりかごにいるクアットロだけですよ。僕は今回は皆さんが捕まってしまったので管理局は数年後かそれくらいに破壊しに行こうと思いますが」

ドゥーエ「私は貴方について行くわ。その方がおもしろそうだしね」

カイザー「わかりました。僕はルーテシアの治療をしてからアインの所に行きますよ。そう言えば次元戦艦がこちらに向かっているようですがゆりかごには僕のレアスキルを応用した防衛プログラムが作動してますのでそちらの心配はいりませんので。では早速、ルーテシアの治療をしますね。」

ヴォルフに送られたままなので結界を解除し、呪文の詠唱を始めた。そして終わる直前に体が光り、指をパチンと鳴らすと光が収まり治療が終了した。そしてカイザーはアインの元に向かっていた。

第四十話

ゆりかご駆動路前

はやてはゆりかごに侵入してからまっすぐ駆動路に向かっていた。
途中にカジェットの妨害もあったようだがなんとか駆動路の前についた。その視界に入って来たのは壁に寄りかかって気を失っているヴィータと駆動路の前に陣取っているアインだった。

はやて「ヴィータ！！」

アイン「落ち着いてください、ヴィータは気を失っているだけです。ここに来たと言うことは貴方も駆動路を破壊しに来たのですか？」

はやて「そうや！これを止めんとえらいことになるんや！！」

はやてがそう叫ぶがアインは冷静に答える

アイン「守護騎士の中で物理破壊の能力の一番高いヴィータがやられた以上貴方には手は残されていないでしょう。」

はやて「くっ！・・」

はやては事実を突きつけられて何もできない自分が情けなくなって下唇を噛み血が出ていた。アインはそれをただじっと見ていた。

アイン「はやて、貴方にはよくない情報ですが教えてあげましょう。先ほどゆりかごの玉座の間で戦闘が終了しました。」

はやて「玉座の間？確かなのはちゃんが向かった場所のはずや」

アイン「そうです、高町は玉座の間に行きヴィヴィオとの戦闘になりました。」

はやて「ヴィヴィオ？」

アイン「貴方達が見つけた少女です。その子が高町と先ほど戦い勝ちました。」

はやて「そんな！なのはちゃんがそんな簡単に負けるはずない！！・・・・っ！」

はやてはなのはがヴィヴィオに負けたことが信じられなかったがアインが玉座の間のモニターを出し、それをはやてに見せ、はやては黙ってしまった

アイン「そしてたった今ゆりかごは予定軌道に到達しました」

そしてはやてはその言葉を聞いて崩れ去った。

はやて「そんな・・・ゆりかごが・・・軌道上に・・・・カリム・・

みんな・・・・ごめん」

アースラｓｉｄｅ

シャーリー「たった今ゆりかごが惑星軌道上に乗りました。八神部隊長達は間に合わなかったようです。」

グリフィス「そんな、部隊長・・・」

シャーリー「次元艦隊から連絡！クロノ提督からです」

そしてクロノから通信が来た。

クロノ「先ほどゆりかごから連絡が来て、ミッドチルダを撃つつもりはないと言って次元艦隊を引けと言ってきた。そしてなのは達も今はゆりかご内にいると言ってその映像も見せられた、それで撃てるものなら撃ってみろと言われた。三提督達の判断によって今回は艦隊を引くことになった。」

グリフィス「それはどういうことですか？」

クロノ「つまり今回はあちらはもう攻撃はしてこないそうだ。数年後はどうなるかわからないと言っていたが。だから今回の騒動は終わりだ。そして艦隊が完全に引いた後になのはたちをそちらに送るだそうだ」

そう言って通信が切れた。

地上市街地

ヴォルフはエリオ達を拘束した後に地上の魔導師達を少し叩いたあとトルムと話をしていた所にカイザーからの撤退命令が届いた。そしてヴォルフはエリオ達のもとに行き拘束を解いた。エリオ達は不思議そうな顔をしていた

ヴォルフ「先ほど主から撤退命令が出た。だから今回は引くことになった。」

エリオ「つまり、今回はもう何もしないってことですか？」

ヴォルフ「そうだ、数年後はどうなるかわからないがな。ではな」

そう言って足下に魔法陣を展開し、転移して言った。トルムもそのときに消えた。

エリオ「キャロ、僕達も他の人たちを手伝わないと」

キャロ「そうだね、行こうエリオ君！」

そして二人も魔導師達に合流し手伝いをしにいった。

セレナードｓｉｄｅ

さっきカイから撤退命令出たからもう行かないといけないわね。最後にティアナに挨拶でもしてから行きましょうか。

セレナード「ノーヴェ！作戦失敗、ドゥーエとクアットロ以外全員捕まったみたいよ。貴方はどうする？」

ノーヴェ「そうか、あたしはウェンディ達と一緒に居るよ。」

それを聞いてもセレナードは別に驚かなかった。そう言うとわかっていたようだ。

セレナード「そう、ティアナ。今度は数年後に会いましょう、ノーヴェ、他の子達にもよろしくね」

ティアナ「待ちなさい！！貴方を逮捕します。動かないで」

セレナードはティアナ言葉を無視して外に向かっていく。そして、ティアナは攻撃しようとするがノーヴェに止められる

ノーヴェ「やめとけ、無駄なことはするな」

ティアナ「どうして邪魔するのよ！仲間だったから！！」

ノーヴェ「ちげぇよ！セレナードには絶対にお前じゃ勝てない。あたしら三人にこれだけかかってんのに、あいつはあたしらを倒すのに一分もかからないんだぞ」

それを聞いてティアナはセレナードを追うのは諦めたようだ。

ゆりかご

カイザーは次元艦隊が完全に引いたのを確認するとアインが連れてきたヴィータとはやて、そしてなのはとルーテシアを中央にあつめた。

カイザー「次元艦隊との交渉が終わって完全に引いてくれましたのでなのはたちをアースラに転送しますね。」

はやて「カイザー君、そこの子らはどうするんや?」

はやてはカイザーの左にいるドゥーエとを指す。

カイザー「ドゥーエとクアットロは僕達と一緒に来てもらいますよ。」

はやて「でも、その子らは今回の主犯「何か言いましたか?」っひ

！・・・なんでもないです。」

はやてはその子たちを一緒に連れて行こうとしたがカイザーの威圧感のある声にびびってしまった。

なのは「その、カイザー君・・・あのときヴィヴィオが言ってたことは本当なの？」

カイザー「さぁ、そんなことは自分で考えてください。それとルーテシア。」

ルーテシア「・・・・何？」

カイザー「これを眠っているお母さんの首に掛けて・・・・と唱えてください。そうすれば貴方のお母さんはすぐに目を覚ますと思いますよ」

カイザーはルーテシアにネックレスを渡して耳元で小さく呟いた。
するとルーテシアはいつもの表情が崩れて驚いていた。

ルーテシア「ほんとに?」

カイザー「僕は嘘はつきません。さぁ、そろそろ時間です。また、数年後に会いましょう。」

ルーテシアはカイザーがあげたネックレスをとても大事そうに握っていた。ルーテシアのお母さんはジェイルの所で一応スキャンしてみましたが仮死状態になっていただけですからあれで治るでしょうね。そしてなのはたちの足下に魔法陣を展開させアースラに転移させた。

カイザー「さぁ、僕達は計画の準備でも徐々に始めましょう」

アイン「そうだな、あの者達が真実に近づけばよいのだがな」

セレナード「私はどこまでもついて行くよ」

ヴォルフ「主と共に行きます」

ヴィヴィオ「わたしももっと強くなってお手伝いする」

ドゥーエ「ふふ、楽しくなりそうね」

クアットロ「はい、カイザー様の言うとおりに」

なぜクアットロがこのようになってしまったかというとカイザーのお仕置きを受けて性格が変わってしまったのだ。カイザーは素直になってよかったと思っている。

第四十一話

三ヶ月後

事件は一時の解決を見たが納得していない人たちも多いようだ。そして調査に協力的でないジェイル、ウーノ、トーレ、セッテは各世界の軌道拘置場に投獄されて、協力的なチンク、セイン、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディードはミッド海上の隔離施設にいる。ちなみにルーテシアとアギトも入って居た。

セイン「お嬢様はすぐに出られますね。」

ウェンディ「精神操作にその他諸々」

ルーテシア「・・・うん」

ウェンディは何かを思い出してルーテシアに聞いた

ウェンディ「そう言えばルーお嬢様、お母様は」

ルーテシア「カイザーに言われた通りにやったら目を覚ました」

二人はカイザーの名前が出てきたことに驚いたようだ

ウェンディ「カイ兄っすか！」

セイン「カイザー兄か、間違いなく天才だよね。今頃どうしてるのかな～」

アギト「もう兄貴とも敵になっちまったんだよな。研究所から助け出してもらった恩があるのにな」

アギトも敵になったことを少し悔やんでいるようだった。

ルーテシア「彼なら数年後に管理局を潰しに来ると思う」

ウェンディ「どうしてっすか？」

ルーテシア「数年後に何か起こすって言ってたから」

セイン「もし、カイザー兄と戦うことになったら勝てる気がしないね。だってカイザー兄は本気になったことが無かったし、常にリミッターをつけてるからさ」

セインは戦うことになったら絶対に勝てない自身があるようだ、ウェンディやアギトも納得しているのかうんうんと頷いている

ウェンディ「それにカイ兄の周りにいる人たちは強すぎっす。セレナードも私たちではまるで歯が立たないし、アインさんもカイ兄の次に強いし、ヴォルフさんだって誰一人として勝ったことないっす。そして何よりもヴィヴィオっすよ、ヴィヴィオは聖王だし、カイ兄が直々に教えていたっすから。カイ兄の技術力はたぶんドクターよりも上っす。戦うって考えただけで鳥肌が立つっす。」

聖王協会

今ここにははやて、カリム、クロノ、ヴェロッサ、シャッハが集まり今回の事件のこと思い出し話し合っていた。

クロノ「はやて、あの事件が終わってからやけに静かじゃないか。どうかしたのか?」

はやて「シグナムから聞いたレジアス中将の話が私も同じ思いがあるなとか思ってな、それでゆりかごでヴィヴィオがなのはちゃんに言ったことを考えとったんや。」

カリム「確かカイザーは管理局の違法研究所だけを潰して回ってい

ただけ、でしたか。」

はやて「そうや、それで数年後にカイザー君は管理局を潰しに来るってことや。正直カイザー君らと本気の戦闘になったら勝てる気がせん。カイザー君は常にリミッターがかかっとるし、他のメンバーも強い、ヴィヴィオに至ってはなのはちゃんにほぼ無傷で勝利しとる。」

はやてはクロノ達に言っているうちにどんどん顔色が悪くなっている。

シャッハ「実際に戦ってみてわかりますが、彼は常に私たちに手加減をするように戦っています。」

はやて「その通りや。カイザー君は今まで戦った人に常に怪我が最

小限になるようにしとる。今カイザー君の元におるメンバーの名前をあげると。まず、カイザー君や、彼の本当の実力はわからんけどリミッター付きでSランク、次にセレナードや、彼女はたぶん古代ベルカのユニゾンデバイス、リミッターでAAAランク、なしでS＋ランク、次にアインや、アインは元夜天の魔導書の管理人格で本当はもうこの世におらんはずやった」

カリム「この世にいない？」

カリムはこのことを疑問に思ったようだ

はやて「そう、カイザー君によって甦らせられて今は人間になっとる。そしてランクがリミッターでAAA＋、なしでランクSSSある。次が使い魔のヴォルフや、ランクがSS、次にヴィヴィオや、彼女は聖王のクローンで聖王モードって言って大人の姿になれる、ランクはわからんけどリミッターを外したなのはちゃん、無傷で勝つほどの実力をもっとる。それで最後がジェイルによって生まれたナンバーズのNo．２のドゥーエ、No．４のクアットロや。ドゥーエに至ってはレジアス中将を殺しとる。これが今わかっとる戦力や」

それを聞いた全員がそのメンバーの実力に唖然として沈黙していた。
そして最初に口を開いたのはクロノだった。

クロノ「メンバーの実力が凄まじいな、管理局でも少ないランクＡＡ以上が五人以上もいる。おそらく、今度は本気で来るだろうから対策を立てておかないとまずいな、はやて、また六課のメンバーを集める時が来るかも知れないな。」

はやて「たぶん、そうなるやろな。だから全員に強くなってもらわないかんな」

カリム「もし、戦うときになったときは聖王協会も強力するわね」

はやて「ありがとう、カリム」

そしてはやて達は解散してそれぞれ帰っていた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9240k/

黒衣の少年

2010年10月13日08時43分発行